

地獄の一季節註解 (十)

小田良弼

Parents, vous avez fait mon malheur et vous avez fait le vôtre:—

この Parents は両親の意味での Parents ではなく。Comédie de la Soif, I, Les Parents に於ける Parents である。一切衆生の救済を念じて至心に廻向する、呼びかけてやまない親達である。一切の存在の根拠の世界に、宿命としての幸福の世界に (Cf. Délires, II, p. 60, 61; O Saisons, ô Châteaux.) 立ち還ることを、呼びかけてやまない親達である。

しかもその呼びかけは単なる否定的彼岸の世界への呼びかけではない。

Nous rentrons du cimetière. (Les Parents)

墓所は見納めとすることだ。

と云ってある様に、根拠の世界、宿命としての幸福の世界は、有を、le monde の réalité を媒介としてのみ現成するものであり、けっして単なる死の世界にあるのではなかった故に、この現実世界に、泥中に身を処することを求めるわけである。またそこにあって慈悲救済を行じるこ

地獄の一季節註解 (十)

とを求めるものである。かくて、vous avez fait mon malheur と云ふわけである。それが泥中であり、その結果の一面として苦悩行をまぬがれないとすれば、vous avez fait mon malheur と云ふわけである。また Parents 自らも、けっして彼岸の清浄なる世界にあって呼びかけてあるのではなく、此岸にあって呼びかけてやまない Parents であるとするれば、Parents 自らもまた苦悩行はまぬがれないわけである。et vous avez fait le vôtre と云ふ所以である。かかる malheur の中からこそ “le chant clair des malheurs nouveaux” ——新らしい不幸の清澄な歌声——がうたひあげられるのである (Cf. Génie.)。

Pauvre innocent :—

innocence は ennui, mort, patience の超克に、無化往相即有化還相としての絶対肯定の立場に出てきたものであった。またそこに豊かな生々流転の世界も展開せられ、そこにこそ前後際断的に一歩一歩の一事一事に、想憶することもない、一種の嬰孩行としての innocence が出てきたのであった。これが、此岸の有に足を据ゑる立場においてあるが故に、ランボオにとって一方苦悩行をまぬがれなかったのである。今、

「自らの手足を切つて」「己が catéchisme を実行」しようとする「不幸」なる有化還相行にあつては、Pauvre innocent と云ふわけである。

Cf. Comédie de la Soif, 4, Pauvre Songe.

Puisque c'est pure perte!

Et si je redeviens

Le voyageur ancien,

Jamais l'auberge verte

Ne peut bien m'être ouverte.

いやち、無駄ぢ、無駄事だ。

いづれはもとの黙阿弥の

旅人姿で帰つて来ても、

緑の旅籠がこの俺に、

開いてゐよう筈はない。

単なる死の寂靜の世界は、*「口のなら七頭蛇」* (Cf. Comédie de la Soif, 2, L'Esprit : Hydre intime sans gueules / qui mine et désolé. — 親つら七頭蛇にや口がなご、／お蔭で俺は身も世もなご。) であり、身も世もなく嘆かざるを得ない。豊かな生命の展開には、命のはけ口 *gueules* がなければならぬ。有を媒介とすることなしには不可能だ。だから同じく 3, Les Amis で

J'aime autant, mieux, même,

Pourrir dans l'étang,

Sous l'affreuse crème,

Près des bois flottants.

池の藻屑と腐るも同じぢ、

どうして、よっぽどましかも知れぬ。

むかつくクリームの下敷で、

朽木がぶよぶよ浮いてるか。

といふわけである。かかる此岸の有の世界に、泥中に身を処しようとする有化還相行には、*「l'auberge verte」* は開かれなわけである。Pauvre innocent と云ふわけである。

L'enfer ne peut attaquer les païens : —

この païen はキリスト教の立場からみればの païen である。絶対肯定的に此岸の現世に身を処しようとするランボオの立場をちして païen といふのである。それは泥中に身を処する苦惱行として一面 enfer である。しかしそここそ Dieu は現成するのである。汚濁即清浄、清浄即汚濁として、いはばかかる enfer が即神の世界であった。だからこそ plus tard, les délices de la damnation seront plus profondes と云ふ、また je suis caché et je ne le suis pas — 俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない——といひ得るわけである。この様に enfer は単に enfer に過ぎないのでなく、それが即神の世界であるが故に *“je ne le suis pas”* であるが、同時に *“je suis caché”* であるのである。かかる立場にある païen に対しては enfer も手がつかないわけである。

C'est la vie encore! Plus tard, les délices de la damnation seront plus profondes : —

かく汚濁即清浄、清浄即汚濁として enfer が即神の世界であるところに、抽象的観念的ではない具体的な神の世界としての此岸の vie が

あるのだ。

それが一面におろつて damnation として苦惱行はまぬがれなうとして
あゝ enfer 即神の世界として、その damnation の中にあつて délices が
あるわけである。それは愛の世界であり、無畏の世界であり、悔のない
一歩一歩に神の現成を行ずる世界であるからである。ちぎにも (p. 33)。
C'était des millions de créatures charmantes, un suave concert
spirituel, la force et la paix, les nobles ambitions, que sais-je?
Les nobles ambitions! とつていふ。

p. 33 のこの箇所ですべてに説明した様に、かかる有即無、無即有なる、
矛盾が矛盾のまま相即する世界が douceur の世界であった。有を媒
介とする限りにならうて enfer としての苦惱行をまぬがれず、しかもその
あゝ douceur の世界として、その délices を出づるののである。

Cf. Barbare.

Oh! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et
des fleurs archiques ; (elles n'existent pas.)

Douceurs!

Les brasiers, pleuvant aux rafales de givre, — Douceurs!
—— les feus à la pluie du vent de diamants jetée par le coeur
terrestre éternellement carbonisé pour nous. — O monde! ——
(Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on
entend, qu'on sent,)

Les brasiers et les écumes. La musique, virement des gou-
ffres et choc des glaçons aux astres.

地獄の一季節註解(中)

O Douceurs, ô monde, ô musical! Et là, les formes, les
sueurs, les chevelures et les yeux, flottant. Et les larmes
blanches, bouillantes, —— ô douceurs! —— et la voix féminine
arrivée au fond des volcans et des grottes arctiques.

あゝ。血を滴らす生肉の旗、海の絹と北極の花々の上に。(いづれ
もこの世に存在せぬが。)

優美なものよ。

炭火は、氷花の旋風に吹かれて雨と降る、——優美なものよ。——
俺達の為に永劫に炭化された大地の心が、金剛石の風雨を投げかけ
る、その火だ。——あゝ、世界よ。——

(人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隠遁や古めかしい
情火とは、遙かに遠く離れて、)

炭火と泡。音楽は、深淵の旋廻と、氷塊が星への激突。

あゝ、優美なものよ、あゝ、世界よ、あゝ、音楽よ。そして其処に
漂つてゐる、形態が、汗が、髪の毛が、眼が。そして沸騰する白い
涙、——あゝ、優美なものよ、——そして火山と北極の洞窟との奥底
までも行きついた女の声。

それはけつして単なる否定的彼岸の世界への vieilles retraites であ
る vieilles flammes でもなく、此岸における有を媒介とする豊かな流転の
世界でもあるわけだ。いふなら、illustre retraite (Cf. Vies.) である。

Cf. Solde.

Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices
insensibles, —— et ses secrets affolants pour chaque vice ——

et sa gâle effrayante pour la foule.

不可見の光彩、不可知の歓喜への、狂気じみた、無際限の飛躍。

——そしてその物狂ほしい様々な秘密は、各人の悪徳のためだ、——
その恐ろしい喜びは群集のためだ。

Cf. Génie.

Il est l'affection et le présent puisqu'il a fait la maison
ouverte à l'hiver écumeux et à la rumeur de l'été, Lui
qui est le charme des lieux fuyants et le délice surhumain
des stations.

泡立つ冬に、夏のざわめきに、家を明け放つたからには、彼は愛情
だ、現在だ……移り行く様々な地点の魅惑でもあり、様々な停止点の
超人的な歓喜でもある彼。

しかもかかる délices de la damnation が後になる程深まって行くこ
とは当然のことといふよう。相対性の自覚、悪の自覚、自己否定によっ
て délices に転換せられるのであり、自覚が深まれば深まる程、度を
重ねるに従って délices も深まって行くわけであるから。

このところにはランボオの有の絶対肯定的な積極性を最もよく語って
あるところと見てよいであらう。その神がけっして単に否定的彼岸的で
はなく、此岸における有を媒介とする豊かな積極的流転の世界における
ものであったのである。不毛の地や袋小路に入ることのない流転展開の
世界、具体的積極性をもった世界であったのである。 Mauvais Sang,
p. 23 や

je voyais une mer de flammes et de fumée au ciel; et, à

gauche, à droite, toutes les richesses flamboyant comme un
milliard de tonnerres.

俺は天上に焰と煙との海を見たし、左に右に、数限りもない霹靂の
やうに、燃え上るあらゆる豊麗を見た。

どうしてあるところと照応するところがある。O Seasons, ô Châteaux
もかかる神の世界からのみ生れ得た詩であるといふよう。

Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi hum-
aine : ——

この crime は単な道徳的な意味での crime ではない。ランボオ的
世界現成の媒介となる一切の相対的有の世界をさしていふのである。相
対的であること自体が、相対性の故に crime であるからである。かか
る crime にしっかと足を据えて、抽象的観念の世界へ逃避しないこと
においてこそランボオ的世界、ランボオにおける神の世界が、此岸にお
ける具体的な神の世界が現成する故に crime, vite といふわけである。
そして Les délices de la damnation というところに入るわけである。

Cf. Mauvais Sang, p. 20.

On ne part pas. —— Reprenons les chemins d'ici, chargé de
mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon
côté, dès l'âge de raison —— qui monte au ciel, me bat, me
renverse, me traîne.

出発は見合はせだ。——この身の悪徳を背負って、また足元の道を
辿り直すとしよう。分別がつく年頃になってこの方、俺の脇腹に苦惱
の根を下した悪徳を、——空にも翔り、俺を叩きのめしては曳摺り廻

す悪徳を背負った。

そして crime が即神の世界となるものの crime が神の世界に否定的に転換せられるものの néant (無)の現成するところであった。néant としての Mauvais Sang, p. 24 の “Je ne vois même pas l'heure où, les blancs débarquant, je tomberai au néant.” ——白人どもが上陸して、俺は虚無〔無〕のまま唯中に墜ちて行くだろうが、何時の事か、俺には一向解らない。——のところで既に述べたが、有即無、無即有なる否定的転換に現成するものであった。les blancs débarquant といつてゐる様に les blancs (le monde、相対的有)を媒介とするものであり、その les blancs が即神の世界に転換せられるところに néant が、nature の世界が、現成したのであった。かくして les blancs が上陸するところとは le canon (Cf. Mauvais Sang, p. 25.) であつたのである。un crime, vite, que je tombe au néant といふわけであり、それは catéchisme の実行であつたのである。

且つ néant は有無を超え、有無の根拠として、絶対真理の世界であり、一切の存在の根拠なるが故に「誰しもが逃れ得ない幸福」の世界であり、「宿命」としての幸福の世界であつたのである。

Cf. O Saisons, ô Châteaux.

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'étude.

私の手がけた幸福の

秘法を誰が脱れ得よう。

Cf. Délires, p. 60, 61.

地獄の一季節註解(中)

je vis que tous les êtres ont une fatalité de bonheur ;……………
Le Bonheur était ma fatalité, mon remords, mon ver :……………
俺はすべての存在が、幸福の宿命を持つてゐるのを見た。……『幸福』は俺の宿命であつた、悔恨であつた、身中の虫であつた。……その意味で de par la loi humaine といふのである。

Tais-toi, mais tais-toi !…………… C'est la honte, le reproche, ici : Satan qui dit que le feu est ignoble, que ma colère est affreusement sotté. —— Assez !…………… Des erreurs qu'on me souffle, magies, parfums faux, musiques puérites, —— Et dire que je tiens la vérité que je vois la justice: j'ai un jugement sain et arrêté je suis prêt pour la perfection…………… Orgueil. —— La peau de ma tête se dessèche. Pitié! Seigneur, j'ai peur. J'ai soif, si soif! Ah! l'enfance, l'herbe, la pluie, le lac sur les pierres, le clair de lune quand le clocher sonnait douze…………… le diable est au clocher, à cette heure. Marie! Sainte Vierge!…………… Horreur de ma bêtise.
黙れ、黙るがいと……………それは恥辱、譴責だ、ここにあるのは。〔ここでは。〕魔王が言ふ、「業火とは下賤なものだ、手前の憤怒など、とんでもない大たはけだ。」——もう沢山だ……………誰かが俺に吹き込んだ数々の過ち、魔術、まやかしの香料、幼稚な音楽。——尚又奴に言はせれば、俺は真理を捕へて、正義を見てゐるのださうだ。俺の批判は健全で慎重で、完璧への心構へがあるのださうだ。……己惚だぞ。
——頭の皮は干乾らびてゐる。お情けだ、神様、俺は恐ろしい。喉

が乾いて、切ないのだ。あゝ、少年時、草よ、雨よ、小石の上の湖、鐘楼が十二時を鳴らした時の月光……この時刻、悪魔は鐘楼の上にいる。マリヤ様、聖母様……えへ、己れの痴態の見苦しさ。

Tais-toi, mais tais-toi! …… C'est la honte, le reproche, ici : —

ici といふのは、この場合、上記の néant の立場をわけてなり、néant の立場からする、前の一節 (Et c'est encore la vie! …… Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi humaine.) に対する反省、自責の言葉として Tais-toi, mais tais-toi! が出てきたのである。que je tombe au néant —— 俺が虚無〔無〕の中に墜ちて行く為に——とくつたり、Mauvais Sang, p. 24 であらう。

Connais-je encore la nature ? me connais-je ? —— *Plus de mots.* J'enzevelis les morts dans mon ventre. Cris, tambour, danse, danse, danse, danse ! Je ne vois même pas l'heure où, les blancs débarquant, je tomberai au néant.

俺はまだ自然といふものを知ってあるだらうか。自分を俺は知っているか。——最早言葉は無用だ。俺は死んだものを腹の中に葬る。叫び、太鼓、ダンス、ダンス、ダンス。白人どもが上陸して、俺は虚無〔無〕のまっ唯中に墜ちて行くだらうが、何時の事か、俺は一向解らない。

とくつてゐる様に、néant は一歩一歩の一事一事に前後際断的に cadavre として生きるその生き方に (Cf. Mauvais Sang, p. 22.) 行ぜられるべき実践的了解の世界であり、それは言葉を超え、言語を以つ

てしては語ることの不可能な、不思量底の世界であり、さらに語ることを無用とする世界であった。かくてランボオは言語に対しては常に絶望的であつたのである (Cf. O Saisons, ô Châteaux : Que comprendre à ma parole ? / Il fait quelle fuite et vole ! —— 私が何を言つてゐるのかつていふ言葉なんぞはふつ飛んじまへだ ! ; Mauvais Sang, p. 17 : Je comprends, et ne sachant m'expliquer sans paroles patiennes, je voudrais me taire —— 俺には解つてゐる。ただ、解らせようにも異教徒の言葉しか知らないのだから、俺は黙つてゐたいのだ。—— etc., etc. …….)。

かくてこの néant の立場に立つて、上の一節の様に語つてきたことに対する反省、自責として Tais-toi, mais tais-toi! といふわけである。即ち上の一節の様に語つてきたことは恥辱であり、叱責せられるべきことであらう。

honte は “Honte” において述べてゐる様に、二元的知性、それに基づくくらゐ、裏切り、即ち一切のはからひに出発する世俗的世界に対する恥辱をいつてゐるのである。即ち前の一節の様に語ることに自体がすでに知性に基くものであり、Néant に対比してそこに恥辱が感じられるのである。ランボオにおいてはその他二元対立相対の世界に対する honte の意味で使つてゐる場合が多い。

Cf. Les premières Communions.

Cloués au sol, de honte et de céphalalgies,

Ou renversés, les fronts des femmes de douleur.

恥辱と頭痛でこの地上に釘付けにされ、或ひは

仰向けに倒された、苦しみ悩む女人らの額を。

Cf. L'Homme juste.

Ah! qu'il s'en aille, lui, la gorge cravatée

De honte, ruminant toujours mon ennui, ………

あゝ、奴は行くがいい、屈辱のネクタイを胸につけ

俺の倦怠をいまでも反芻しながら、……

Cf. Délires, I, p. 47.

Il m'attaque, il passe des heures à me faire honte de tout
ce qui m'a pu toucher au monde et s'indigne si je pleure.

あれは妾を責めます、凡そこの世で妾の心を動かし得たもの全てに
ついて、幾時間も幾時間も妾を責め苛むのです、そして妾が泣けば腹
を打てるのです。

“Tais-toi, mais tais-toi ! ……… C'est la honte, le reproche,
ici.” に対して上記の様に解釈するのだが、一方、これを、反省自責の
言葉としてではなく、Satan の言葉として解釈した方が、あるひはより
素直な解釈である様にも考えられるのでここに併述しておきたい。

即ち Tais-toi, mais tais-toi は Satan のランボオに対する言葉であ
り、Nuit de l'Enfer のはじめから前節に至る迄述べてきた言葉を制止
しようとする Satan の言葉である。前節までのところは還相行における
réalité épineuse に基く苦惱行を語ってをり、しかしそこそこ抽象的
観念的ではない具体的な此岸の神が現成するものである故に Plus tard,
les délices de la damnation seront plus profondes といふ、最後に
Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi humaine

と書いてあるのである。即ち、否定即肯定、肯定即否定、汚濁即清浄、
清浄即汚濁なる néant の現成を語ってあるのである。これはもちろん
Le monde に足を据えた有の絶対肯定の立場を語るものであるが、しか
しそれは否定を媒介とするもので、けっして直接肯定態を語るものでは
ない。だからつきざといっている様に—— Satan qui dit que Le feu est
ignoble, que ma colère est affreusement sotté —— Satan がランボ
オの否定の媒介を否定するのであり、拒否するのである。その意味にお
いて、ランボオの絶対肯定的な néant の世界に対して C'est la honte,
le reproche といっているのである。Le monde の悪の直接肯定者とし
ての Satan の、否定を媒介とする絶対肯定者としてのランボオに対す
る悪罵の言葉であり叱責の言葉であるわけである。

Satan qui dit que Le feu est ignoble, que ma colère est aff-
reusement sotté : ——

この feu は p. 33 の Voyez comme le feu se relève ! Je brûle
comme il faut. といっている feu であり、したがって地獄の業火で
ある。p. 37 の終りのとらひひめ C'est le feu qui se relève avec
son damné——火焰は地獄に墮ちた男を取り巻いて高く挙がる。——と
いっている。また Adieu, p. 83 のめ

Notre barque élevée dans les brumes immobiles tourne vers
le port de la misère, la cité énorme au ciel taché de feu et
de boue.

俺達の小舟は、動かぬ霧の中に高く騰って、悲惨の港を目指し、焰
と泥の染みのついた空を負ふ巨大な都会を目指して、船先をまはす。

といつてゐる様に feu は boue となり、Le monde, l'enfer のものとして扱はれてゐる。地獄の業火である。ただしこの場合の業火は還相行における苦惱行としての業火である。したがってランボオにとっては、この業火こそ身を置くべき業火であり、もはやそこからの逃避は許されないのである。この業火に身を焼くことの「歡喜」がくるはずであり、いはばこの業火こそ業火にして同時に聖火であるべきはずであり、noble であるべきはずだが、またしても Satan がこの業火を ignoble だとして誘惑し嘲笑しようとするわけである。

また一方ランボオの colère —— 往相行における le monde に対する colère、二元対立相対の世界の一切に対する憎悪にもえた怒に對しても、それを馬鹿々々しいものとして悪罵嘲笑するのである。

即ち、還相行における業火に對しても ignoble として、往相行における colère に對しても soite として、往相還相いづれの面に對しても悪罵嘲笑をあげせるわけである。Satan の Satan たる所以である。かかる Satan の悪罵嘲笑に對する反撃が、Assezi! ……… Des erreurs qu'on me souffle, magies, parfums faux, musiques puériles など言葉となり出てくるのである。

Assezi! ……… Des erreurs qu'on me souffle, magies, parfums faux, musiques puériles : ——
現在の néant の立場に到達するまでのすべての世界、le monde はもてあらし、le monde 否定のはげしさに到達した mort, ennui の単なる往相的否定的彼岸の世界も、すべてが erreurs であり、magies であり、parfums faux であり、musiques puériles であつたのである。

Cf Adieu, p. 85, 87.

Enfin, je demanderai pardon pour m'être nourri de mensonge. Et allons. ………

Un bel avantage, c'est que je puis rire des vieilles amours mensongères, et frapper de honte ces couples menteurs, — j'ai vu l'enfer des femmes là-bas; — et il me sera loisible de posséder la vérité dans une âme et un corps.

最後に、俺は自ら虚偽をもって身を養つてゐた事を謝罪しよう。さて行くのだ。

………………

有難い事には、俺は昔の偽りの愛情〔愛〕を嗤ふ事が出来るのだ、この番になつた嘔吐と共に、赤恥を搔かせてやる事も出来るのだ、——俺は遙か彼方に女共の地獄を見た、——そして、俺には、一つの魂と肉体との裡に、真理を所有する事が許されるだらう。

Cf. Mauvais Sang, p. 26.

Je vois que la nature n'est qu'un spectacle de bonté. Adieu chimères, idéals, erreurs!

自然は善心に溢れた見世物に過ぎない、「自然は慈愛の展観に外ならぬ」と俺には見えるのだ。妄想よ、理想よ、「観念よ、」過失よ、おちろばた。

magies, parfums faux, musiques puériles 等 erreurs の象徴的表現であるが、musiques はランボオが自己の世界をしばしば音楽をもつて象徴してゐることに基く表現であつて、いはば眞の音楽に對してそれ

が erreurs である意味で musiques puérides としやむむである。

magies としつじも、やはりこの様な表現を見出すことが出来る。
偽まじり

La même magie bourgeoise à tous les points où la malle
nous déposera! (Cf. Soir historique.)

旅装を解く処、どこもかしこも、同じブルジョアの魔法だ。

この様で magie bourgeoise としつじも、また、Veillée, じま

ah! puits des magies; seule vue d'aurore, cette fois.

あゝ、その井戸に魔法の井戸。と思へば今度は、曙の眺めが唯一つ。

この様で puits des magies を seule vue d'aurore (aurore は既述の
様で matin, aube などと同じランボオ的世界のひらけさめを象徴す
る。)と対称的に使つてゐる。即ち同じじま magies を erreurs の意味
に使つてゐるのじま。

parfums としつじまの用例を「三見出すじま」

Cf. Matinée d'Ivresse.

Cela commença par quelques dégoûts et cela finit, — ne
pouvant nous saisir sur-le-champ de cette éternité, — cela
finit par une débâdade de parfums.

この仕事は、どうやら厭や厭やながら始まったが、その終りは——
俺達がこの永遠を直ちに捕へる事は出来ないから、——それは芳香の
潰乱の裡に終わったのだ。

この parfums もやはりランボオ的世界の芳香をはなつ妙なる一面の象
徴的表現である。

Cf. Bateau ivre.

Glaciers, soleils d'argent, flots nacreux, cioux de braises,
Echouages hideux au fond des golles bruns

Où les serpents géants dévorés des punaises

Choiient, des arbres tordus, avec de noirs parfums!

氷河や、銀の太陽や、螺鈿の波や、火の空や、

褐色の入江の奥に坐礁せる醜き船や、

その船に、南京虫に喰はれたる大蛇鱗蛇、

黒き臭気を放ちつゝ、拗れし樹より、墜落す。

このじま noirs parfums なる表現がつかはれてゐる。これは醜の一面
の象徴である。(noir としつじまは既述参照。) parfums faux まじり
の noirs parfums と軌を一にする表現である。実際の parfums ならぬ偽
の parfums、偽の世界をわけてあり、néant 以外のすべての立場
をわけてゐる。

Et dire que je tiens la vérité, que je vois la justice : j'ai un
jugement sain et arrêté, je suis prêt pour la perfection

Orgueil. : ——

ランボオの世界は絶対真理の世界である。

Cf. L'Impossible, p. 70.

S'il était bien éveillé toujours à partir de ce moment, nous
serions bientôt à la vérité, qui peut-être nous entoure avec ses
anges pleurant! — S'il avait toujours été bien éveillé,
je voguerais en pleine sagesse!

O pureté! pureté!

C'est cette minute d'éveil qui m'a donné la vision de la pureté! Par l'esprit on va à Dieu!

俺の精神が、この瞬間から絶えずはっきりと目覚めてめてくれるとしたら、俺達はやがて真理に行き着くかも知れぬ。真理は恐らく泣いてゐる天使達をつれて俺達を取巻くであらう……—絶えずはっきりと目覚めてめてくれたとしたら、俺は睿智の真唯中を漕ぎ渡つてゐるに相違なからう……

あと、純潔よ、純潔よ。

俺に純潔の幻想を与へたものはこの目覚めの瞬間だ。精神を通して、人は神に至る。

その他参照。

また絶対正義の世界であった。

Cf. Adieu, p. 86.

Le combat spirituel est aussi brutal que la bataille d'hommes; mais la vision de la justice est le plaisir de Dieu seul.

精神の戦も人間の戦と同様にむごたらしい。然しながら正義の幻影はただ神だけの喜びだ。

この justice と云ふ語は Mauvais Sang, p. 20 に *est-ce plutôt, se garder de la justice* — むしろ、正義にとりつかれまいと用心する事だ。——の様に、あるひは「Justice」における様に時的、相対的意味で使つてゐる場合もあるが、今はもちろん上記 Adieu, p. 86 の場合と同様、絶対真理の世界は、それが絶対真理なるが故に、絶対正義の

世界とみてゐるのである。

そしてかかる世界に到達するためにはそこに un jugement sain et arrêté があつたのである。p. 7—p. 9 の序文「Mauvais Sang, Nuit de l'Enfer」の Adieu に至る、この Une Saison en Enfer をかかる判断の展開と見ることもできようし、Les Illuminations の中には、Phrases や Mystique の様なかなり明確な形をとつた論理の展開と見られるものを含んでをり、またランボオの用語法においても

Je songe à une Guerre, de force, de logique bien imprévue.
(Cf. Guerre.)

俺は、権利の、或は、力の、全く思ひもよらぬ理論の『戦』を夢みるのだ。

Des comptes agités à ce bord fuyard, …… (Cf. Mouvement.)
この敗走する船の上の興奮した計算から……

の様は Guerre de logique と云つてをり、compte と云ふのはあくまで、また Enfance に於ては

Je suis le savant au fauteil sombre.
俺は陰鬱な肘掛椅子に靠れた学究。

ともいつてゐるのである。一人の典型的宗教詩人であり、その背後には un jugement sain et arrêté があり、logique bien imprévue、精密な compte によつて支へられてゐたのである。

しかもその判断たるや絶対真理、絶対正義への判断、戦ひ、計算であつたのであり、したがつて当然 Je suis prêt pour la perfection と云はれる理由が存するわけである。ランボオの世界は perfection の世界

であった(前述参照)。

Cf. Mauvais Sang, p. 21.

— Ah! je suis tellement délaissé que j'offre à n'importe quelle divine image des élans vers la perfection.

——あゝ、全く俺は寄る辺もない身だから、完成への燃え上る想ひを、もうどんな聖像に献げても構はない。

Cf. Jeunesse, IV.

Des êtres parfaits, imprévus, s'offriront à tes expériences.

予見を許さぬ、完璧な諸存在が、お前の様々な経験に、献げられるだらう。

かくランボオの世界は un jugement sain et arrêté に支へられ導かれた vérité, justice の世界であり、perfection の世界であった。それへの燃え上る想ひをじたうたのであった。しかし Satan はそれに対して orgueil と同じ悪罵嘲笑をわむじあせ。

La peau de ma tête se dessèche. Pitié! Seigneur, j'ai peur.

J'ai soif, si soif : —

この還相行にあつては “Les délices de la damnation” の深まるであらうことを思ひ “Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi humaine” とせらふつも、依然とついでに苦悩の随伴するものはまぬがれない。その苦悩する口を自ら顧みれば、vérité とついても justice とついても、それらを支へ導く un jugement sain et arrêté とついても、perfection だとついても、Satan が orgueil とついても、なるほどそれは orgueil のそしりをまぬがれないかもしれない。

La peau de ma tête se dessèche とはかかるうちひしがれた苦しみをつまわけである。

その Pitié! Seigneur なる神への歎願の聲が出るわけである。しかし、ここに救ひを求めたこの神はランボオの神ではなかった。それはむしろ此岸の réalité épineuse から足を洗った彼岸の寂静の世界のキリスト教の神であった。苦悩にうちひしがれ、苦しさに堪へきれずしてかかる Seigneur への歎願の聲が出たのである。だからそのとき Ah! l'enfance, l'herbe, la pluie, le lac sur les pierres, le clair de lune quand le clocher sonnait douze とつと寂静の世界へのあこがれが述べられ、その果てにかかる自己の弱さ、自己の神への冒瀆をあへてする口が愚かきに対して Horreur de ma bêtise なる言葉がはき出されるのである。したがってこの Pitié! Seigneur せ p. 37 における

Ma faiblesse, la cruauté du monde! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens trop mal! — Je suis caché et je ne le suis pas.

わが身の弱さ、この世の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐなう。

この Mon Dieu, pitié とは、全くその意味を異にしてゐるのである。この Mon Dieu はランボオの神であり、どこまでも有を媒介として、否定的轉換的に現成する此岸における神である。有を媒介とするかぎり、この réalité épineuse に基く苦悩行からの逃避は許されないはずである。そこに足を据ゑることにおいてのみ現成する神であった。だから

Les délices de la damnation なるが、Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi humaine なるが、たゞである。

それを、今、苦しむにうまひが、その恐ろしき (J'ai peur) 力、救ひを求め、(J'ai soif, si soif) 彼岸の寂靜の世界に想ひをはせたわけである。

この soif は言葉され自体としては Comédie de la Soif とあるが、soif などの意味を等しくする神への渇きであるが、この場合の Comédie de la Soif とは、その神を異にしてあるのである。

Ah! l'enfance, l'herbe, la pluie, le lac sur les pierres, le clair de lune quand le clocher sonnait douze Le diable est au clocher, à cette heure. Mariel. Sainte Viergel.

—— Horreur de ma bêtise : ——
 苦悩にうまひが、彼岸の寂靜の世界へ救ひを求めたのである。réalité épineuse に対して寂靜の世界に想ひをはせたのである。enfance にも Le clair de lune まで、つづれも寂靜の世界を意味するものである。

enfance については既に述べたが (Mauvais Sang, p. 22 の条、参照)、ランボオの enfance についての追憶は、つづれも死の世界、寂靜の世界、“forçat intraitable” によらぬおぼはれる開眼の追憶としてのみ語られてあるのである。今もこの enfance が出てくるのはその意味においてであって、enfance を想ふことは寂靜の世界に想ひをはせたことを意味するのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 22.

Encore tout enfant, j'admiraient le forçat intraitable sur qui se referme toujours le baigne; je visitais les auberges et les garnis qu'il aurait sacrés par son séjour; je voyais avec son idée le ciel bleu et le travail fleuri de la campagne; je flairais sa fatalité dans les villes. Il avait plus de force qu'un saint, plus de bon sens qu'un voyageur —— et lui, lui seul! pour témoin de sa gloire et de sa raison.

まだ小さな子供の頃、徒刑囚の監獄に閉ぢ籠められる強情無頼の囚人に、俺は眼を見張ったものだ。俺は、その男の滞在によって祝聖されたやうに思はれた数々の宿屋や貸間を訪れた。その男の思想を、青空を眺め、野良に花をく労働を眺めた。彼の宿命を方々の街に嗅いだ。彼は聖者を凌ぐ力を持ち、旅人も及ばぬ分別を備へてゐた、—— 而も、その光榮とその理智との証人としては、ただ彼だった、彼だけだったとは。

Cf. Enfance.

Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour, plus noble que la fable, mexicaine et flamande; son domaine, azur et verdure insolents, court sur des plages nommées, par des vagues sans vaisseaux, de noms férocelement grecs, slaves, celtiques.

Quel ennui, l'heure du ((cher corps)) et ((cher coeur)).

この偶像、眼は黒く髪は黄に、親もなく、侍者もなく、物語よりも

気高く、メキシコ人でありまたフラマン人。その領土は、傲岸無頼の紺碧の空と緑の野辺、船も通はぬ波濤を越えて、猛々しくもギリシヤ、スラヴ、ケルトの名をもて呼ばれた浜辺から浜辺に亘る。

.....

何といふ倦怠だらう、『親しい肉体』と『親しい心』の時刻。

Cf. Guerre.

Enfant, certains ciels ont affiné mon optique.

少年だった時、何処の空だか知らないが、俺の視力を磨き上げてくれた。

Cf. L'Impossible, p. 67.

Ah! cette vie de mon enfance, la grande route par tous les temps, sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendians, fier de n'avoir ni pays, ni amis, quelle sottise c'était. — Et je n'en aperçois seulement.

あゝ、俺の少年時代のあの生活、季節もわかたず街道を行き、自然には考へられぬ程に節食して、乞食の一番上等な奴よりも更に利慾に超然として、故郷もなく友達もないこの身を誇り、想へば愚かな事であつた。——そして漸く俺もこれに気がつく。

Horreur de ma bêtise とうとうの様な、うとうとでもかかゝる enfance
どろどろ quelle sottise c'était とうとうの様なうとうとは注目せずおろろ
あゝ。

herbe は例へば Mauvais Sang, p. 18 。

Me voici sur la plage armoricaine. Ma journée est

faite: je quitte l'Europe. Nager, broyer l'herbe, chasser, funer surtout: boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant, — comme faisaient ces chers ancêtres autour des feux.

ゴオルの国アルモリックの海岸に居る。……俺の日程は終わった、俺はヨーロッパを去る。……泳いで、草を噛み碎き、狩猟して、殊更に煙草をふかし、煮え滾る金属のやうな火酒を飲む——焚火を囲んで、あの懐かしい祖先の人々が為てゐたやうに。

とうとうの様な、この plage armoricaine、否定の彼方の寂靜の世界としての plage armoricaine に連なる herbe でもあらう。かりに plage armoricaine ではないが、うとうともヨーロッパではない彼方の寂靜の世界を意味する herbe であらう。

pluie せ Enfant, IV に於て

Je suis le savant au fauteuil sombre. Les branches et la pluie se jettent à la croisée de la bibliothèque.

俺は陰鬱な肘掛椅子に靠れた学究。小枝と雨が書齋の硝子窓に打ちつける。

とうとうの様な、この様な雨、世俗に關はらぬ寂靜の世界の象徴としての雨でもあらう。

le lac sur les pierres とうとうの湖に、Enfant, III 。

Il y a une cathédrale qui descend et un lac qui monte.

降り行く大伽藍、昇り行く湖がある。

とうとうの様な、否定 (une cathédrale qui descend) の彼方に出てくる

寂靜の世界をちして Le lac qui monte とつてみるのである。今もこの意味で Le lac とつてみるのである。 sur les pierres とはその清澄をいふわけである。

le clair de lune quand le clocher sonnait douze じゅうじゅう
 じゅ enfance, Ⅲ じゅ

Il y a une horloge qui ne sonne pas.

時刻を打たない時計がある。

とつてつなり、une horloge qui ne sonne pas とは時間の否定 (Cf. A une Raison; change nos lots, cribble les fléaux, à commencer par le temps. — 俺達の運勢を変へてくれ、災難を篩ってくれ、先の時間といふ奴をどうにかするんだ。——)、世俗、相対的三元の世界の否定を意味するわけであり、douze を打ったところとは即ち同様に時間の否定、世俗、相対的三元の世界の否定を意味するわけであり、そこには清澄寂靜の le clair de lune がちすわけである。

じゅうじゅうじゅう enfance, herbe, pluie, lac, clocher sonnait douze のじゅうじゅう image じゅうじゅう “Enfance” に共通のものがあつて、執筆の前後は問はなかつて、互に連関のあるところである様に考へられる。

Lune じゅうじゅう

Cf. Les Soeurs de Charité.

Le jeune homme ………

Et qu'eût, le front cerclé de cuivre, sous la lune

Adoré, dans la perse, un Génie inconnu,

その若者、……

額は赤毛に縁どられ、月光の下、ペルシヤの國で、
 或る未知の精霊を礼拝したともおぼしき若者、

Cf. Après le Déluge.

Les caravanes partirent. Et le Splendide Hôtel fut bâti dans le chaos de glaces et de nuit du pôle.

Depuis lors, la Lune entendit les chacals piaulant par les déserts de thym, ………

隊商達は旅立った。そして、極地の氷と夜との混乱の裡に、『壯麗ホテル』は建つられた。

以来、『月』は百里香の匂を沙漠に、金狼の鳴く声を聞いた、……その他 “Soir historique” にちひる l'Allemagne s'échafaude vers des lunes” (ドイツは月を日指して足場を組み) “Bateau ivre” における “Toute lune est atroce et tout soleil amer” (月なべて無慙に、目はなべて苦し。) 等じつづれも Lune は寂靜の世界をちつてゐる。

還相行にあつて、réalité épineuse とよき苦惱にちひるがれ l'enfance, l'herbe, la pluie, le lac sur les pierres, le clair de lune quand le clocher sonnait douze と死の寂靜の世界を想ひ、かかる世界に救ひを求めたのである (Pitié! Seigneur; Marie! Sainte Vierge!)。といふよりはむしろ逃避したのである。だが、かかる世界は所詮ランボオの世界ではなかつた。そこにはランボオの神は現成しない。やはりdiable の世界だ。Le diable est au clocher, à cette heurs とつて所ひである。そのにまた Horreur de ma bêtise など白責、反省の言葉も出る所以である。所詮はこの汚濁の世界 réalité épineuse に身を処

する外はないわけであり、またそこにごそ汚濁即清浄としてランボオの神の世界が現成し、les délices de la damnation の深まり行くことと可能となるのである。この想ひ至り Horreur de ma bêtise なる自責の言葉が洩れるとともに、Là-bas さゆりかへるわけである。

Là-bas, ne sont-ce pas des âmes honnêtes, qui me veulent du bien …… Venez …… J'ai un oreiller sur la bouche, elles ne m'entendent pas, ce sont des fantômes. Puis, jamais personne ne pense à autrui. Qu'on n'approche pas. Je sens le roussi, c'est certain.

見下せば、この俺の身を思ふ律義な靈魂〔魂〕の群ではないのか…来るがい…枕を口に当てがった俺の言葉は、彼奴等には聞きとりにくい。靈魂は幽霊どもだ。「それは幻だ。」それに、誰だって決して他人の身の上を考へないものだ。側へ寄ってはもらふまい。俺が異教徒臭いのは、それは確かだ。

Là-bas, ne sont-ce pas des âmes honnêtes, qui me veulent du bien : —

苦悩にうちひしがれ寂靜の天上界に想ひをさせたことに對する自責とともに下界を見下すわけである。清澄寂靜に對する汚濁の世界である。

Mauvais Sang, p. 21 における

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse! ici-bas, pour-tant!

おゝ俺の自己拋棄、おゝ俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この世のこゝろ。

この ici-bas であり、同じく p. 26 の

J'ai laissé des âmes dont la peine s'accroîtra de mon départ! Vous me choisissez parmi les naufragés; ceux qui restent sont-ils pas mes amis ?

Sauvez-les!

俺は多くの靈魂を見棄てて来たが、彼等の苦しみは俺の出発によって増す許りであらう。貴方は、(神よ) 難波した人々の中から俺を選んで下さった。が、取り残された人々も、俺の友達ではないのか。彼等を救ひ給へ。

といてゐる naufragés の世界をさすわけである。

天上界に逃れようとした自責とともに、この下界を見下せばそこには âmes honnêtes がゐるではないか。

âmes honnêtes とは Matinée d'ivresse における

On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous amenions notre très pur amour.

俺達の最も純粹な愛を醸し出す為に、善悪の樹を暗闇の中に埋葬し、暴君的な誠実を流刑に処する事を、俺達は約束されたのだ。

といてゐる、この honnêtetés が示してゐる様に、この世俗の枠の中にあつて、その枠のままに随順して行かうとする律義を善良さをいふわけである。二元対立の相対的世界における善悪正邪の枠にしばられ、その枠をつき破ることを知らずに、ただ律義にその枠の命ずるところに随順して行かうとする善良なる魂をいふわけである。

かかる善良なる魂にとっては、今、還相行にあって苦悩するランボオの苦悩を、真にその苦悩として理解することはなく、ただその苦悩に対しては良かれかしと思ふだけである。

Venez………… J'ai un oreiller sur la bouche, elles ne m'entendent pas, ce sont des fantômes : ——

Venez とは、この世界に生ける naufragés と同じの âmes honnêtes に対する慈悲救済の思ひを示す言葉である。p. 37 でも

Tous, venez, —— même les petits enfants, —— que je vous console, qu'on répande pour vous son coeur, —— le coeur merveilleux!

みんな来るがいい、——子供達も来るがいい、——俺は君達を慰めよう、君達の為に、人はその心を、霊妙な心を、あり注ぐやうにしよう。

Cf. Mauvais Sang, p. 26.

Vous me choisissez parmi les naufragés ; ceux qui restent sont-ils pas mes amis?

Sauvez-les!

貴方は、(神よ) 艱破した人々の中から俺を選んで下さった。が、取り残された人々も、俺の友達ではないのか。

彼等を救ひ給へ。

この様に Venez とは、ついでにみたものの、この âmes honnêtes はわが身に良かれと思ふ律義な善良さはあっても、所詮この苦悩を苦悩として

真に理解するものではない。今、この自己の苦悩を、さらには自己の世界を、神の世界を語って見たところを、理解してくれようはずもないことを、わづらひ J'ai un oreiller sur la bouche と同じの、わづらひである。今、還相行の立場であるこの立場の相違は、Mauvais Sang, p. 23 の pleurant du malheur, qu'ils n'aient pu comprendre et pardonnant!

彼等には了解し得ない不幸に歎きながら、そして彼等を宥しながら、とらへるの、とらへるを想ひである。

Cf. Délires, I, p. 44—p. 45.

Parfois il parle, en une façon de patois attendri, de la mort qui fait repentir, des malheureux qui existent certainement, des travaux pénibles, des départs qui déchirent les coeurs. Dans les bouges où nous nous enivrions, il pleurait en consir dérant ceux qui nous entouraient, bétail de la misère. Il relevait les ivrognes dans les rues noires. Il avait la pitié d'une mère méchante pour les petits enfants. —— Il s'en allait avec des gentillesse de petite fille au catéchisme. ……… j'étais sûre de ne jamais entrer dans son monde. ……… Aucune autre âme n'aurait assez de force, —— force de désespoir! —— pour la supporter, —— pour être protégée et aimée par lui. ……… Tristement dépitée, je lui dis quelquefois : < Je te comprends. > Il houssait les épaules.

時々、あれは、やさしい味の籠った田舎言葉で、人々の悔悟〔悔恨〕を

そゝる死の事や、何処かに屹度居るに違ひない不幸な人々の事や、つらい稼ぎや、身を切られるやうな門出の話をしめます。私達が酔ひ痴れて過した陋屋で、私達を取巻いてゐた人々の悲惨の家畜の群のやうな身 pensando、あれは泣きました。暗い往来に仆れた酔ひどれ共を起してやった事もありました。あれは幼い子供達を迎へる根性曲りの母親の情を持ってゐたのです。——あれは教理問答を習ひに通ふ小娘のやうな優しい心を持ってゐました。……確かに妾は、たった一度もあれの世界に這入った事はなかった。……他の人だったら——その愛を支へ切るのに——彼に護られ愛されるのに——、十分な力を持ってゐないでせう、——絶望の力なのです。……悲しいやら口惜しいやらで、時々妾はあれに申します、『妾にはあなたが解ります。』するとあれは冗談ぢやないって身振りをするのです。

丁度この *Délires, I* における *Epoux infernal* の様に慈悲救済の想ひになく優しさをもちながら彼の語る言葉は *patois* の「*とく*」に、理解されることを期し難いのである。一面におつこの *Epoux infernal* と *Vierge folle* との間には断絶があつた様に、今、還相行としてこの下界に身を処しようとして、この *âmes honnêtes* と自己との間に存する、埋めることのできない断絶をみてゐるわけである。ランボオの世界は、ランボオの語る言葉は、所詮は、彼等にとつては幻だ。—— *ce sont des fantômes.*

puis, jamais personne ne pense à autrui. Qu'on n'approche pas. Je sens le roussi, c'est certain : ——

それに考へてみれば、人間は誰しも真に他を顧みることはないはず

だ。所詮は孤独だ。他を想ひ他に良かれかしといつても、最後には *ego* の牙城に立籠つての話である。この *ego* が捨離せられないかぎり、真に他を思ふといふことはあり得ない。真の愛、真の *Charité* は出てこない。この *âmes honnêtes* には他に良かれと思ふ善良さはあつても、自己他己の対立の世界にあるかぎり、そこには真に他を想ふ真の愛の世界はないはずである。 *abnégation* を行ずることにおいてのみ、すべてに開かれる愛の世界が展開せられるものであるからである。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 21.

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse! ici-bas, pour-tant!

おゝ俺の自己抛棄、おゝ俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この世でのこと。

Cf. *Génie.*

Il est l'affection et le présent puisqu'il a fait la maison ouverte à l'hiver écumoux et à la rumeur de l'été, ………

泡立つ冬に、夏のむめきに、家を開放したからには、彼は愛情だ、現在だ。……

Cf. *Délires, I*, p. 45.

D'ailleurs, je ne me le figurais pas avec une autre. âme: on voit son Ange, jamais l'Ange d'un autre, —— je crois.

それに妾は、他の人と一緒にゐるあの、人を想像したこともありません。人は自分の『天使』を見るものです、決して他人の『天使』を見るものではない、——と、妾は信じてゐます。

よし abnégation を介して真の愛 charité が現成したとしても、なお究極においては絶対の孤独をまぬがれるものではない。人は己が天使をみて他の天使をみるものではない。Puis, jamais personne ne pense à autrui ところが、Qu'on n'approche pas ところが所以である。

Cf. Adieu, p. 85.

Mais pas une main amie! et où puiser le secours?

だが、友の手などあらう筈はない、救ひを何処に求めよう。しかもランボオの世界は christianisme の立場からみて、âmes honnêtes の立場からみても異教徒くちう—— je sens le roussi —— ものであることは確かだ。

Les hallucinations sont innombrables. C'est bien ce que j'ai toujours eu: plus de foi en l'histoire, l'oubli des principes.

Je m'en tairai: poètes et visionnaires seraient jaloux. Je suis mille fois le plus riche, soyons avare comme la mer.

幻想は数限りない。それこそ正しく常々俺の所有したものである。最早歴史も信ぜず、諸原理をも忘れ去る。だがそれについては語らばいい。詩人達、夢想家は羨望するかも知れない。奴等より俺の方が、千倍も豊かである。海のように貪婪にならう。

Les hallucinations sont innombrables. C'est bien ce que j'ai toujours eu : ——

Les hallucinations ところがの、ちやうど p. 33 のところが

J'avais entrevu la conversion au bien et au bonheur, le salut. Puis-je décrire la vision, l'air de l'enfer ne souffre pas

les hymnes! C'était des millions de créatures charmantes, un suave concert spirituel, la force et la paix, les nobles ambitions, que sais-je?

俺は以前から、善と幸福への改宗を、救ひを、予見してはめた。俺は幻を描けるだらうか。地獄の風は讃歌など我慢がならぬ。それは愛すべき幾百万の創造された物だった。精神的な爽快な奏楽、力と平和、高貴な大皇の数々、あゝ、俺が何を知らう。

ところが、この vision であり、millions de créatures charmantes であり、un suave concert spirituel であったのである。そしてそれらは bien へ bonheur へ salut へと関するものであったのである。即ちランボオの世界、神に関する les hallucinations である。

Délires, II, p. 55 へ

Je m'habituai à l'hallucination simple : je voyais très franchement une mosquée à la place d'une usine, une école de tambours faite par des anges, des calèches sur les routes du ciel, un salon au fond d'un lac; les monstres, les mystères; un titre de vaudeville dressait des épouvantes devant moi.

Puis j'expliquai mes sophismes magiques avec l'hallucination des mots!

素朴な幻想に俺は慣れた。何の遊疑なく俺は見た、工場のある場所に回々教の寺を、天使達の教へる鼓手養成所を。軽快な四輪馬車は天空街道を馳けだし、湖の底にはサロンが開かれたし、様々な妖怪変化

に、様々な神変不思議、ヴオドヴィルの外題は、俺の目前に驚愕を惹き起した。

それから俺は、俺の魔法的詭弁を言葉の幻想をもって説明したのだ。どうしてあると云うのは、ランボオのいだいた hallucination の姿やその性格をよく語っている。Enfance との他 Les Illuminations 全体に亘って、hallucination であって、いはばランボオの作品全体がかかっている hallucination des mots を語られてゐるのである。かういふ hallucination des mots をびび語らなければならなかったのはランボオの世界が “sophismes magiques” と云つてゐる様な世界であつたことに基くのである。概念を超え、言語を超え、二元対立の相対を超えた世界であり、神の世界であつたことによるものであり、それがかかる hallucination des mots を要求したのである。最も具体的な感覚的思考であつたのである。その言葉は paroles païennes である。oracle であつたのである (Cf. Mauvais Sang, p. 17.)。

かかる “sophismes magiques” を説明する hallucination des mots を、paroles païennes を、oracle を、言語形成を、Alchimie du verbe と云つてゐるのである。かかる Alchimie du verbe たる hallucination des mots を、illuminer されたものが “Les Illuminations” である。

Cf. Délires, II, p. 51.

Depuis longtemps je me vantaais de posséder tous les paysages possibles, et trouvais dérisoires les célébrités de la peinture et de la poésie moderne.

地獄の 一季節 註解 (十)

.....

Je rêvais croisades, voyages de découvertes dont on n'a pas de relations, républiques sans histoires, guerres de religion étouffées, révolutions de moeurs, déplacements de races et de continents : je croyais à tous les enchantemens.

.....

et, avec des rythmes instinctifs, je me flattai d'inventer un verbe poétique accessible, un jour ou l'autre, à tous les sens. Je réservais la traduction.

Ce fut d'abord une étude. J'écrivais des silences, des nuits, je notais l'inexprimable. Je fixais des vertiges.

俺は久しい以前から、可能なかぎりの風景を掴んでゐるのが自慢だつた。近代の詩や絵画の大家共は、俺の眼には馬鹿々々しかった。.....

俺は夢みてた、十字軍、何の記録もない探検旅行、歴史を持たぬ共和国、抑圧された宗教戦争、風俗の革命、種族と大陸との移動。俺はあらゆる妖術を信じてゐた。

.....

そして、本能的な律動を以って、幾時かはあらゆる感覚に近づき得る詩的言辞を発明するぞと已惚れたのであつた。俺は翻譯を保留した。最初は習作〔研究〕だつた。俺は沈黙を書き、夜を書き、描き出す術もないものを書きとめた。俺は様々な眩暈を定着した。

Matinée d'Ivresse

O mon Bien! O mon Beau! Fanfare atroce où je ne trébuche
point! Chevalat féerique! Hourra pour l'oeuvre inouïe et pour
le corps merveilleux, pour la première fois!

あゝ、俺の『善』、俺の『美』。兇暴な軍楽の裡に、俺は断じて
うめきはしない。幻の画架だ。前代未聞の作品と素晴らしい肉体とを
ちも歓呼して初めて迎へよう。

どうしてある。かかる意味の hallucination であつたが故に、innom-
brables であつたわけだし、また常に抱いてゐたところのものであつた
わけである。

plus de foi en l'histoire, l'oubli des principes : ——

“sophismes magiques” を説明するに “hallucination des mots” を
以てせざるを得ない様な世界であつたのである。概念を超え、言語を超
え、相対を超えて、それら一切のものの根柢たる世界、神の世界であつ
たのである。そこにおいては、もはや histoire を信せず、principes を
忘却するわけである。前掲の Délires, II, p. 52 のみ

Je rêvais croisades, voyages de découvertes dont on n'a pas
de relations, républiques sans histoires, ………

俺は夢みてゐた、十字軍、何の記録もない探検旅行、歴史を持たぬ
共和国、……

どうしてある。それは「予見もされなかつた」、「前古未曾有」の世界
であることによるわけだが、予見もされなかつた前古未曾有の世界であ
つたことは、それが非ヨーロッパ的、非キリスト教的、ランボオ的一元
絶対の世界、神の世界であつたことに基くのである。その一元絶対の世

界、神の世界は常に有を媒介とする汚濁即清浄、清浄即汚濁として此岸
における神の世界であつたのである。だから Nuit de l'Enfer の冒頭
にまつて “J'ai avalé une fameuse gorgée de poison” とまつて
Matinée d'Ivresse にまつて

Nous avons foi au poison. Nous savons donner notre vie tout
entière tous les jours.

Voici le temps des Assassins.

俺達は毒薬を信じてゐる。いつの日にもこの命を洗ひぎらひ投げ出
す事を知つてゐる。

今こそ、『刺客達』の時である。

といふわけである。poison は信するわけである。この poison は媒介
となる汚濁の世界として、histoire における事象と同じではあるが、し
かしそこには分別悟性もなければ、価値の支配することもない事象自体
である。poison は信するが、histoire は信じないといふ所以である。

Soir historique や

Non! Le moment de l'éluve, des mers enlevées, des embra-
ssemens souterrains, de la planète emportée, et des extermina-
tions conséquentes, certitudes si peu malignement indiquées
dans la Bible et par les Normes et qu'il sera donné à l'être
sérieux de surveiller. —— Cependant ce ne sera point un effet
de légende!

いやいや、今こそこの世は蒸風呂となり、逆巻く海、地下の焦熱、
激怒した遊星、やがては、ものもの必従の勦滅だ、聖書にも、ノルン

にも、殆ど悪意なく示されて、恐らく、誠ある人々には、心構へせよと明かされてゐた定まり事だ。——なかなか伝説どころの話ではなからう。

と云つてゐる様に、histoireといふのは勦滅せられるべきものとしてのhistoireである。“nos horreurs économiques”——見苦しい金銭沙汰——と云つてのhistoireである。“sagesse de l'Orient”——東洋の叡智——からは遠く距つた人間のはからひに左右せられるものとしてのhistoireである。かかるhistoireは信じないといふわけである。

Cf. Qu'est-ce pour nous?

..... Industriels, princes, sénats:

Périssez! puissance, justice, histoire : à bas!

..... 企業家、殿様、元老院

滅びてしまへ！権力も、正義も、歴史もあるものか！

L'oubli des principes はあらゆる principes が分別悟性の立場に出るもの故、一切の分別悟性の立場の忘却、それからの超越を意味するわけである。ランボオの世界からすればそれは当然のことである。歴史を信ぜず、諸原理を忘却した世界は Néant の現成する世界として、一步のすべての事柄が Néant の象徴たる意味をもつ世界であった。豊かななる流転の世界であった。

Je m'en tairai : poètes et visionnaires seraient jaloux. Je

suis mille fois le plus riche, soyons avare comme la mer : ——

Je m'en tairai と云ふのは今までにすでに説明した様に、ランボオ

の世界が一步一步の一事一事に Néant を行ずる実践的了解の世界であ

地獄の 一季節註解(十)

って、对象的に把握することを許さず、想憶することをさへ許さない世界であったこと (Cf. L'Eternité ; Vies ; etc.) に基くので、言語を以てしては語る事ができないし、また語ることを無用とする世界であったからである。だから、ランボオは言語に対しては常に絶望的であり、沈黙しようといふことを繰返していつてゐるのである。筆を捨てたことが、その沈黙を行じたのであり、その放浪に彼の詩を行じたものと見るべきであらう。言葉を以て語る以上に完璧に詩を行じたものと考へられるのである。

しかも histoire を信ぜず、したがって horreurs économiques から身をひいて、損得、有価値無価値のはからひからは身をひいて、また、諸原理を忘却して、分別悟性を超えて無分別の世界にあって、一步一步の一事一事に Néant の現成を行じようとするところに、「燃え上る様な豊かな」世界が (Cf. Mauvais Sang, p. 23 ; Solde ; etc.)、

「熱烈なる養魚器」の様な生々流転の世界が (Cf. Bottom.) 展開せられたのである。しかもその一事一事が、相對のままに即絶対であり、正に見るところ聞くとところ一切がそのまま神の世界であり、その故にまた詩の世界であったのである (Cf. O Saisons, ô Châteaux ; etc., etc.)。即ち窮りもない豊かな詩の世界であつたのである。poètes et visionnaires seraient jaloux. Je suis mille fois le plus riche, soyons avare comme la mer と云ふ所は、

Cf. Pateau ivre, 19^e.

Libre, fumant, monté de brumes violettes,

Moi qui trouvais le ciel rougeoyant comme un mur

Qui porte, confiture exquise aux bons poètes,
Des lichens de soleil et de morves d'azur;

思ひのままにのびのびと、煙を吐きて、紫の霞を乗せて、
赤味を帯びたる大空を壁の如くに、剣り抜きし船、
積みたるは、太陽の蘚苔、蒼空の鼻汁、
世の中の詩人の輩に、至上の美味の砂糖菓子。

Cf. Solde.

A vendre ce que les Juifs n'ont pas vendu, ce que noblesse
ni crime n'ont goûté, ce qu'ignorent l'amour maudit et la probité
infernale des masses ; ce que le temps ni la science n'ont pas
à reconnaître ;

..... l'occasion, unique, de dégager nos sens!

A vendre les Corps sans prix, hors de toute race, de tout
monde, de tout sexe, de toute descendancel! Les richesses
jaillissant à chaque démarchel! Solde de diamants sans contrôle!
.....

Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices
insensibles, — et ses secrets pour chaque vice — et sa
gâté effrayante pour la foule.

A vendre les Corps, les voix, l'immense opulence inquestion-
able, ce qu'on ne vendra jamais.

売物。ユダヤ人でも売った事なかったものだ、貴族も罪人も味っ
た事のないものだ、民衆の呪はれた愛も地獄的な真正直も知らないも

のだ、時間も科学も認めるべきではないものだ。

..... 俺達感覚を開放する唯一無二の機会。

売物。凡そあらゆる種族の、あらゆる世界の、性別の、血統の、そ
の埒外にある価も量られぬ「肉体」。歩むに従って、迸り出る様々な
富。無統制のダイヤモンドの投売り。

.....

不可見の光彩、不可知の歡喜への、狂気じみた、無際限の飛躍。

——そして物狂ほしい様々な秘密は、各人の悪徳のためだ、——その
恐ろしい喜悅は群集のためだ。

売物。「肉体」だ、声だ、まさしく途轍もない豪奢だ。将来も断じ
て売手はないものだ。

Ah çà! l'horloge de la vie s'est arrêtée tout à l'heure. Je
ne suis plus au monde. — La théologie est sérieuse, l'enfer
est certainement en bas, — et le ciel en haut. — Extase,
cauchemar, sommeil dans un nid de flammes.

ああさうだ、生活の時計は、先刻止った許りだ。俺はもうこの世に
はゐないのだ。——神学に戯れ言はない、地獄はまさしく下に、ある、
——そして天は頭上に。——陶酔、悪夢、火焰の巢の中の眠り。

Ah çà! l'horloge de la vie s'est arrêtée tout à l'heure. Je
ne suis plus au monde : —

上来語ってきたところは、還相行における réalité épineuse に基く
苦悩に打ちひしがれて思はず彼岸の寂靜の世界に想ひをよせ、さらにか

かる愚行に対する反省自責、そこから当然下界に対する慈悲救済を思ひ、しかし所詮は断絶せられた孤独にあることを思ふのである。しかしその自己の世界こそ、抽象的観念的ではない最も具体的な此岸における有を媒介とする豊かな生々流転の世界、真実なる詩の世界であることを語ってきたのである。

しかし、かかる世界もけっして単なる直接的肯定に出るものではなかった。否定を媒介とする絶対肯定にのみ出てくるものであり、その有は Néant の象徴たる意味をもつものであった。事実 Les Soeurs de Charité においては

O Mort mystérieuse, ô soeur de charité.

神秘的な死神、おお、これぞまことの看護修道尼！

といひ、Enfance に語られてゐる様な寂靜の世界を媒介として出てきた世界であったのである。今、還相行にあつて、その辿ってきた過程を想ひ、還相即往相としてのその否定的一面を想ひ、l'horloge de la vie s'est arrêtée tout à l'heure. Je ne suis plus au monde. どうぞお呼びなせ。

horloge は Enfance とはけいん “Il y a une horloge qui ne sonne pas.” —— 時刻を打たない時計がある。—— や、おきの “Le clair de lune quand le clocher sonnait douze.” —— 鐘楼が十二時を鳴こつた時の月光——と同じ image に基く表現に外ならない。

La théologie est sérieuse, l'enfer est certainement *en bas*, ——
et le ciel en haut. —— Extase, cauchemar, sommeil dans
un nid de flammes : ——

おきの Je ne suis plus au monde といつてゐる立場に、即ち死の寂靜の立場に立つて見れば、正に théologie の教へるごとくに地獄は下に、天国は上にある。enfer と ciel との対立が現はれる。したがって当然 enfer より逃避して ciel の中に眠らうとするわけである。Enfance, V っ

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain,
les maisons s'implantent, les brumes s'assemblent. La boue est
rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔って、人々の家が並び立ち、霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。

といつてゐる様な此岸と彼岸、汚濁と清浄の対立分離をまぬがれない。これ等両者が対立のまままで相即的に結び付くことがない。それはランボオの世界ではない。ランボオの世界は前記の “les délices de la damnation” や “Un crime, vite, que je tombe au néant, de par la loi humaine.” といふ言葉が示す様に、また Mauvais Sang, p. 23 の “je voyais une mer de flammes et de fumée au ciel” —— 俺は天上に焰と煙との海を見た——といつてゐる様に、両者の矛盾のままの相即的結び付きにあつたのである。また Mauvais Sang, p. 21 の “O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse! ici-bas, pourtant!” —— おゝ俺の自己抛棄、おゝ俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この世のこと。——といつてゐる様に、この下界に現成すべき神の世界であつたのである。l'enfer est en bas, le ciel en haut は、単なる死の寂靜の世界と、地獄といつての le monde への対立を過ぎず、le monde を

捨てて死の寂靜の世界に眠らうとするものに外ならない。その眠りには Extase もあつて、また cauchemar でもあるわけだ。何故ならランボオ的世界はけっしてかかる単なる寂靜の世界における眠りの中にはなかつたから。その眠りは一度 Mauvais Sang, p. 19 で

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. Le meilleur, c'est un sommeil bien irre, sur la grève.

差当っては何はれの身だ、俺は祖国を怖れてゐる。砂浜にごろりと臥して、眠りこけるのが何よりだ。

と云つてゐる様な、砂浜における醉眠に過ぎないものである。——この p. 19 にあつた “affaires politiques” に立ち混る還相行において真に救はれるのだといふランボオ的世界に対する思想的予見をもちながら、なほ逃避的に、砂浜における醉眠を求めてゐるのであり、それを呪はれたあり方としてゐるのである。——しかも身は現に業火の中 nid de flammes にあつて、かかる逃避的醉眠を求めんに等しいわけである。この nid de flammes は Enfance, III における

Il y a une fondrière avec un nid de bêtes blanches.

白い生き物の巣を一つ抱へた窪地がある。

と云つてゐる、この nid de bêtes blanches (これは寂靜の世界を指す。) と対称的であり、enfer としてのこの業火の中に身を焼かれることを意味してゐる。enfer と ciel との対立、enfer をすつて ciel への逃避は、いはばかかる業火に身を焼かれながら逃避的醉眠を求めんに等しいといふわけである。

Que de malices dans l'attention dans la campagne
Satan, Ferdinand, court avec les graines sauvages
Jésus marche sur les ronces purpurines, sans les courber
..... Jésus marchait sur les eaux irriées. La lanterne nous
le montra debout, blanc et des tresses brunes, au flanc
d'une vague d'émeraude

配慮の「野原の」中に、どれ程の悪意の籠つてゐることか……悪魔フェルヂナンは野性の種をかへて走る……基督は茜色の茨を踏み、枝も撓めず進んで行く……基督は浪騒ぐ水の上を歩いてゐた。燈火はその姿を照した。白衣を纏ひ、栗毛の組髪、緑玉の滄の腹に立つてゐた……

Que de malices dans l'attention dans la campagne.....Satan, Ferdinand, court avec les graines sauvages : ——

この所はラスト氏の見解によれば、もともと dans l'attention と dans la campagne とが二行に書かれてゐて、一方を消すべきはずだつたものが、プウト版において両方とも一行に印刷されてしまつたものらしいといふ(ランボオ全集、III、八十五頁、参照)。

dans l'attention をとぎとすれば、ひびに Satan, Ferdinand と Jésus とが対称的に述べられてゐる、この対立に対するキリスト教的 théologie における attention をとぎとすものと考へられる。

dans la campagne をとぎとすれば、ひびの “Satan, Ferdinand, court avec les graines sauvages” が、この campagne に対する説明句になるものと考へられる。Ferdinand が graines sauvages をめ

て走る campagne' 即ち現実のこの世界は業火に身を焼かれ、業火に
やいなまれることをまぬがれないことをやとしてみるのである。

「 grains sauvages じいじい Michel et Christine において
Mais moi, Seigneur! voici que mon esprit vole,

Après les cieus glacés de rouge, sous les

Nuages célestes qui courent et volent

Sur cent Solognes longues comme un railway.

Voilà mille loups, mille grains sauvages

Qu'emporte, non sans aimer les liserons,

Cette religieuse après-midi d'orage

Sur l'Europe ancienne où cent hordes iront!

.....

—— Et verrai-je le bois jaune et le val clair,

L'Épouse aux yeux bleus, l'homme au front rouge, ô Gaule,

Et le blanc Agneau Pascal, à leurs pieds chers,

—— Michel et Christine, —— et Christ! —— fin de l'Idylle.

だが、俺は、主よ！俺の魂は舞ひ上る、

赤く染った空を追ひ、レールのやうに

長くのびたノローニエ地方の上空を、

馳せ飛ぶ天の雲の下を。

この敬虔な〔宗教的な〕嵐の午後は、

地獄の一季節註解(十)

千の狼、千の木の種子草の種子、

昼顔さへも残さずに、みんな一緒に運んで行く、

ジプシーたちの歩み行く昔ながらの歐洲の空を！

.....

——やがて俺には見えるのか、黄色い森と明るい谷、

青い眼相の人妻と、赤い額のその夫、おトコールよ、

そして二人の足元に、踰越祭の白仔羊、

——これぞミシェルとクリスチヌーそれにキリスト！——牧歌の終
焉。

といてみる。 grains sauvages は宗教的嵐の午後が、l'Europe an-
cienne の土を運んで行くものでもある。その上 Le bois jaune, le val clair
が見られるわけである。即ち grains sauvages は、自然のありのまま
の世界、主客未分の渾沌の世界の種子を意味するものと考へられる。ラ
ンボオの神の現成すべき世界、したがってそれは有を媒介とする此岸の
世界、したがって業苦をまぬがれない世界の種子としての grains
sauvages である。悪魔 Ferdinand がかかる種子をもって野を走るわ
けである。とすれば人間は業火に焼かれ、業苦にせめさいなまれること
をまぬがれない。が、そこにこそランボオの神の現成する世界があるわ
けだ。

Jésus marche sur les ronces purpurines, sans les courber.....

Jésus marchait sur les eaux irritées. La lanterne nous le mon-

tra debout, blanc et des tresses brunes, au flanc d'une vague

d'émeraude : ——

前記の Satan Ferdinand に対しての Jésus である。したがって彼岸の寂靜の世界におけるものとしての Jésus である。

ronces purpurines は、たゞは Marine にぞうじ

Les chars d'argent et de cuivre ——

Les proues d'acier et d'argent ——

Battent l'écumé, ——

Soulèvent les souches des ronces.

銀と銅の車が ——

鋼と銀の船首が ——

泡をたたき、 ——

茨の根株を掘り起す。

と云つてゐる。この車、船首は東方をきして、森の列柱、突堤の胸中へ向つて進むものである。したがつて、この “Battent l'écumé” “soulèvent les souches des ronces” は le monde の否定を意味するわけである。業苦からの透脱を意味してゐるわけである。

この場合の ronce も同じで、le monde の業苦を象徴するものである。purpurine は rouge, noir と同様 (Cf. Mauvais Sang, p. 23; Enfance, V.) le monde を象徴するものと考えてよいであらう。かへつて Jésus が ronces purpurines の上を歩くとは地上の業苦を外に見て歩く寂靜の世界を意味するものと考へられる。sans les courber はいふまでもなく、業苦としての ronces にわずらはねれることのないことを意味するわけで、ronces に足を据多て共に苦しむことのない透脱寂靜の状態を意味するわけである。

Les eaux irritées の上を歩くと云ふことも全く同様で、前掲 Marine にぞうじ Battent l'écumé と軌を一にする表現であり、Les eaux irritées 中の l'écumé に該当する言葉であり、le monde にぞうじの業苦の中にうづもく姿を象徴するものと考えてよいであらう。

また、Marine にぞうじ Les chars —— les souches des ronces ; Les proues —— l'écumé の対照的表現を用ひてゐると同様で、この y marcher sur les ronces purpurines ; marcher sur les eaux irritées の様に対照的表現を用ひてゐる。両者その軌を一にしてゐる。

この両者に、その執筆の時期の先後は別として、何等かの関係があるのではないかと考へられる。なほ Bateau ivre, 4^e にも、つぎの様な表現が見られる。

La tempête a béni mes éveils maritimes.

Plus léger qu'un bouchon j'ai dansé sur les flots

Qu'on appelle rouleurs éternels de victimes,

Dix nuits, sans regretter l'oeil ni ais des falots!

その時、暴風は海上のわが覚醒に祝福を浴せかけたり。

永劫に犠牲を転々すると謂ふ。波濤の上に

ユルクの栓よりなほ軽く、身を躍らせて、

夜は十夜、港の燈火の阿呆なる眼つきも悔いず。

おそひへ、この les flots / Qu'on appelle rouleurs éternels de

victimes も、ランボオの波に対する同様のところへ方を示すものとみて

よいであらう。

blanc, des tresses brunes は清浄にして、きちんとした身なりをいふので、業苦の迹をとどめぬ寂靜の世界における Jésus の状態を示す

言葉であらう。

au flanc d'une vague d'émeraude じつじだ Mystique じみ
Sur la pente du talus les anges tournent leurs robes de laine
dans les herbages d'acier et d'émeraude.

Des prés de flammes bondissent jusqu'au sommet du ma-
melon.

斜面の勾配の上で、鋼鉄と緑玉との草叢に、天使達は毛織の衣をひ
るがへす。

火焰の草原は円丘の頂まで躍り上る。

とらつてゐるところと照応するものがあり、au flanc とらつてゐるの
は、Mystique における sur la pente du talus に当る表現で、prés
des flammes から逸脱した世界を、即ち寂靜の世界を意味するものと
考へてよいであらう。したがって、その色はじつじでも、Mystique にお
いても émeraude の色である。bleu, vert と象徴的意味を同じくす
るものとみてよいわけである。

かくて、Satan Ferdinand が graines sauvages をまいた悪意に満
ちた、汚濁業苦の有の世界と、一方、それとは無関係に汚濁業苦の迹を
とどめぬ寂靜の世界における Jesus とが、対比的に語られてゐるわけ
である。かかる両者が相即時に結び付くことのない単なる対立相対の世
界はランボオの世界ではなかつたのである。

Je vais dévoiler tous les mystères : mystères religieux ou
naturels, mort, naissance, avenir, passé, cosmogonie, néant.

地獄の一季節註解(十)

Je suis maître en fantasmagories.

俺は、凡ての神秘を発かう、宗教の神秘を、自然の神秘を、死を、
出生を、未来を、過去を、世界の創成を、虚無〔無〕を。俺は幻術の
道士だ。

ランボオの世界は、けつして、神秘主義的世界ではなかつたが、自己の
世界を形容する言葉としてはしばしば mystérieux 乃至は merveilleux
といふ語を使つてゐる。それは彼の世界が近代ヨーロッパ的立場やキリ
スト教の立場からみれば mystérieux じみ merveilleux にもみえる世
界であつたことによるものであらう。délire や folie とその軌を一に
する表現法である。

Cf. Mauvais Sang, p. 21.

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse! ici-bas, pour-
tant!

おゝ俺の自己抛棄、おゝ俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この世
じつじ。

Cf. Délires, I, p. 42.

Ses délicatesses mystérieuses m'avaient séduite. J'ai oublié
tout mon devoir humain pour le suivre.

あの神秘の籠った微妙な举措が妾を惑はしてつたのです。妾は人
としての務も忘れ果て、あれについて行つたのです。

Cf. Délires, II, p. 55.

je voyais très franchement une mosquée à la place d'une

usine, une école de tambours faite par des anges, des calèches sur les routes du ciel, un salon au fond d'un lac; les monstres, les mystères;

何の遲疑なく俺は見た、工場のある場所に回々教の寺を、天使達の教へる鼓手養成所を。軽快な四輪馬車は天空街道を馳けたし、湖の底にはサロンが開かれたし、様々な妖怪変化に、様々な神変不思議、……今、ランボオ自身の言葉を使つていへば、ランボオの mystères は mystères religieux あらひは mystères naturels であつたのであり、それは生死、時間、宇宙創造、即ち無に關する mystères であつたのである。

ランボオの mystères を知る上は Les Illuminations の “Mystique” は重要な手がかりとなるものと思はれるので、今、煩をいとせずその全文をあげておかう。

Sur la pente du talus les anges tournent leurs robes de laine dans les herbages d'acier et d'émeraude.

Des prés de flammes bondissent jusqu'au sommet du mamelon. A gauche le terrain de l'arête est piétiné par tous les homicides et toutes les batailles, et tous les bruits désastreux filent leur courbe. Derrière l'arête de droite la ligne des orient, des progrès.

Et tandis que la bande en haut du tableau est formée de la rumeur tournoyante et bondissante des conques des mers et des nuits humaines,

La douceur fleurie des étoiles et du ciel et du reste descend en face du talus, comme un panier, — contre noire face, et fait l'abîme fleurant et bleu là-dessous.

斜面の勾配の上で、鋼鉄と緑玉との草叢に、天使達は毛織の衣をひるがへす。

火焰の草原は円丘の頂まで躍り上る。左手には稜線の肥料土が、殺人といふ殺人、戦闘といふ戦闘に踏みならされ、全ての不吉な音響はその曲線を繰り出す。右手の稜線の背後には、曙と進歩の直線。

そして、海の方法螺貝と人間の夜との旋回し跳躍する騒音で、画面の上方には、幅の狭い一つの地帯が形成されるが、

星や、空や、その他のもので飾られた優しさが、斜面をまともに、花籠の様に——俺達の顔の真向ひに降りて来て、その下の方に花さく蒼い淵をこしらへる。

この様な mamelon 乃至は傾斜面の image は Les Illuminations の中にしばしば現はれてくる image であつて、今の場合、その左に人間における闘争、不幸、悪をおき、その右に orient, progrès、清浄をまつてゐる。

しかもこの兩者の間には、一本の bande が形成せられ、その bande はかかむ conques des mers (清浄、寂靜) と nuits humaines (汚濁、無明) との “rumeur tournoyante et bondissante” とよんで形成せられるのである。Marine とはなつて

Les courants de la lande,
Et les ornières immenses du reflux,

Filent circulairement vers l'est,

Vers les piliers de la forêt, —

Vers les fûts de la jetée,

Dont l'angle est heurté par des tourbillons de lumière.

荒野の潮流と、

引潮の広大な轍は、

円を描いて流れ去る、東の方へ、

森の列柱の方へ、——

突堤の胴中の方へ、

その角は光の渦巻きと衝突する。

とらつてゐる、この tournante et bondissante あるひは circulairement
あるひは tourbillons de lumière といふ表現は、相矛盾する両者の相
即融合の關係を示すものと考へてよいであらう。汚濁即清浄、清浄即汚
濁、二即一、一即二の相即の關係を示すものと考へてよいであらう。も
ちろん、それは

Les chars d'argent et de cuivre ——

Les proues d'acier et d'argent ——

Battent l'écumé, ——

Soulèvent les souches des ronces.

銀と銅の車が——

鋼と銀の舟首が——

泡をたゞき、

茨の根株を掘り起す。

といつてゐる様に否定を媒介とするものである。

その douceur fleurie (douceur にしつては Barbare 等参照の
こと) douceur はしつては viande saignante と soie des mers, fleurs
arctiques のしつては相矛盾するものの相即融合に成立するものであ
つた。)として一なる世界が形成せられるとともに、その一なる世界はわ
れわれの方に向つて、——上でもなく、斜面でもなく、——われわれの
下界に向つて降りてくるのである。即ち、それは単なる彼岸の寂靜の世
界ではなく、下界における、此岸における一なる世界であるわけであ
る。かくて此岸の汚濁がそのまま一なる清浄の l'abîme fleurant であ
るわけである。

即ち、二は即一であり、一は即二である。彼岸は即此岸であり、此岸
は即彼岸である。かかる矛盾の相即融合、此岸における相対的有を媒介
とする絶対無の現成をさして Mystique としつてゐるのである。

Je vais dévoiler tous les mystères としつてゐる mystère はか
かる世界をさしてゐたのである。しかもそれが単に絶対の世界であるに
とどまらず、ランボオにおいては同時に、それは聖なる神の世界であ
つたから mystères religieux といふわけである。ランボオは単なる絶対
の探究者ではなく、独自の宗教、神の探究者であつたのである。一人の
典型的な宗教詩人と考へてよいわけである。anti-christianisme であ
つたことは宗教詩人であることとけつして矛盾するものではない。

かくて Mauvais Sang にさつても神の愛が語られ (p. 26.) (Cf.
Comédie de la Soif, I, Les parents ; Génie ; L'Impossible,
p. 70.)、慈悲救済が語られるのである (p. 26.) (Cf. Génie ; etc.,

etc.)。UQ Nuit de l'enfer, p. 36 ニヤコトシ

Tous, venez, — même les petits enfants, — que je vous console qu'on répande pour vous son coeur, — Je coeur mer-veilleux!

みんな来るがいい、——子供達も来るがいい、——俺は君達を慰めよう、君達の為に、人はその心を、靈妙な心を、ふりそそぐやうに為よう。

と慈悲救済の手をもちのび、

Fiez-vous donc à moi, la foi soulage, guide, guérit ………

Pauvres hommes, travailleurs! Je ne demande pas de prières; avec votre confiance seulement je serai heureux.

それでは、俺を信ずる事だ、信仰が、心を和げ、導き、癒すのだ。……哀れな人々、労働者達。俺は祈りなどを望みはしない。君達の信頼さへあれば、俺は幸福になれるだらう。

と信仰を語ってゐるのである。また、苦悩行を以て catéchisme の実行だともするのである (p. 34)。

かつ、前記の様に、否定を媒介とする汚濁即清浄、清浄即汚濁の轉換に Néant が現成したのである (Cf. Nuit de l'Enfer, p. 34; Mauvais Sang, p. 24; Vies, I.)。UQ Néant をナハサレヨリノが Nature の世界でもあったわむむである (Cf. Mauvais Sang, p. 24; Bannières de Mai; Âge d'Or; etc., etc.)。mystères religieux ou naturels といふ所以である。

また否定を媒介とする轉換に必然的に生死の問題 (mort, naissance)

(Cf. Mauvais Sang, p. 22, — Faiblesse ou force : te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout. On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre. — 弱気にしろ、強気にしろだ、貴様がさうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りはない、何故行くのかも知りはない、何処へでも到る所に入って行け、何にでも返答をしろ。貴様が仮りに屍体であったとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあるさう。——; etc., etc.)が生じ、時間の問題 (avenir, passé) (Cf. L'Éternité; A une Raison, — Change nos lots, crible les fléaux, à commencer par le temps. — 俺達の運勢を變くつくれ、災難を篩つてくれ、先づ時間とらぬ奴をどうにかするんだ。——; etc., etc.)が生じ、それは即ち cosmogonie の問題 (Cf. Nuit de l'Enfer, p. 33, — C'était des millions de créatures charmantes, ………) であつたわけであり、Néant の問題であつたわけである。

かかる mystères にナハサレ voyant であつたヨリノ Je suis maître en fantasmagories とらぬ理由がある。fantasmagories とらぬ語は、ランボオ的世界の vision, hallucination との連関において出づき来た語であり、これにのびてヨリノである。

Veut-on des chants nègres, des danses de houris? Veut-on que je disparaisse, que je plonge à la recherche de l'anneau? Veut-on? Je ferai de l'or, des remèdes.

黒奴の歌を歌って欲しいのか、美女の踊りを見たいのか。俺が消え失せるのを見たいのか、それとも、「略」指環の探索に水に潜れとて

もいふのか。お望みか。お望みならば黄金でも、霊薬でも作ってやろう。

と云つてゐる様な表現との連関において出てきた語である。即ち *mystères* の *vision*, *hallucination* との連関を云つてきた語であつて、*fantasmagories* は単なる *fantasmagories* ではないからである。それは論理に支へられた絶対真理の世界であつたから。

Cf. Parade.

J'ai seul la clef de cette parade sauvage.

この野性の道化芝居の鍵は、唯、俺一人が握つてゐる。

Ecoutez !

J'ai tous les talents ! — Il n'y a personne ici et il y a quelqu'un : je ne voudrais pas répandre mon trésor. — Veut-on des chants nègres, des danses de houris? Veut-on que je disparaisse, que je plonge à la recherche de l'anneau? Veut-on? Je ferai de l'or, des remèdes.

聞き給へ……

俺はどんな能力でも持つてゐる。——此処には誰もゐない、而も誰かがゐるのだ。俺は俺の宝をばら撒きたくはない。——黒奴の歌を歌つて欲しいのか、美女の踊りを見たいのか。俺が消え失せるのを見たのか、それとも、「略」指環の探索に水に潜れとでもいふのか。お望みか。お望みならば黄金でも、霊薬でも作つてやらう。

Ecoutez !

J'ai tous les talents ! : —

地獄の一季節註解 (H)

Je suis maître en fantasmagories と云つてゐるからだが、*J'ai tous les talents* と云つてゐる。この *talents* は直接的には、*fantasmagories* といふ様な *chants nègres*, *danses de houris*, *anneau*, *de l'or*, *remèdes* を作り、現出せしめる能力を云つてゐる。即ち、絶対真理の世界、神の世界を *dévoiler* し、現成せしめること、*Néant* を行ずること、*他者*、*naufragés* (cf. *Mauvais Sang*, p. 26.) をも無畏、安らぎの世界に安住せしめ得る能力を云つてゐることを云つてゐる。

Cf. Génie.

Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveilleuse et imprévue, et l'éternité : machine aimée des qualités fatales. Nous avons tous eu l'épouvante de sa concession et de la nôtre : ô jouissance de notre santé, élan de nos facultés, affection égoïste et passion pour lui, lui qui nous aime pour sa vie infinie

彼こそは、再創始された完全な尺度たる、予見を許さぬ驚くべき理智たる愛であり、また、永遠である。即ち、どうしやうもない資質に愛された機械である。俺達は皆、予てから、彼の許す処に驚き、又、自ら許す処にも驚いてゐたのだ。思つてもみる、俺達の健康の享樂、俺達の能力の躍進、エゴイストの愛情と彼に対する情熱を、——彼こそ己れの無限の生命の為に俺達を愛するのだ……

また同じく *Génie* の様にも云つてゐる。

O ses souffles, ses têtes, ses courses ; la terrible célérité

de la perfection des formes et de l'action.

お、彼の息、頭、足なみ。諸々の形態の完成され、行動の行はれる、恐るべき迅速さ。

随時随所の「完成」の能力である。

Il n'y a personne ici et il y a quelqu'un : je ne voudrais pas répandre mon trésor : —

誰もめなくて、しかも誰かがゐるとは矛盾である。ランボオの世界は、もともと矛盾のままに相即する世界であった。Néantを行することは、もちろん、一切の否定、自己否定 (Cf. Mauvais Sang, p. 14, 21, etc.) を媒介とする空なる世界、死の世界、ennui を一つのモメンツとする (Cf. Les Soeurs de Charité ; Enfance ; etc., etc.) ものである故に il n'y a personne ici といふわけである。しかし、その否定は単なる虚無的死の世界ではなく、有の肯定へと転換せられたのであり、ennui は超克せられたのである (Cf. Bannières de Mai ; Mauvais Sang, p. 27 ; etc., etc.)。即ち否定即肯定として、死することにおいて生が行じられたのであり (Cf. Mauvais Sang, p. 22) 、この否定的転換に Néant が行じられたのであり、そこにまた、有の絶対肯定として豊かな焼える様な流転の世界が展開せられたのである (Cf. Mauvais Sang, p. 23 ; Bottom.)。かく有を媒介とするものであり、有の絶対肯定の立場にあるかぎり et il y a quelqu'un といふわけである。即ち、否定即肯定、肯定即否定、有即無、無即有なるランボオの世界が Il n'y a personne ici et il y a quelqu'un とするわけであるわけである。p. 37 *je suis caché et je ne le suis pas. — 俺は隠*

されてゐる、而も隠されてゐない。——といつてゐることと、相照応する言葉である。

また、この世界こそ、絶対の世界、神の世界、また真なる安住の世界としてランボオがしばしば de l'or をもつて、diamant をもつて、pierres précieuses をもつて表現しようとしたのであり、mon trésor といふ所以である。

しかもこの trésor をはらまきたくないといふのは、本来、この世界が、信ずるといふことにおいて、すべてに開放せられた世界であり、public なものであり、上記の様に、随時随所の完成への能力をもつが故である。強ひて répandre する要もないわけだし、répandre することも不可能でもあるわけだ。所詮は信ずることにおいて、随時随所に一切を介して、この trésor に与り得るわけだから。かくてこの後で Fiez-vous donc à moi…… — それでは、俺を信ずる事だ、…… — *je suis avec votre confiance seulement je serai heureux — 君達の信頼をへあれば、俺は幸福になれるだらう。——*といふわけである。

Cf. Génie.

Il est l'affection et le présent puisqu'il a fait la maison ouverte à l'hiver écumoux et à la runneur de l'été, ………

泡立つ冬に、夏のちわめきに、家を明け放ったからには、彼は愛情だ、現在だ。……

Cf. Mauvais Sang, p. 26.

La richesse a toujours été bien public. L'amour divin seul

octroie les clefs de la science. Je vois que la nature n'est qu'un spectacle de bonté.

豊かたは常に公衆の利益「もの」だったのだ。神の愛だけが知識の鍵を与へてくれる。自然は善心に溢れた見世物に過ぎない。「自然は慈愛の展覧に外ならぬ」と俺には見えるのだ。

Veut-on des chants nègres, des danses de houris? Veut-on que je disparaisse, que je plonge à la recherche de l'anneau? Veut-on? Je ferai de l'or, des remèdes : —

「うむ、veut-on, veut-on と繰り返されるのは、ランボオ的世界の image を上記 fantasmagories のの連関にまつ vision, hallucination の形において列挙せんが為である。もちろん、それは慈悲救済の想ひにかられて出てくる言葉である。かへつて Je ferai de l'or, des remèdes —— お望みならば黄金でも、靈薬でも作つてやる。—— とうむ、Fiez-vous donc à moi とうむわけである。

chants nègres とは Génie における le chant clair des malheurs nouveaux —— 新しく不幸の清澄な歌声——である。汚濁即清浄、清浄即汚濁としての唄である。Nature の唄である。nègre と Mauvais Sang, p. 24 におこす

Je suis une bête, un nègre. Mais je puis être sauvé.
如何にも俺は獣物だ、黒坊だ。だが、俺は救はれ得るのだ。

と書いてある nègre であり、それは知性の否定、知性に基く一切の文化の否定、人間の否定に出てきた世界であり、race inférieure とする nègre であった。bête の世界であった。それはいはば人間の一切

のはからひの加はる以前の une brute (Cf. Mauvais Sang, p. 23.) の世界でもあった。かかる世界こそ、彼岸の抽象的観念的な世界ではない、此岸における安住の世界であり、de l'or であり、des remèdes でもあるわけだ。

danses de houris と chants nègres と同様、かかる安住の世界をやすものである。

anneau は “anneau de Gyges” 等一連の話に出てくる魔法の指環であり、この指環によって自分の姿を消すことができ、結局この指環を手に入れたおかげで、羊飼であった Gyges が Lidie の王様になったといふ幸福の指環でもあったわけである。したがって je plonge à la recherche de l'anneau とは、神の世界における幸福の世界、trésor の世界の探求獲得を意味するわけである。que je disparaisse とするもの、この指環に連関して出てきてある言葉である。

もし人がこれらを欲するならば、自分は fantasmagories の大家として、あらゆる能力をもつてゐるのだ、de l'or も作り、悩める者病める者には des remèdes も作り。しかも、かかる de l'or, des remèdes は本来すべてに開放せられてをり、public なものだ、随時随所に得られるはずのものだ。ただ confidence のみが必要となるのだ。

Fiez-vous donc à moi, la foi soulage, guide, guérit. Tous, venez, —— même les petits enfants, —— que je vous console, qu'on répande pour vous son coeur, —— le coeur merveilleux! —— Pauvres hommes, travailleurs! Je ne demande pas de prières; avec votre confiance seulement je serai heureux.

それでは、俺を信ずる事だ、信仰が、心を和げ、導き、癒すのだ。みんな来るがいつ、——子供達も来るがいつ、——俺は君達を慰めよう、君達の為に、人はその心を、靈妙な心を、ふり注ぐやうにしよう。——哀れな人々、労働者達。俺は祈りなどを望みはしない。君達の信頼さへあれば、俺は幸福になれるだらう。

Fiez-vous donc à moi, la foi soulage, guide, guérit : ——

これはいふまでもなく、先の「J'ai tous les talents! ……… Vent-on? Je ferai de l'or, des remèdes.」を受けて、それに対する言葉である。自分にはあらゆる能力があり、苦悩を癒やし、解脱の安住国を欲するなら、それを作りましょう。ところが、かかる世界は、本来、すべての人に開放せられてをり、public なものであるが、ただ信ずるといふことにおいてのみ、かかる国に住まふことが可能になるのだ。信ずることにおいて和らげられ、導かれ、癒されるであらう。——すぐ後で avec votre confiance seulement je serai heureux. とうっている。

神の愛に支へられた慈悲救済の思ひに出る言葉である。しかも、この信仰自体を神が呼びますのべあり (Cf. Génie, —— Et si l'Adoration s'en va, sonne, sa promesse sonne : ((Arrière ces superstitions, ces anciens corps, ces ménages et ces âges. C'est cette époque-ci qui a sombré!)) —— 若し『崇拜』が姿をかくせば、鳴るのだ、彼の約束「のぞみ」が鳴るのだ。『退れ、群がる迷信、昔ながらの肉体、それらの世帯と年令共。当代こそ正に潰滅したのだ』と。——) Les Parents が与へようとする酒に對して、 Ah! tarir toutes les urnes ——

そ「あ」と「甕」といふ甕が干したいものさ——といふ言葉が発せられるまで、呼びかけてやまないのだから (Cf. Comédie de la Soif, I, Les Parents.)。この Les Parents の呼びかけに應ずることが信仰であり、この Ah! tarir toutes les urnes は、正にこの呼びかけに應ずる念仏に該当する言葉である。この呼びかけに應ずる信仰において、soif——煩惱、苦悩——をもさっさと、そこへ

Mais fondre où fond ce nuage sans guide

—— Oh! favorisé de ce qui est frais!

Expirer en ces violettes humides

Dont les aurores chargent ces forêts?

よし、当所ない浮雲の、とろける処でとろけよう。

——ああ、爽やかな、爽やかなものの手よ。

露しいた莖のなかでこと切れよう。

明け方が、莖の色に野も山も、染めてくれぬと限るまい。

「それでも、当所ない浮雲の、消える処で消えるのだ。

——おお、すがすがしき恩寵の中に。

露しいた莖のなかでこと切れよう。

暁に、森は莖の色に、ひたされてでもあるであらうか。」

といつてある様な、自然のままに流れ行く、行云流水の世界が展開せられ、安楽行も得られるのである。la foi soulage, guide, guéritといふ所以である。

その安楽行は、けっして単なる苦悩のない世界におけるものではなかつた。

O saisons, ô châteaux,

Quelle âme est sans défauts?

季節が流れる、城塞が見える、「おお季節よ、おお城よ」
無疵な魂なぞ何処にあらう?

といてゐる様に、見るところ、聞くところ、一切の汚濁、有の世界がそのままに清浄なる神の世界であるといふ意味においての安楽行、救済であったのである。それは *le chant clair des malheurs nouveaux* (Génie) の明はれる世界であった。それが神の呼びかけに應ずる信仰において約束せられるのである。Fiez-vous donc à moi…… はかかる呼びかけの言葉である。

しかも、かかる信仰は祈りを要求したのである (Je ne demande pas de prières.) が、信するところと信すべしと云ふことは、呼びかけに應ずるところと信するところとを区別する (Cf. Mauvais Sang, p. 22. — On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.) と云ふ *abnégation* を行ふところと信するところとを区別する (Cf. Mauvais Sang, p. 21.)。信するところとは、死にながら生きることであるわけだ。

Tous, venez, — même les petits enfants, — que je vous console, qu'on répande pour vous son coeur, — le coeur mer-veilleux! : —

この tous は文字通り一切の人間をさすわけである。一切の人が友として救はれねばならない。また信することにおいて、一切の人に開放せられてゐる世界でもあるから。

Cf. Mauvais Sang, p. 26.

地獄の 一季節註解 (中)

J'ai laissé des âmes dont la peine s'accroîtra de mon départ!
Vous me choisissez parmi les naufragés ; ceux qui restent
sont-ils pas mes amis?

Sauvez-les!

俺は多くの靈魂を見棄てて来たが、彼等の苦しみは俺の出發によって増す許りであらう。貴方は、(神よ、) 難破した人々の中から俺を選んで下さった。が、取り残された人々も、俺の友達ではないのか。彼等を救ひ給へ。

même les petits enfants といふのは、子供は自らにして嬰孩行を行するものとして、したがって天使として、ほとんど救済されることの必要のない者として、いてゐるのである。ランボオは子供に対してはかかる目をもってみてをり、子供の世界を神の國ともみてゐたのである。

Cf. Matinée d'Ivresse.

O mon Bien! O mon Beau! …… Cela commença sous les rires des enfants, cela finira par eux.

あゝ、俺の『善』、俺の『美』。……これは子供達の笑ひで始つたが、又、彼等の笑ひで終るだらう。

Cf. Les éffarés.

Noirs dans la neige et dans la brume,

Au grand soupirail qui s'allume,

Leur culs en rond,

A genoux, cing petits — misère! —

Regardent le Boulanger faire

Le lourd pain blond.

雪の中、靄の中に黒々と、

風抜窓のほてりの前に、

お尻を輪にして

跪き、五人の子供が、——いざらしや！

パン屋が重い亜麻色のパンを

焼くのを眺めてゐる。

かういふ子供までも来いといふことは、煩惱苦悩になやみ苦しむものはすべて、の意を含むわけである。即ち上記の様に、文字通り一切の人達に対する呼びかけを意味するわけである。

son coeur, —— le coeur merveilleux —— じのmerveilleux は既述の様にランボオ的世界に対する形容の言葉と見るべきである。近代ヨーロッパ的でもない、キリスト教的でもない、前代未聞の、予見もされなかつた、驚くべき心をふりそそがう。そこでこそ人ははじめて真に安住の国を見出すであらう。信ずることにおいてすべての人にふりそそがれるわけである。

Cf. Génie.

Il ne s'en ira pas, il ne redescendra pas d'un ciel, il n'accomplira pas la rédemption des colères de femmes et des gâtés des hommes et de tout ce péché : car c'est fait, lui étant, et étant aimé.

彼は何処にも立ち去りはしまし。空から下りても来ない。女共の憤怒と男共の上機嫌とこの罪業全部との、贖ひを遂げようともしまし。何故なら、彼が存在し、愛されてゐる限り、もう出来てゐるのだから。

信ずることにおいて、即身成仏であり、庭前柏樹である。

Cf. Solde.

Élan insensé et infini aux splendeurs invisibles, aux délices insensibles, —— et ses secrets affolants pour chaque vice —— et sa gâté effrayante pour la foule.

A vendre les Corps, les voix, l'immense opulence inquestionnable, ce qu'on ne vendra jamais. Les vendeurs ne sont pas à bout de soldes! Les voyageurs n'ont pas à rendre leur commission de si tôt!

不可見の光彩、不可知の歓喜への、狂気じみた、無際限の飛躍。——そしてその物狂ほしい様々な秘密は、各人の悪徳のためだ、——その恐ろしい喜悅は群集のためだ。

売物。『肉体』だ、声だ、まさしく途轍もない豪奢だ。将来も断じて売手はないものだ。まだまだ品物に不足せぬ。旅人達は、あわてて手附を置くには当らない。

かかる驚くべきsolde, le coeur merveilleuxもけして彼岸におけるものではなく、それは vice, foule に対するもの、即ち此岸において現成せらるべきものである。

Pauvres hommes, travailleurs! Je ne demande pas de prières;

avec votre confiance seulement je serai heureux : —

Pauvres hommes, travailleurs *とらふら* Mauvais Sang, p. 14

と

J'ai horreur de tous les métiers. Maîtres et ouvriers, tous paysans, ignobles. La main à plume vaut la main à charrie.

—— Quel siècle à mains! —— Je n'aurai jamais ma main.

ありとあらゆる職業がやり切れぬ。親方〔教師〕と職工、全ての百姓、「すべて百姓だ、」穢はしい。ペンを持つ手も鋤をとり手も同じ事だ。——なんと手許り幅を利かせる世紀だろう。——俺は自分の手など決して使ふまい。

かく職業、手を否定し（手を否定することは、人間たることの否定でもある）、また Ville と

Ces millions de gens qui n'ont pas besoin de se connaître a-mènent si pareillement l'éducation, le métier et la vieillesse, que ce cours de vie doit être plusieurs fois moins long que ce qu'une statistique folle trouve pour les peuples du continent.

自分を識らうとする要求を持たぬこの幾百万の人々は、すべて一列一体、教育を、職業を、老齢を曳摺って行く。これでは人の生涯は、ある気違ひ染みた統計が、『大陸』の人々に就いてしらべた処より、幾層倍も短いものに違ひない。

といつてゐる。即ち職業、手の人間は、己を知らうとする欲求をもたない人間である。即ち知性と社会性とを前提とする相対性の中の人間、したがって我執反目の人間、したがって煩惱苦悩の中にうごめく世俗の人

間は、最も真実なる自己、ランボオ流にいへば、人間の宿命としての幸福の世界 (Cf. O Saisons, ô Châteaux ; Délires. II, p. 60, 61.) を知らうともしない人間である。travailleurs とは、かかる煩惱具足の人間、宿命としての幸福の世界を知らうともしない人間の意味でいってゐる *らふら*。Pauvres hommes, travailleurs *とらふら* 所以である。なほ Ouvriers と

La ville, avec sa fumée et ses bruits de métiers, nous suivrait très loin dans les chemins. O l'autre monde, l'habitation bénie par le ciel et les ombrages!

町は生業の煙と音を伴って、道々、遠くから俺達をつけて来た。お、別の世界だ、空と樹蔭に恵まれた住居だ。

お、別の世界だ、空と樹蔭に恵まれた住居だ。かかる l'autre monde を知らない、哀れな人間としていつてゐるのである。かかる人達 *たぐ* に、いはばかかる naufragés *たぐ* の Le coeur merveilleux をやり *と* がうといふわけである。空と樹蔭とによつて祝福された l'autre monde に立ち還らせようといふわけである。それには、ただ、信ずるといふことのみが要求せられるだけで、そこには祈りは要求せられないのである。ランボオの神、宗教においては、祈りは否定せられてゐるのである。Mauvais Sang, p. 28 と

Si Dieu m'accordait le calme céleste, aérien, la prière, —— comme les anciens saints. Les saints, des forts! Les anachorètes, des artistes comme il n'en faut plus!

神が若し上天の、天空の平穩を、祈りを、俺に与へてくれたなら、

「俺に与へてくれるとしても、」——古代の聖賢に与へたやうに。「古代の聖賢のやうに。」——聖人か、強者か、ふん、遁世者、一向無用の芸術家か。

と云つて、祈りを否定してゐる。ランボオの世界が、*le calme céleste, aérien* の世界、彼岸における寂靜の世界ではなかつたからである。彼岸のかかる神に対しては、此岸の人間は祈らざるを得なかつたわけであるが、ランボオの神の世界は此岸の有を媒介としての現成する世界であり、一時一時の一事一事を媒介として行ぜられるべき神であつたが故に、即ちこの一時一時の一事一事が有であり汚濁であるとともに、絶對であり、清浄なる神の世界であつたが故に、そこには祈りが否定せられたのである。神があり、神が愛せられる、信ぜられるといふことでよいわけである (Cf. Génie; — *c'est fait, lui étant et étant aimé* —— 彼が存在し、愛されてゐる限り、もう出来てゐるのだ。——)。その信仰自体が前記の様に、神から呼びかけられ、呼びさまされるのである。その呼びかけ、呼びさましに應ずる信仰があればよいわけで、そこには人間から神に対する祈りは必要としないわけである。應ずるといふ実践において、すでに、神の世界にあり、救はれてゐるからである。

—— *Et pensons à moi. Ceci me fait peu regretter le monde. J'ai de la chance de ne pas souffrir plus. Ma vie ne fut que folies douces, c'est regrettable.*

Bah! faisons toutes les grimaces imaginables.

——扱て、俺一人の身を考へてみても、先づ此の世には未練はない。

仕合せな事には、俺はもう苦しまないで済むのだ。俺の生活とは、優しい愚行〔狂気〕のつなかりに過ぎなかつた。それが残念だ。糞、思ひつく限りのしかめ面をしてやらう。

Et pensons à moi. Ceci me fait peu regretter le monde. J'ai de la chance de ne pas souffrir plus. Ma vie ne fut que folies douces, c'est regrettable : ——

上の一節が煩惱具足の *naufrares* に対する慈悲救済の呼びかけであつたのに対して、ここは自らふりかへつていふ言葉である。ランボオの世界、神の世界にとって *le monde* の否定は必須の過程であつた。この否定を媒介としてのみ、ランボオの世界、神の世界が展開せられたのであつた。また、還相行における絶對肯定的な立場においても、それはけつして *le monde* に対する直接的肯定ではなかつた。したがつて *le monde* の否定に対して、いまさらに、それを残念だとは思はないわけである。—— *Ceci me fait peu regretter le monde* —— そしてこの世界こそ絶對真理の世界として自他ともに救済せられるべき無畏安樂の世界であつた。J'ai de la chance de ne pas souffrir plus といふわけである。

Cf. Génie.

Son jour! l'abolition de toutes souffrances sonores et mouvantes dans la musique plus intense.

彼の口。あらゆる苦惱は張り切つた音楽〔もつと強力な音楽〕の中に鳴り動き消えて行く。

Cf. Chanson de la plus haute Tour.

Craintes et souffrances
Aux cioux sont parties.

しめる怖れや苦しみは
空に向って昨日去った。

もちろん、それが無畏安楽といっても、不幸のない世界ではない。それは不幸の中に「あてゐない」世界である。その意味で無畏安楽の世界である。だから、そこに出てくる歌声は *le chant clair des malheurs nouveaux (Génie) である。' l'abolition …… dans la musique plus intense としちわけである。p. 34 じゃ les délices de la damnation としちんがいはれるわけである。*

Ma vie ne fut que folies douces, c'est regrettable としちのせ、le monde の否定が単なる往相的虚無的死の世界にとどまった、かつての状態を残念だったといふのである。Enfance における単なる寂靜の世界、あるひは、死の世界に soeur de charité を求めた Les Soeurs de Charité の世界のしちち、否定的往相の世界にとどまらず、現在の還相的肯定的立場に立ち還ることを知らなかったかつての状態をさして folies douces としちのせである。Le monde 否定の立場は、le monde の立場からみれば folie であり、désordre であり、délires であるからである。

Cf. Délires, II, p. 51.

A moi. L'histoire d'une de mes folies.

聞き給へ。この物語も、数々の俺の狂乱の一つなのだ。

もちろん、この folies もランボオ的世界展開のための必須の過程ではあ

たけれども、今、還相の立場から、かつての単なる往相的虚無的死の世界をふりかへつての言葉である。その folies の世界を folies douces といつてゐるのは、——本来ランボオにあつて *douceur* は有即無、無即有として否定的轉換の行はれるしちち、Néant の行せられるしちちをやつて *Douceurs* としちつてゐるのせである (Cf. *Barbare*; — *Oh! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des Fleurs arctiques*; ((elles n'existent pas.)) *Douceurs!* —— ああ。血を滴らす牛肉の旗、海の絹と北極の花々の上じ。 ((ごいれもこの世に存在せぬが)) 優美なもので)。——が、今は往相的死の世界における *bleu blanc* (Cf. *Mauvais Sang*, p. 13, *l'oeil bleu blanc*) の寂靜の面をやつて *douces* としちつてゐるのせである。

Cf. *Adieu*, p. 85.

Suis-je trompé? la charité serait-elle soeur de la mort pour moi?

Enfin, je demanderai pardon pour m'être nourri de mensonge.

Et allons.

俺は騙されてゐるのだらうか。俺にとって、慈愛とは死の姉妹であるうか。

最後に、俺は自ら虚偽をもって身を養つてゐた事を謝罪しよう。やつて行くのだ。

としちつてゐるのせ、同じ立場にやつてゐるのせである。

Bah! faisons toutes les grimaces imaginables : ——

Mauvais Sang, p. 28 じゃ

Farce continuelle! Mon innocence me ferait pleurer. La vie est la farce à mener par tous.

いつまでも続く道化芝居だ。俺は自分の単純無垢「イノセンス」に泣き出したくなる。人生とは万人の手で事が運ばれる道化芝居だ。

と云ってゐる様に、イノセンスは、もともと、如何なる意味においても主人の対立を許さない、したがって想憶の対象とすらならない、主客未分の実践の世界であったが、自己がその世界から一步身をひいて、この世界を客観視するところにFarceが出づきたのであった。Grimacesは、このfarceurのものとしてのGrimacesである。丁度 Mauvais Sang においても、有化還相の立場にある innocence の後に farce が出づきたのと同じ様に、今の場合も、かつての単なる往相的虚無的寂靜の世界を悔む有化還相の立場にあって、一步身をひいて、この世界を客観視しようとするところにfarceur としてのgrimaces が出てきてゐるのである。この有化還相の立場が réalité épineuse に足を据ゑた、いはば控泥滞水を要求するものであり、そこに必然的に苦惱行をまぬがれないものとすれば、かかる自己の姿を客観視するところにfarceur としてのgrimaces が出てくるわけである。Parades で

O le plus violent Paradis de la grimace entragée!

あゝ、最も兇暴な、激怒した洗面の『樂園』だ。

ところが所以である。また Vies, III で

Dans un grenier où je fus enfermé à douze ans j'ai connu le monde, j'ai illustré la comédie humaine. Dans un cellier j'ai appris l'histoire.

俺は十二の時、閉ぢこめられた屋根裏部屋で、世間を知った、人間喜劇を図解した。酒倉で歴史を覚えた。

と云ってゐる様に、それは comédie humaine でもあったからである。だから同じで

Exilé ici j'ai eu une scène où jouer les chefs-d'oeuvre dramatiques de toutes les littératures.

ここに、流竄の身となって、俺はあらゆる文学の演劇的傑作が演ずる一幕をわがものとした。

とも云つてゐる。このすぐ後の「Je devrais avoir mon enfer pour la colère, mon enfer pour l'orgueil, — et l'enfer de la caresse, un concert d'enfers. — (怒りの為に俺の地獄を、慢りの為に俺の地獄を、——さては愛撫の地獄を、俺は持たねばならぬのかもしれない。地獄の合奏だ。）」といつてゐる様に、結局 concert d'enfers であつたのであるから、そのgrimaces も必ずしも grimace entragée ばかりとはかぎひなかつたのである。toutes les grimaces imaginables といふ所以である。

Décidément, nous sommes hors du monde. Plus aucun son. Mon tact a disparu. Ah! mon château, ma Saxe, mon bois de saules. Les soirs, les matins, les jours ……… Suis-je las!

明らかに、俺達はこの世の外にある。何の音ももう聞えない。俺の触感は消えた。ああ、俺の城館、俺のサクソニア、俺の柳の林。夕を重ね、朝を重ね、夜は積り、昼が積って、……あゝ、俺は疲れた。

nous sommes hors du monde なくつてゐるのぢや' p. 35 じゃ Ah çai
l'horloge de la vie s'est arrêtée tout à l'heure. Je ne suis plus
au monde. —— あゝさうだ、生活の時計は、先刻止った許りだ。俺は
もうこの世にはゐないのだ。——と云つてゐると同じ立場において、
いつてゐるのである。この否定的無化往相の世界は、一切の世俗からは
遮断せられ、le monde の音も聞えず、le monde との接触もない死の
寂靜の世界である。したがって当然、この身近かにあつて、自分の五官
に訴くてくる親じや mon château, ma Saxe, mon bois de saules か
らも遮断せられた死の寂靜の世界である。

この château ぢや O Saisons, ô châteaux じゃごじや
O saisons, ô châteaux,

Quelle âme est sans défauts?

なくつて出いへば château じゃごじや ぢやだ' Comédie de la Soif, I, Les
Parents じゃごじや

L'eau est au fond des osiers :

Vois le courant du fossé

Autout du château mouillé,

Descendons en nos celliers ;

Après, le cidre et le lait.

柳の奥には水が湧く、

湿ったお城を取巻いて、

見ろ、お堀の水の流れるのを。

俺達の酒倉に入つて来い、

地獄の 一季節註解 (4)

林檎酒もある、牛乳もある。

なくつて出いへるもので、ランボオにとっては印象深い、拭ふことのでき
ないものとしての château であつた様に思はれる。

Saxe はランボオの作品中にこたけに出づゑるものであるが、恐ろく
は机上にでもあつて、愛好せられた眼前のものとして、したがって同様
に拭ふことのできない、印象深いものとして、こゝにあげてゐるのであ
らうと思はれる。

saules ぢや前掲 Comédies de la Soif, I, Les Parents じゃ L'eau
est au fond des osiers ……なくつて出いをり、ぢやごじや château の
堀の傍にでもあつた印象深い、親じやものなくつて、こゝにあげてゐるの
じゃごじや。その他 Michel et Christine じゃごじや

Dans les saules, dans la vieille cour d'honneur,

L'orage d'abord jette ses larges gouttes.

柳の並木に、お館の中庭に、

雷雨は先づ大粒の雨を叩きつけろ。

じゃごじや Mémoire じゃ

Ah! la poudre des saules qu'une aile secoue!

……………

Mon canot, toujours fixe ; et sa chaîne tirée

Au fond de cet oeil d'eau sans bords, —— à quelle boue ?

ああ！ 一羽の鳥が羽ばたいて柳の花粉を揺りおとす！

……………

丸木舟はいつもつながれてゐる、その鎖をば
ひろびろとしたこの流れの底に曳きずって、——どんなに泥深い
かしら？

として出てきてをり、ランボオにとっては重要な意味をもつ image と
して、重ねて出てくるものである。

かくて mon château とじつは、ma Saxe とじつは、mon bois de saules
といひ、いづれもランボオにとっては、身近かになつて五官に訴へてく
る、印象深い、拭ひ去り得ない image を列挙してゐるのである。これ
らを列挙したことは、やぎに hors du monde とつてゐる死の寂靜
の世界と対比的にあげてゐるので、死の寂靜の世界——これら mon
château とは ma Saxe とは mon bois de saules とは遮断され、接
触をもたない、物音も聞えない空寂の世界——が folies douces に過ぎ
ないことを言はうとするものであり、そこに regrettable な想ひがこめ
られてゐるわけである。

これら mon château や ma Saxe や mon bois des saules のみな
らず、夕を迎へ、朝を迎へ、夜につけ、昼につけ、時々刻々に、そこに
は無限に豊かに接する世界がある。—— Les soirs, les matins, les
nuits, les jours…… Suis-je las! ——ここから足を洗つた世界は、
如何にそれが寂靜の世界であらうとも、所詮は彼岸の抽象的觀念の世界
に過ぎないわけである。けつして直接的にこれらを肯定するのではない
が、單なる否定的虚無の方向にも、具体的な真理の世界は現成しないこ
とをいはうとするわけである。

Je devrais avoir mon enfer pour la colère, mon enfer
pour l'orgueil, —— et l'enfer de la caresse ; un concert
d'enfers.

怒りの為に俺の地獄を、慢りの為に俺の地獄を、——さては愛撫の
地獄を、俺は持たねばならぬのかも知れない。地獄の合奏だ。

此岸が即彼岸であり、汚濁が即清浄であるランボオの世界において
は、mon château, ma Saxe, mon bois des saules が即神であり、
les soirs, les matins, les nuits, les jours の、その一時一時が永遠
であり、神の世界である。その réalité が如何に épineuse であらうと
も、ここに足を据ゑ、身を処して行かねばならない。それが catéchisme
の実行であるわけだ。

この様に réalité épineuse に身を処して行くとすれば、この Je
monde の réalité に対しては、あるひは怒り (la colère) を覚える、
その怒りの存するところ、それは必然的に enfer である。もともと怒
りは何かに対する怒りであるかぎり、そこには相対性からの脱却は不可
能であり、二元相対の世界にあること自体が地獄であるからである。そ
こには無畏安樂の世界、innocence は望むべくもない。また、この la
colère から、ほとんど必然的に、le monde に対する否定行が生れてく
る。事実ランボオにおいては le monde の一切合財を否定しようとする
激しい否定行が生れた。この單なる否定行において当面するものは、
死の世界であり、ennui の世界であった。それは前記の様に、所詮は抽
象的觀念の世界に過ぎず、そこにもまた、真に無畏安樂の世界は望むべ
くもなかつた。Ahi mon château, ma Saxe, mon bois de saules.

……の嘆きがもたらされたわけである。やはり地獄である。Je devrais avoir mon enfer pour la colère と云ふ所以である。

Cf. Mauvrais Sang, p. 27.

L'ennui n'est plus mon amour. Les rages, les débauches, la folie, — dont je sais tous les élans et les désastres, — tout mon fardeau est déposé.

倦怠はもはや俺の愛する処でない。忿怒と放蕩と愚行、——俺はその躍動も災禍も全て知つてゐる、——あらゆる俺の重荷は下された。やうして、またこの le monde の réalité に対する jugement sain et arrêté に基く vérité, justice, perfection の世界の探究——そこに最も具体的なランボオの神の世界が見出されたのであるが——といふ orgueil におごつて (Cf. Nuit de l'Enfer, p. 34.) この世界が, réalité épineuse に足を据ゑ、ここに身を処するところを命ずる以上、なほそこに地獄の責苦をまぬがれなかつたのである。つづれも、その後には Les délices de la damnation が深まり行くであらうといはつて、それが地獄の責苦であることに變りはない。mon enfer pour l'orgueil と云ふわけである。

La colère に対しても、また perfection の探究と云ふ l'orgueil に対しても、地獄の責苦はまぬがれない。もちろん caresse の地獄はまぬがれない。caresse は amour sexuel と云ふの caresse であり、それは le monde の直接肯定的態度に出るものである。Le monde、相對の直接肯定、そこに煩惱、苦悩の地獄のあることはいふまでもない。

Cf. L'Impossible, p. 67.

地獄の 一季節註解(十)

—— J'ai eu raison de mépriser ces bonshommes qui ne perdaient pas l'occasion d'une caresse, parasites de la propreté et de la santé de nos femmes aujourd'hui qu'elles sont si peu d'accord avec nous.

J'ai eu raison dans tous mes dédains : puisque je n'évade! —— 今日では、女の人達は男のお歯には合はないが、凡そ世の女達の清潔と健康との寄生虫となり、愛撫の機会は恐らく一つとしてのがさなかつた、あのいゝ気な男達を、俺が軽蔑したのは正しかった。

俺も逃亡するからには、俺のあらゆる侮蔑には尤もな理由があつたのだ。

ランボオにおごつては femme は世俗の象徴であり、monceau d'entrailles に過ぎず、その sister de charité を求めることができなかった。

Cf. Les Soeurs de Charité.

Mais, ô Femme, monceau d'entrailles, pitié douce,

Tu n'es jamais la Soeur de charité, jamais,

Ni regard noir, ni ventre où dort une ombre rousse,

Ni doigts légers, ni seins splendidement formés.

Avengle irréveillée aux immenses prunelles,

しかし、世の女人が、臟腑の塊り、優しげな憫れな者よ、

お前は断じて、断じて看護修道尼ではない、

お前は黒い眼差も、栗色の影のまどろむお腹も、

軽やかな指も、ちくちくとした乳房も持つてはゐない。

大きな眸子はありながら目覚ます術なき盲目の女人よ、

Mauvais Sang, p. 23 以下

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites.

だが、酒宴も女たちとの交友も、俺には禁じられてゐた。

と云つてゐる。

この様に、réalité épineuse に足を据ゑ、この身を処して行かうとするかぎり、——それが catéchisme の実行である——la colère に対して、perfection の探究と云ふ l'orgueil におつても、もさるん carezze (le monde の直接肯定) におつても、所詮は地獄の責苦はまぬがれない。un concert d'enfers と云ふ所以である。

Je meurs de lassitude. C'est le tombeau, je m'en vais aux vers, horreur de l'horreur! Satan, farceur, tu veux me dissoudre, avec tes charmes. Je réclame. Je réclame! un coup de fourche, une goutte de feu.

疲れ果てて死にさうだ。いよいよ「略」墓場か、「墓場だ、」この身は「を」蛆虫共にくれてやる、「くれてやることだ、」あと、恐しむにぞつとする。魔王め、へてん師め、貴様の妖術で、この俺を盪かしたいのだな。俺は要求する、要求するぞ、又槍の一撃、火焰の滴だ。

Je meurs de lassitude. C'est le tombeau, je m'en vais aux vers, horreur de l'horreur! : ——
colère, orgueil, carezze づづれの立場におつても地獄の責苦はまぬ

がれず、un concert d'enfers であつた。今はランボオの還相行における苦悩について語るのだである。Je meurs de lassitude と云つてゐる、この lassitude だ、わねえ Les soirs, les matins, les nuits, les jours ……… Suis-je las! と云つてゐる様だ、le monde にゐて、その朝に夕に、日に夜に展開せられる一事一事——その一事一事を介してのみ神が現成するところ、その réalité épineuse が地獄の責苦を呼び起すものでもあつた。——に対する lassitude をいふわけである。やりきれなう lassitude をいふわけである。

Cf. Angoisse.

Rouler aux blessures, par l'air lassant et la mer; aux supplices, par le silence des eaux et de l'air meurtriers; aux tortures qui rient, dans leur silence atrocement houleux.

転々として廻るのだ、人を疲れさせる風への、海を渡つて、傷口の上を。生命を奪ふ水と風との沈黙の中で、刑罰の上を。兇暴にうねりを上げる沈黙の裡に、嘲笑ふ拷問の上を。

このでも l'air lassant は le monde と対称的に使はれてゐる。le monde において人をうみつかれさせ、人に blessures を与へ、supplices を課し、tortures をなめらせるものをあつてゐるわけである。

したがつて、この lassitude も単なる lassitude ではなくて、le monde に足を据ゑ、身を処して行くことにおつて蒙る blessures, supplices, tortures と堪へることをいふ、この lassitude をあつたわけである。やりきれない、死にかけた lassitude をいふわけである。“H”におつて

Sa solitude est la mécanique érotique ; sa lassitude, la dynamique amoureuse.

彼女の孤独は色情の機械学、その倦怠は恋愛の力学だ。

といつてゐる。この lassitude も上記の意味における lassitude をさうのであらう（“H” というのは、私は、Claude-Edmonde Magny の様に、これを onanisme にいつて述べたものとは解してゐない。Hortense は、道徳以前の世界における、brute の世界、いはは les délices de la damnation の擬人的象徴と解してゐる。）。

かかる堪へ難い lassitude をもたらす le monde に足を据ゑ、身を処して行くとするれば、それは le tombeau である。この tombeau はラノボオにおける mort, ennui と連なる tombeau ではなくて、死の苦痛を与えるものとしての tombeau である——C'est le tombeau. ——。

その死の苦痛を与える苦しみは、この身を蛆虫どもにくれてやることである。horreur de l'horreur であるが、affreuse évocation (Adieu) であるが、それがまた事実だ。

Cf. Adieu, p. 83.

L'automne. Notre barque élevée dans les brumes immobiles tourne vers le port de la misère, la cité énorme au ciel taché de feu et de boue. Ah! les haillons pourris, le pain trempé de pluie, l'ivresse, les mille amours qui n'ont crucifié! Elle ne finira donc point cette goule reine de millions d'âmes et de corps et qui seront jugés! Je me revois, la peau rongée par la boue et la peste, des vers plein les cheveux et les aisselles et encore

地獄の一季節註解(十)

de plus gros vers dans le coeur, étendu parmi les inconnus sans âges, sans sentiment J'aurais pu y mourir L'affreuse évocation! J'exècre la misère.

秋だ。俺達の小舟は、動かぬ霧の中に高く騰って、悲惨の港を目指し、焰と泥の染みのついた空を負ふ巨大な都会を目指して、舳先をまはす。あゝ、腐った襦袢、雨に浸されたパン、泥酔よ、俺を磔刑にした幾千の愛よ。死んで審かれるであらう、幾百万の魂と死屍とを啖ふこの食人鬼の女王は、されば遂に死ぬ時はないだらう。俺には自分の姿が見える、皮膚は泥と鼠疫に蝕まれ、蛆虫は一面に頭髮や腋の下を這ひ、更に大きい奴は心臓に喰ひ込み、年齢もわからぬ、感覚も失はれた、未知の人々の唯中に、横はつてゐるのだ……俺はさうして死んでゐたかもしれない……あゝ、むごたらしい事を考へる。俺は悲惨を憎悪する。

この C'est le tombeau, je m'en vais aux vers, horreur de l'horreur といつてゐる死の苦痛を、別の言葉でよく語つてゐる。人間を泥まみれにし、体のいたるところにまで、心臓にまでくひくひんづくる ver に進んで身をまかせるといふのである。horreur de l'horreur であるが、これがこの catéchisme の実行であるわけだ。Délires, II, p. 61 である。Le Bonheur était ma fatalité, mon remords, mon ver.

『幸福』は俺の宿命であった、悔恨であった、身中の虫〔蛆虫〕であった。
とつてゐる。

Satan, farceur, tu veux me dissoudre, avec tes charmes. Je

réclame. Je réclame! un coup de fourche, une goutte de feu : —
 le monde に足を据ゑ、そこに身を処して行くことは、catéchisme の
 実行ではあった。しかしその réalité épineuse に基く苦悩は、やはり死
 の苦痛であり、蛆虫の食ひこむ苦痛であった。その苦痛にかかはらず、
 この現実に処することがどうしても必要であるとすれば、思はず Satan,
 farceur, tu veux me dissoudre, avec tes charmes といふ言葉も、も
 れるわけである。Satan は le monde の悪くの誘惑者として、farceur
 は le monde の悪の世界に対する傍観的観察者として、ふはげ“comédie
 magnétique” (Parade) の手綱の握り手として、ここにあげてゐるので
 ある。

Cf. Jeunesse, IV.

Tu en es encore à la tentation d'Antoine. L'ébat du zèle
 écourté, les tics d'orgueil puéril, l'affaiblissement et l'effroi.
 ………

お前は、まだまだアントワンの誘惑から脱れてはゐない。性急な
 激情の歓楽、子供染みた倨傲の極端、衰弱や恐怖。……

Cf. Parade.

Maîtres jongleurs, ils transforment le lieu et les personnes
 et usent de la comédie magnétique. Les yeux flamboyent, le sang
 chante, les os s'élargissent, les larmes et des filets rouges
 ruissent. Leur raillerie ou leur terreur dure une minute, ou
 des mois entiers.

J'ai seul la clef de cette parade sauvage.

この手品師の巨匠等は、処も人も変形し、磁性の喜劇を使ふのだ。
 眼は燃え、血は歌ひ、骨はふくれ、涙と赤い神経網はきらきら流れ
 る。彼等の嘲弄であるか恐怖であるか、それは、一瞬と思へば、又、
 幾月も幾月も、うち続く。

この野性の道化芝居の鍵は、唯、俺一人が握つてゐる。

Satan と farceur と、ふづれも le monde への誘惑者である点では同
 じではあるが、もちろんその立場は違つてゐるわけである。この立場の
 違つた Satan と farceur とをここに挙げてゐるのは、le monde に処
 する処し方の二つの相違に基くわけである。前者は直接態においてであ
 り、後者は否定的な傍観者の態度においてである。二つの態度の相違は
 あつても、いづれもそれぞれの魅力をもつて、le monde へ誘引し、そ
 の業苦の中に打ちのめさうとするわけである。

そこに再び Je réclame. Je réclame! un coup de fourche, une
 goutte de feu といふ叫びの声も出さなければならぬ。coup de fourche,
 goutte de feu はふづれも le monde 否定の coup de fourche であるの
 goutte de feu である。Mauvais Sang, p. 8 に於ける les bourreaux,
 les fléaux 同く p. 23 に於ける peloton d'exécution 同く p. 27
 に於ける bastonnade に該当する言葉である。もちろん、今の有化還相
 の立場におつては、かかる le monde を媒介として神が現成するので
 あり、かかる damnation の中に délices が深まつて行くものである故
 に、再び le monde から逃避し、または単に否定し去ることはあり得
 ないことではあるが、その réalité épineuse による苦痛のあまりにつ
 き言葉に憑きならなければならぬ。だから、この十の後に Ah! remonter

à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités. …………… — あゝ、
又、生活へ攀ぢ昇るのか。俺達の醜態を眼を据ゑるのか。……—と
いふわけである。

Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités.

**Et ce poison, ce baiser mille fois maudit! Ma faiblesse, la
cruauté du rondel! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens
trop mal! — Je suis caché et je ne le suis pas.**

C'est le feu qui se relève avec son damné.

あゝ、又、生活へ攀ぢ昇るのか。俺達の醜態を眼を据ゑるのか。
そしてこの毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

火焰は地獄に堕ちた男を取り捲いて高く挙がる。

Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités.

Et ce poison, ce baiser mille fois maudit : —

思はず、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

ながら、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

ながら、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

ながら、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

Ce poison va rester dans toutes nos veines même quand, la
fanfare tournant, nous serons rendus à l'ancienne inharmonie.
O maintenant nous si digne de ces tortures! rassemblons fervem-
ment cette promesse surhumaine faite à notre corps et à
notre âme créés : cette promesse, cette démençel
……………

Nous avons foi au poison. Nous savons donner notre vie tout
entière tous les jours.

Voici le temps des Assassins.

軍樂が旋回して、俺達が昔の不調和に再び送還されるであらう時に
さへも、この毒は、俺達の血管の隅々にまで残るだらう。あゝ、今こ
そ、かういふ苛責が如何にもふさはしい俺達は、熱狂して集めよう、
創造された俺達の肉体と俺達の魂とに為されたこの超人的な約束「の
ぞみ」を、この約束「のぞみ」と錯乱とを。……

俺達は毒薬を信じてゐる。いつの日にもこの命を洗ひざらひ投げ出
す事を知つてゐる。

今こそ、『刺客達』の時である。

とうとう、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

p. 33 とうとう、この毒、この接吻、重ね重ね呪はしい。わが身の弱さ、この世
の残酷さ。あゝ神よ、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

venin がのたうま、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

である。かかる毒薬を、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

め、お情けだ、この身を匿ひ給へ、俺には、うまく
立ってゐられない。——俺は隠されてゐる、而も隠されてゐない。

うぐれは “Le monde est bon. Je bénirai la vie.” (Cf. Mauvais Sang, p. 26.) ——世の中はなかなか佳い。俺は生活を祝福しよう。——
 うぐら “Le chant des cieus, la marche des peuples! Esclaves, ne maudissons pas la vie.” (Cf. Matin, p. 80.) ——天上の歌、人々の歩み。奴隷共よ、この世を呪わまじ。——といひ得る日も来るではあらうけれど。

Ma faiblesse, la cruauté du monde! Mon Dieu, pitié, cachez-moi, je me tiens trop mal! : ——

le monde にゐて、その苦痛に打ちひしがれようとするといふに、
 ma faiblesse があり、一方 le monde の réalité épineuse には cruauté
 du monde うぐらよの非情の面をまうてゐる。この ma faiblesse
 と la cruauté du monde との關係におうて、Bottom がよく物語つてゐる様に、苦悩に打ちひしがれて、マダムの家へ (Chez Madame) ——それは彼岸の世界を意味する——逃避せざるを得なかつた時すらあつたのである。それに堪へようとする様は「苦悩の白髪に覆はれ、紫の齒齧を出した一匹の巨きな熊」(un gros ours aux genives violettes et au poil cheuu de chagrin) うぐらよの様なすぢまじい言葉となつて現はれてゐるのである。

かかる状態にあつて、je me tiens trop mal うぐらよてゐる様に、le monde の réalité épineuse に対してもはや処するすべを知らないわけである。Mauvais Sang, p. 13 であらう。

J'ai de mes ancêtres gaulois l'oeil bleu blanc, la cervelle étroite, et la maladresse dans la lutte.

白碧の眼と、小さな脳味噌と、喧嘩の拙きとを、俺は祖先のゴオル人たちから承け継いだ。

うぐらよてゐる。同じく p. 29 であらう。

Où va-t-on? au combat? Je suis faible! Les autres avancent. 何処へ行くのか。戦争へか。俺は弱い。他の奴等はみな進んで行く。

うぐらよてゐる。

réalité épineuse による苦悩にあつて、もはや処するすべを知らず、一切の自力のつきたところから、Mon Dieu, pitié, cachez-moi うぐらよ言葉がもれるわけである。この Dieu はちぎにまじつた様に、p. 34 にあける Pitié! Seigneur や、p. 35 にあける Marie! Sainte Viergel とはちがつて、ランボオの神であることはいふまでもない。ここには、もはや、彼岸の寂靜の世界への逃避の思ひは全くない。如何に苦しくとも、この le monde に足を据ゑ、ここに身を処して行かうとするところに出てきた神への呼びかけである。したがって、その神はランボオの神と解すべきである。

Je suis caché et je ne le suis pas : ——

ランボオの世界は、汚濁即清浄、清浄即汚濁として、此岸の世界における具体的な一時一時の一事一事を媒介として神の現成する世界であつた。したがって le monde に身を処することの地獄の責苦の中にこそ、神が現成するのであつた。いはば le monde が即神の世界、神の世界は即 le monde であつた。だからこそ “Le monde est bon. Je bénirai la vie” ——世の中はなかなか佳い。俺は生活を祝福しよう。—— (Cf.

Mauvais Sang, p. 26.) とらやのひまら、Les délices de la damnation seront plus profondes. (Nuit de l'Enfer, p. 34.) とらやうごがいの得たのである。

その意味におづい Je suis caché とらふたとともに、同時にまた Je ne le suis pas とらふちむけである。挖泥滞水の中に神を見出してあるおづい Je suis caché であり、挖泥滞水といふこと自体におづい Je ne le suis pas である。Nuit de l'Enfer, p. 36 でも “Il n'y a personne ici et il y a quelqu'un.” とらふてみるのと同じ理由にやるむけである。苦惱の中におづいおづいこの世界からこそ—— Je chant clair des malheurs nouveaux —— 新らう不幸の清澄な歌声—— があげられるのである。矛盾が矛盾のまままで相即する世界であった。

Cf. Mystique.

La douceur fleurie des étoiles et du ciel et du reste descend en face du talus, comme un panier, —— contre notre face, et fait l'abîme fleurant et bleu là-dessous.

星や、空や、その他のもので飾られた優しさが、斜面をまともに、花籠の様に、俺達の顔の真向ひに降りて来て、その下の方に花さく蒼い淵さうらうく。

C'est le feu qui se relève avec son damné : ——

Nuit de l'Enfer のはじめのうらさう

C'est l'enfer, l'éternelle peine! Voyez comme le feu se relève!

Je brûle comme il faut. Va, démon!

地獄だ、永劫の責苦だ。見ろ、どうだこの火の手の上り様は、俺は申し分なく燃え上る。さあ、悪魔め。

といつてある様に、この火も地獄の業火である。もちろん、それは有化還相行において、poison をのみほしたことに基く業火である。したがって、自ら damné として、この地獄の業火に身を焼かれることにおいてのみ、そこに、真に、神が現成するのである。

今、この業火の火の手があがるとは、この業火の中にとびこんだことを意味するわけである。Madame の家に chez Madame (Cf. Bottom.) 逃避することなく、敢て「一匹の巨きな熊」となったことを意味するわけである。

そこに Mon Dieu が現はれるのであり “Les sifflements de feu” —— 火の様な息切れの音 —— (Cf. Adieu, p. 86.) も、やがては鎮まることであらう。そこで、はじめて enfer に対して adieu を告げ、真に le monde をよきものとして la vie を祝福する日がくるのであらう。また、そこにこそ、焼える様な豊かさの生々流転の世界が、前後際断的に、一時一時の一事一事を媒介として現成するのであらう。無畏安樂の世界であり、新しい不幸の清澄な歌声があげられるのであらう。

Délires I

Délires は le monde の立場から見ての délires であって、folies, désordre, dérèglement など一連の言葉である。それは le monde の否定、自己を含めての一切合財の否定に由来する délires であり、かかる délires を媒介としてのみ、ランボオ的世界、絶対、永遠、真理、神の世界がひらかれたのである。その意味において délires はランボオ

的世界へ到達のための必須の段階であった、といふよりはむしろ本質的
モメントをなすものであったといふことができよう。

だから *Délires*, II, p. 55 や

Je finis par trouver sacré le désordre de mon esprit.

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと俺は合点した。

といてゐるやうに、それを聖なるものと見てゐるのであり、一八七一
年五月十五日の *Demeny* 宛の手紙の中でも

*Je dis qu'il faut être voyant, se faire voyant. Le poète se
fait voyant par un long, immense et raisonné dérèglement de
tous les sens.*

僕はヴォワイヤンであらねばならない、自らをヴォワイヤンたらし
めねばならぬ、と言ふのです。

「詩人」は凡ゆる感覚の、長期にわたる、大がかりな、そして理由の
ある錯乱を通じてヴォワイヤンとなるのです。
とじてゐるのである。かかる *dérèglement de tous les sens*、即ち
délires にまつて、絶対の認識者としての *voyant*, Poète たり得るの
である。

かくて *Délires*, I, p. 45 によつて

Il a peut-être des secrets pour changer la vie?

この人は多分人世を變へる、秘密を持つてゐるのでせうか。

といふのであり、相対的悪徳の *vie* を絶対的神の清浄なる *vie* へ転ぜ
しめる所以のものであったのである。

そしてこの一篇はすでに先人の註解が語つてゐるやうに、ランボオと
ヴェルレエヌとのいきさつに何等かの係はりをもつてゐることも事実で
はあらうが、それは単なる外面的な係はりに過ぎず、ランボオの意図は
単にかかるといふべきさう、不調和な関係を描かうとするところにあるので
なくて、自己の世界と *le monde* との決定的なずれ、ランボオにおける
神の世界と *christianisme* との決定的なずれを、*L'Époux infernal*
と *Vierge folle* との関係において語らうとしてゐるのである。*L'Époux
infernal* に惹かれながらも、所詮はその世界を理解するつもりで、その
到達するつもりでせよ、*Vierge folle* の嘆き、*L'Époux infernal*
のそれに対する怒りや、愛、救済の思想が語られてゐるのである。

このやうに両者の間に決定的なずれがある故に、最後のところで
Drôle de ménage (p. 48.) とつたわけであり、*Vierge* である所以でも
あらう。しかもこの *Vierge* は、根源的幸福の世界としての *L'Époux
infernal* に惹かれ (Cf. *O Saisons, ô Châteaux : J'ai fait la magique
étude / Du Bonheur que nul n'élude ; Délires*, II, p. 61 : *Bonheur
était ma fatalité, mon remords, mon ver.*)、ついで行かうとするの
だが、——それは根源的幸福の世界なるが故に当然であり、必然的であ
らうと考へられる——所詮は理解することもできず、最後までついで
行くこともできず、ちうとて *le monde* に安んずることなく、嘆き
のみ深い状態にある。*le monde* 否定に由来するものが *délires*, *folie*
であった故に、*L'Époux infernal* についで行かうとつて、*le monde* から
逸脱したこの *Vierge* は *folle* とされるわけである。その点 *Mémoire*
における *Madame* と同一世界にあるものといへるわけである (後述

参照)。

一方 L'Époux infernal の世界は christianisme に対して決定的な
ずれをもち、Vierge folle をかかる世界へと誘引することによって地獄
の苦惱をなめさせるものであるが故に infernal といふわけである。

つぎにランボオ的世界がしばしば男女の關係をもつて描かれてゐるこ
とは、はなはだ注目すべきことであり、今、この Délires, I において
も L'Époux infernal と Vierge folle との關係をもつて語られてをり、
このことはランボオ的世界を理解する上にも、Délires, I における両
者の關係を理解する上にも重要な意味をもつものと考へられる。

まづ第一に注目すべきことはランボオ的世界が二は即一、一は即二と
つゝ、

Cf. Phrases.

Quand le monde sera réduit en un seul bois noir pour nos
quatre yeux étonnés, — en une plage pour deux enfants
fidèles, — en une maison musicale pour notre claire sympa-
thie, — je vous trouverai.

Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau,
entouré d'un (luxe inouï), — et je suis à vos genoux.

Que j'aie réalisé tous vos souvenirs, — que je sois celle
qui sait vous garotter, — je vous étoufferai.

この世の中が、私達の見開いた四つの眼にとって、たった一つの黒
い森となる時に、——二人のおとなしい子供にとって、一つの浜辺と
なる時に、——私達の朗かな交感にとって、一つの音楽の家となる時

地獄の一章節註解(1)

に、——私は、貴方を見付けるでせう。

『前代未聞の榮耀榮華』に取り巻かれて、静かな美しい老翁だけ
が、たった一人、この下界に棲んでゐてくれたら。——私は貴方の膝
下にひれ伏します。

あゝ、私が、貴方のすべての思ひ出を實現した身ならば、——貴方
を絞め殺す術を心得てゐる女ならば、——私は貴方を押し殺すでせ
う。

その他、Mystique ; A une Raison ; Mauvais Sang ; Bateau
ivre 等々参照のこと。

無化往相即有化還相、有化還相即無化往相、汚濁即清淨、清淨即汚濁なる
性格をもつた、否定を媒介とする現世の絶対肯定的立場にたつものであ
り、否定は即肯定、肯定は即否定、生は即死、死は即生としての否定的
転換における有無融合一体的な innocence の行為の世界であつた。か
かる融合一体の世界がランボオにおける Néant であり Nature であつ
たのであるが、かかる世界を、しばしば、やはり男女の融合一体の姿に
おいて描いてゐるのである。

Cf. Antique.

Gracieux fils de Paul Autour de ton front couronné de
fleurttes et de baies tes yeux, des boules précieuses, rennuent.
…… Ton coeur bat dans ce ventre où dort le double sexe.

『牧神』の優雅な息子よ。可憐な花々と漿果とに飾られたお前の額
のあたり、貴重な球、お前の雙眼がゆらめく。……両性の棲む腹に、
心臓は鼓動する。

Cf. Michel et Christine.

— Et verrai-je le bois jaune et le val clair,

L'Épouse aux yeux bleus, l'homme au front rouge, ô Gaule,

— やがて俺には見えるのか、黄色い森と明るい谷、

青い眼相の人妻と、赤い顔のその夫、おレコールよ、

Cf. Mouvement.

Un couple de jeunesse, s'isole, sur l'arche,

— Est-ce ancienne sauvagerie qu'on pardonne? —

Et chante et se poste.

青春の夫婦が、方舟に乗って孤立して、

— それは人が許す古代の野蛮であらうか —

歌を歌ひ、身構へる。

Cf. Royauté.

Un beau matin, chez un peuple fort doux, un homme et une

femme superbes criaient sur la place publique. ((Mes amis, je

veux qu'elle soit reine!)) (Je veux être reine!) Elle riait et

tremblait. Il parlait aux amis de révélation, d'épreuve termi-

née. Ils se pamaient l'un contre l'autre.

ある美しい朝、如何にも気の優しい人々の間にたち交って、素晴ら

しい一人の男と素晴らしい一人の女とが、広場に叫んでゐた。『皆さ

ん、私は彼女を女王にしたいのだ。』『妾は女王様になりたい。』女

は笑ひ、身を顛はしてゐた。男は天啓に就いて、既に了った試煉につ

いて、人々に語った。二人は抱き合つて気が遠くなった。

上記のごときランボオの世界が具現せられてゐると考へたのが、

Antique であり、ancienne sauvagerie になつてあり、Barbare に
おつてであつたのである。かかる Antique が double sexe のなむるよ
ころに脈うつてゐるのであり、方舟に孤立した若夫婦の世界が ancienne
sauvagerie の世界であつたのである。Michel と Christine とによつ
て象徴せられる古代が、やはり L'Épouse aux yeux bleus と l'homme
au front rouge の世界であつたのである。よつて aux yeux bleus と
au front rouge とが対立せられてゐるのは、一方が否定的往相的寂靜
の世界を象徴し、他方が肯定的還相的躍動の世界を象徴してをり、その
両者が一体的融合を示すところに真にランボオ的世界の現成せられるこ
とを意味してゐるのであつて、この点 "Barbare" その他に数多く見ら
れるところの

Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des

fleurs arctiques ; (elles n'existent pas.)

Douceurs!

血を滴らす生肉の旗、海の絹と北極の花々の上に。(いづれもこの

世に存在せぬが。)

優美なものよ。

のごとき表現と軌を一にするものといつてよい。即ち矛盾の相即統一を
意味するのである。かくて前掲の男女の一体的融合のイメージもかかる
矛盾の相即的統一を意味するものと考へられるのである。double sexe
とはこの意味で言つてゐるのである。

したがって、かかるランボオの世界と何等かの背離矛盾の存する場合

たは、やはり男女の關係のイメージをもつて描かれ、かつ Madame が
Homme を追ひ求めるところを一体的融合以前の姿において描かれるので
ある。

Cf. Mémoire; 2, 3.

2

Eh! l'humide carreau tend ses bouillons limpides!
L'eau meuble d'or pâle et sans fond les couches prêtes.
Les robes vertes et déteintes des fillettes
font les saules, d'où sautent les oiseaux sans brides.

Plus pure qu'un louis, jaune et chaude paupière
le souci d'eau — ta foi conjugale, ô l'Épouse! —
au midi prompt, de son terne miroir, jalouse
au ciel gris de chaleur la Sphère rose et chère.

3

Madame se tient trop debout dans la prairie
prochaine où neigent les fils du travail; l'ombrelle
aux doigts; foulant l'ombelle; trop fière pour elle;
des enfants lisant dans la verdure fleurie
leur livre de maroquin rouge! Hélas, Lui, comme
mille anges blancs qui se séparent sur la route,
s'éloigne par-delà la montagne! Elle, toute

froide, et noire, court! après le départ de l'homme!

2

おお! 玻璃に似た水面は透んだ水泡を一面に浮べてある!
蒼ざめた金の流水、底しれぬ床を敷きのべて。
岸の柳は緑の色あせた衣をつけた村娘か、
そこから、小鳥の群は絆もなしに天翔ける。

一ルイ金貨よりも淨らかに、黄色く燃えた流れの眼臉
水に咲く金盞花よ——夫婦の誓よ、おゝ人妻!——
移ろひやすい真昼時、燻んだ水面の鏡に倚って、
熱ばんだ灰色空のばら色の親しげな日輪に思ひを焦がす。

3

マダムは程近い牧場にすくと身を延ばし
牧場には陽光の糸が雪と降り、指には日傘、
あまりと言へば誇りかな、繖形花をば踏みしだき。
児等は読む、花の咲く緑の野辺に

モロッコ皮の赤い本! あゝけれど、あの人は、
道の辺を遠離り行く白い天使の群のやうに、
山の彼方へ逃げ去った! 彼女は身も冷え冷えと、
影馳く、行ってしまった人の後を、追っ馳けた!

この Mémoire については、詳細は別稿にゆづらねばならないが、この
Madame は prairie [ランボオ的世界の象徴である。Cf. Chanson
de la plus haute Tour; Fêtes de la Faim; etc.] にあつて、日傘

によつてよりそぞろ陽光をさへぎり、繖形花をふみしだく、trop fièreな Madame である。即ち往相的寂靜の世界を象徴するものであり、Bottom にまけぬ Madame (この Madame は réalité épineuse と耐へ得ず、かくれ家、逸脱の場所としての Madame である。)や Métropolitain, Angoisse における大文字で書かれた、'Elle' および Enfance, I, II における女性のイメージと同一世界を象徴するものと考へられる。かかる Madame は山の彼方へ逃げ去った男の後を追ひ求めねばならないのである。追ひ求めて一体的に融合しないかぎり、とりでの下で泣くよりすべがないのである。(Qu' elle pleure à présent sous les remparts!)。それは肯定的還相的躍動性をもたないかぎり un vieux, dragueur, dans sa barque immobile, peine. ——老い衰へた浚漉夫は、動かない小舟の中で、悲しんでゐる。——といはれるやうな世界であるからである。

このやうに、ランボオ的世界と何等かの意味で背離の関係が存在する場合には、融合的の一体ならざる男女の関係で描かれてゐるのであるが、その点、この Délires, I は Mémoire とその表現手法においてその軌を一にするものといつてよいのであつて、ランボオ的世界と Le monde、ランボオ的世界と christianisme との背離の関係を L'Époux infernal と Vierge folle との関係、しかも最後に Drole de ménage とつねはねばならないやうな関係において語つてゐるのである。

Écoutez la confession d'un compagnon d'enfer :

◀ O divin Epoux, mon Seigneur, ne re fusez pas la con-

fession de la plus triste de vos servantes. Je suis perdue, Je suis souîle. Je suis impure. Quelle vie!

◀ Pardon, divin Seigneur, pardon! Ah! pardon! Que de larmes! et que de larmes encore plus tard, j'espère!

地獄の道連れの懺悔を聴かう。

「おゝ神聖なる『夫』よ、わが『主』よ、あなたの召使達のうちでも一番惨めな妾の懺悔を、何卒お容れ下さいまし。妾はもう駄目です。何も彼も飽き飽きしてしまいました。妾は穢れてしまいました。何とかいふ生活でせう。

お赦下さい、神聖なる『主』よ、お赦下さい。お赦下さい、お願ひです。涙が出て仕方がありません。あとこれから後も、もっともっと涙を流す事が出来ますやうに。

Vierge folle の mon Seigneur に対する告白の形をもつて語られる、といふことは即ちこの L'Époux infernal をもつて象徴せられるランボオ的世界と christianisme との背離の関係を、さらにランボオ的世界の Le monde に対する関係——Vierge folle は本質的に Le monde に属する女である——を語らうとするものである。

compagnon d'enfer とつねのは L'Époux infernal が前記のやうな意味で infernal といはれるからである。即ちそれが christianisme の立場からすれば地獄の世界であり、また Vierge folle をして地獄の責苦をなめさせるからである。かかる L'Époux infernal に惹かれ、ついで行つたのだから un compagnon d'enfer とつねわけである。

ランボオ的世界が一切の存在の根柢の世界として、誰しもが逃れ得ぬ宿命としての幸福の世界(前記参照)であったとしたら、本質的には *le monde* に属するものと考えられる *Vierge folle* を誘引して追隨せしめたことは当然のことともいへるわけだが、しかし結局理解することもできず、したがって最後までいつて行へることもできず *drôle de ménage* といはねばならない関係に終る *Vierge folle* としては、身も世もない嘆き悲しみに *mon Seigneur* に対する告白をせざるを得ないわけである。—— *la confession de la plus triste de vos servantes.*

この *L'Epoux infernal* の世界が、*le monde* の一切合財の否定を媒介とする世界であり、分別悟性の立場を超え、善悪の立場を超えた世界である (Cf. *Honte ; Matinée d'Ivresse ; etc., etc., ……*) からには *Mauvais Sang*, p. 28 y

moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte loin au-dessus de l'action, ce cher point du monde.

処が俺の生活は十分目方が掛からない。世界の重点〔この世の大切な点である〕、行動〔たつき〕といふものの遙か上層に飛び去り、漾つてゐるのだ。

といつてゐるやうに *le monde* に対する対処の立場からいへば、そこに無為無能の一面をまぬがれないわけである (Cf. *Mauvais Sang*, p. 13, 15, 16, 18; *les plus ineptes, race inférieure, etc., etc., ……*)。かかる世界にある *L'Epoux infernal* に惹かれていつて行った *Vierge folle* も、それが *folle* といはれるやうに *le monde* からの逸脱を当然伴ふものとして、ここに告白をなすに当り、当然、*Je suis*

perdue なる言葉がはかれる所以がある。

しかもこのやうに惹かれていつて行きながらも *j'étais sûr de ne jamais entrer dans son monde.* (p. 44.) *Je n'ignore son idéal.* (p. 47.) といつた *L'Epoux infernal* に愛人の約束をちやひみ *C'était aussi frivole que moi lui disant : « Je te comprends. »* (p. 46.) といつてゐるやうに、両者の間に決定的なとびこえることのできなかつた絶のあることを自覚してゐる関係にあるかぎり、その *Je suis seule* という言葉も出てくるわけである。

またランボオ的世界の象徴としてのこの *L'Epoux infernal* の世界が聖なる清浄なる神の世界であると同時に

Cf. *L'Impossible*, p. 71.

S'il avait toujours été bien éveillé, je voguerais en pleine sagesse! ……

O pureté! pureté!

C'est cette minute d'éveil qui m'a donné la vision de la pureté! Par l'esprit on va à Dieu!

絶えずはつきりと目覚めてゐてくれたとしたら、俺は叡智の真唯中を漕ぎ渡つてゐるに相違なからう……

あゝ、純潔よ、純潔よ。

俺に純潔の幻想を与へたものはこの目覚めの瞬間だ。——精神を通して、人は神に至る。

その神の世界は、けつして抽象的な彼岸の彼方にある世界ではなく、此岸の相対的汚濁悪徳の世界を媒介として現成する神の世界であった。悪

徳を背負つて (cf. *Mauvais Sang*, p. 20.) 'réalité épineuse (Cf. Bottom.) を媒介とする神の世界へあつた。(なほその他は Adieu, Génie 等参照のじゆ°) だから Délires, I, p. 43 じゆ°

Je suis de race lointaine : mes pères étaient Scandinaves : ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang. — Je me ferai des entailles partout le corps, je me tatouerais, je veux devenir hideux comme un Mongol : tu verras, je hurlerai dans les rues. Je veux devenir bien fou de rage. Ne me montre jamais de bijoux, je ramperais et me tordrais sur le tapis. Ma richesse, je la voudrais tachée de sang partout. Jamais je ne travaillerai ………

俺は遠い国の種族の生れた。俺の先祖はスカンデナヴィヤの人々だ。奴等はお互の脇腹を刺違へては、血を吸り合つたものだ。——俺は身体到る所、切傷だらけにしてやらう、黥をしてやらう、俺はモンゴルみたいに醜い姿になりたいんだ。見てゐろ、今に往來を喚き歩いてやるから。怒りで狂気になりたいのだ。俺に寶石などを見せてはならぬ、見せると「省ク」俺はマットの上に腹這つてのたうち廻るだらう。俺の財貨「富」は血だらけに染つてあてほしいのだ。俺はどうあつても働くまい……。

といふのである。ランボオの世界は汚濁即清浄、清浄即汚濁としての神の世界であつた。かくて L'Epoux infernal に惹かれて行つた、しかも所詮その世界を理解することのできなかつた Vierge folle としては、Je suis impure といふ所以である。

Quelle vie! どうぞ嘆きもめれる所以である。(なほランボオ的なのあり方じゆ°) Vies ; Veillée, I ; etc., etc., ………参照のじゆ°)

◁ Plus tard, je connaîtrai le divin Epoux! Je suis née soumise à Lui. — L'autre peut me battre maintenant!
 ◁ A présent, je suis au fond du monde! O mes amies! …… non, pas mes amies ……… Jamais délires ni tortures semblables ……… Est-ce bête!

◁ Ah! je souffre, je crie. Je souffre vraiment. Tout pour-tant m'est permis, chargée du mépris, des plus méprisables coeurs.

◁ Enfin, faisons cette confidence, quitte à la répéter vingt autre fois, — aussi morne, aussi insignifiante!

妾は神聖なる「夫」の事を、もっとあとで、悟らせて戴きます。『その人』に身を委ねるやうに妾は生れ落ちたのです。——今は夫が妾をぶつても仕方がないのです。

妾は今この世のどん底にあます。妾のお友達、……いえいえ、お友達などありはしない……こんな錯乱、こんな苛責が又とあるでせうか……何といふ愚かなことでせう。

あゝ、妾は苦しい、妾は喚ぎます。妾はほんとに苦しいのです。でも、世間で一番卑しい人達の侮蔑を背負つたこの妾には、もうどんな事でも出来るのです。

では私の打明け話です、と申しても、この先も同じ様に悲惨な、意味もない話を、何辺も何辺も御耳に入れるに過ぎませんが。

plus tard とうちは、もよほへ L'autre peut me battre maintenant とうちてゐる maintenant に対して言つてゐる言葉であり、現在は *drôle de ménage* を脱しきれない状況において言つてゐるのである。だから将来ならに涙を流すことにより、懺悔によつて、いつかはこの墮地獄の世界から脱却して *divin Epoux* を識る口も来るであらう *うんせい* のであらう。

au fond du monde : —

やむに *Je suis perdue. Je suis soule. Je suis impure. Quelle vie!* とうちてゐる、その情態は、惹かれついで行きながらも、所詮は理解することもできず、徹底的にその世界について行くこともできぬ *Vierge folle* とうちては、墮地獄の世界であつたわけである。 *Je suis au fond du monde とうちをわけである。*

O mes amies! non, pas mes amies : —

墮地獄の苦みに友を求め、救ひを求めろのだが、友のあらうはずはない。 *Adieu, p. 85* であらう。

Mais pas une main amie! et où puiser le secours?

だが、友の手などあらう筈はない、救ひを何処に求めよう。

とうち、その他 *Mauvais Sang* であらう。

Mais toujours seul ; sans famille ; (p. 16.)

Pas même un compagnon. (p. 23.)

地獄の 一季節註解 (H)

だがいつも俺は一人であつた。家族もなかつた。

一人の仲間さへなかつた。

とうちてゐるやうに、この *L'Epoux infernal* の世界は個別の世界であらう、*atroce solitude* (Cf. *Les Soeurs de Charité*) の世界であつた *とすれば、この compagnon d'enfer* にも当然友のあらうはずはない。 *p. 45* であらう。

D'ailleurs, je ne me le figurais pas avec une autre âme : on voit son Ange, jamais l'Ange d'un autre, — je crois. J'étais dans son âme comme dans un palais qu'on a vidé pour ne pas voir une personne si peu noble que vous : voilà tout.

それに妾は、他の人と一緒にゐるあの人を想像したこともありません。人は自分の『天使』を見るものです、決して他人の『天使』を見るものではない、——と、妾は信じてゐます。妾は、あの人の心の中に、まるで宮殿にでも居るやうに、住んでゐました。あなた様のやうなあまり品のよくない人には何某にも出会ふ事がないやうにと、空っぽにしてくれた宮殿です。それだけの事でございませう。

といつてゐる。それは個別に徹することにおいてのみ把握せられる真理の世界であり、普遍的なる神の世界であつたからである (後述参照)。個別即普遍、普遍即個別の世界であつたからである。

Jamais délires ni tortures semblables Est-ce bête! : —

ランボオの世界は否定を、したがつて *délires* を媒介とするものであり、しかもそのランボオの世界は *Mauvais Sang, p. 15—p. 17* で自ら語つてゐるやうに、フランスの歴史の如何なる点にも見出すことができ

ないやうな世界であり、むしろその歴史の流れを逆転したところに見出されるやうな世界であるとすれば、その *délires* も、それに伴ふ *torture* も類なきものであることは当然であり、かかる世界の象徴としての *L'Epoux infernal* に惹かれて行つた *Vierge folle* についても、それは当然のことであつたといへよう。Est-ce bêteといふ所以である。

Ah! je souffre, je crie. Je souffre vraiment. Tout pourtant

m'est permis, chargée du mépris des plus méprisables coeurs: —

Mauvais Sang, p. 27 や

Chacun a sa raison, mépris et charité : je retiens ma place
au sommet de cette angélique échelle de bon sens.

誰も彼もが尤もだ、蔑まうと愛しよう。つまり俺は思慮分別「良識」の、天使のやうな梯子の天辺に、俺の座を占めてゐるのだ。

どうしてゐるやうに、かかる *sommet de cette angélique échelle de bon sens* は単なる *coeurs sensibles* の世界ではなう (Cf. *Je ne regrette pas le siècle des coeurs sensibles*)。神の世界をも意識せぬ世界であつた (Cf. *Plus besoin de dévouement ni d'amour divin*)。

それは *innocence* の世界であつた。かかる世界に対して、それを愛しようとするやうと夫々に理由があるわけである。したがって、今、*L'Epoux infernal* について行つた *Vierge folle* に対して *les plus méprisables coeurs* すらが、これを軽蔑することにも一面の理由があるわけである。Le monde の立場からすれば、むしろかかる軽蔑こそ当然のことといへよう。そしてかかる軽蔑をうけた *fond du monde* においてこそ、神の前に、すべてを打ち明けて語らうとする勇氣と気安さも出

てくるわけである。

cette confidence aussi morne, aussi insignifiante : —
Le monde の否定、一切合財の否定を媒介とするランボオの世界は元々無意味の世界——無意味を意味とする世界——であり、一面において *morne* であつたことに基く言葉である。

◀ Je suis esclave de l'Epoux infernal, celui qui a perdu
les vierges folles. C'est bien ce démon-là. Ce n'est pas un
spectre, ce n'est pas un fantôme. Mais moi qui ai perdu la
sagesse, qui suis damnée et morte au monde, — on ne me
tuera pas! Comment vous le décrire! Je ne sais même plus
parler. Je suis en deuil, je pleure, j'ai peur. Un peu de
fraîcheur, Seigneur, si vous voulez, si vous voulez bien!

妾は、狂気の処女達を墮落させたあの地獄の『夫』の奴隸です。確かにそれはあの悪魔めです。幽霊でもありません、幻影でもありません。しかし思慮分別も失ひ、地獄の苛責を受け、世に生きながら死人となつたこの妾、——更にこの上、殺される気遣ひはありません。——どういふ風にあなた様に説明したらよいのやら。妾にはもう話す術さへ解りません。妾は悲歎にくれて居ります、泣いて居ります。怖いのです。あゝ、ほんの少しのすゞ風を、主よ、御心にかなひますなら、御心にかなひますならば。

celui qui a perdu les vierges folles と、この場合、複数でいって

そのが、Conte y

Toutes les femmes qui l'avaient connu furent assassinées. Quel saccage du jardin de la beauté! Sous le sabre, elles le bénissent. Il n'en commanda point de nouvelles. — Les femmes réapparurent.

彼を知った女達は、すべて殺された。美の庭園の、何といふ掠奪だ。剣の下で、女等は彼を讃へた。それ以来、新しい女を命じなかった。——が、女達は又現はれた。

と書いてあるやうな意味で、即ち *le monde* の否定、一切合財の否定の意味を表はしてゐるのである。——この場合、*les femmes* は *le monde* の象徴である。このプリンスの剣の下で、プリンスを讃へてゐる女達がそれが *Virgès folles* であることが明らかである。

C'est bien ce démon-là. Ce n'est pas un spectre, ce n'est pas un fantôme : —

démon と云ふのが、この *Vierge folle* を持つ moi qui ai perdu la sagesse, qui suis damnée et morte au monde と云つてゐるやうな状態にまで導き來った点を表して *Vierge folle* の立場、否、*le monde* の立場からして言ふわけである。それは *le monde* からの類落であり、しかも *anti-christianisme* の随地獄の世界と考へられる点を表して言ふわけである。しかもその *démon* が *spectre* でもなく *fantôme* でもないといふところに、明かにランボオの自己の世界に対する確固たる自信の程が語られてゐるものと見てよいであらう。けつして単なる觀念の世界でもなく、妄想でもなく、此岸の世界に具体的に実在する世界である

そのを語つてゐるものと考へてよいであらう。

Mais moi qui ai perdu la sagesse, qui suis damnée et morte au monde : —

この *sagesse* は *le monde* の中びるひ、それに対処する *sagesse*, *sagesse* du monde の意味に使つてゐるのである。L'Impossible, p. 69—p. 71 で *je retournais à l'Orient et à la sagesse première et éternelle* ——俺は再び東洋に歸つた。永遠の、当初の叡智に歸つた。——とか、*la sagesse de l'Orient* とか、*je voguerais en pleine sagesse* ——俺は叡智の真唯中を漕ぎ渡つてゐるに相違なからう。——とか言つてゐる *sagesse* の意味ではなからう。

damnée は *L'Époux infernal* によつて *le monde* 否定の彼方に行つて行かれ、しかもランボオの世界の中にも入つて行けず、地獄の責苦をうけつてゐることを表して言ふものである。

morte とは *le monde* の否定、一切合財の否定の彼方にある *ニhilistic* な状態にあることを表して言ふ言葉であらう。即ち *le monde* になつて死したも同然である。かくつて *on ne me tuera pas* と云ふ所以である。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 22.

On ne te tuera pas plus que si tu étais cadavre.

貴様が仮りに屍体であつたとしたら、それ以上に殺さうとする奴もあつてまじ。

この *Mauvais Sang*, p. 22 によつ

Faiblesse ou force : te voilà, c'est la force. Tu ne sais ni où

tu vas, ni pourquoi tu vas, entre partout, réponds à tout.

弱気にしろ、強気にしろだ、「弱くても、強くても、」貴様がさうしてゐる、それが貴様の力ぢやないか。貴様は何処に行くのか知りたくない、何故行くのかも知りたくない、何処へでも到る所に入つて行け、何にでも返答をしろ。

といつてゐるやうに、自己に死することにおいて、そこに何をいふといふこともない、絶対的強さも出てくるのである。そこにも語つてゐるやうに、神の前にすべてを告白しようとする強さも出てきたわけである。苦しみ、嘆き、怖れながらもすべてを告白しようとする強さが出てきたのであるが、所詮は理解することのできなかつた世界であれば、何から如何に語つてよいのやら、とまどふのも致し方のないわけである。—— Comment vous le décrivez! Je ne sais même plus parler.

「Je suis veuve ……… J'étais veuve ……… — mais oui, j'ai été bien sérieuse jadis, et je ne suis pas née pour devenir squelette! …… Lui était presque un enfant …… Ses délicatesses mystérieuses m'avaient séduite. J'ai oublié tout mon devoir humain pour le suivre. Quelle vie! La vraie vie est absente. Nous ne sommes pas au monde. Je vais où il va, il le faut. Et souvent il s'emporte contre moi, moi, la pauvre âme. Le Démon! — C'est un Démon, vous savez, ce n'est pas un homme.

妾は寡婦です…… — 妾は寡婦でした…… — ちうですとも、昔

は本当に真面目でした。しかも妾は骸骨になる為はこの世に生れたのではないのです…… — あれはほんの子供でした……あの神秘の籠った微妙な举措が妾を惑はして了つたのです。妾は人としての務も忘れ果て、あれについて行つたのです。何といふ生活でせう。真実の生活がないのです。私達のあるのはこの世ではありません。あれの行く処へ私も行くより仕方がないのです。それに、屢々あれは妾に向つ腹を立てるのです、この妾に、この哀れな魂に。「悪魔」ですとも。

Je suis veuve ……… — J'étais veuve ……… —

veuveといふのは vierge といふのと同じ理由に基く表現である。ついで行つて、ついで行くことのできなかつたことに基く表現であり、兩者の間には絶対的の断絶があつたことに基く表現である。しかもそれは、今にはじまることではなく、当初からであつたわけである。

squelette とは、ちやうど morte au monde といつてゐることの連関で出づきつてゐる言葉であり、Le monde において死した cadavre であること、Le monde の否定、一切合財の否定の彼方にあることを意味する。この Vierge folle は今も本質的には Le monde に属する女であるが、今は L'Epoux infernal に惹かれて、squelette となつたが、かつては世の常なみの sérieuse な娘であつたものを。しかし、かかる娘を誘引したのは L'Epoux infernal の enfant たるところに出でくる délicatesses mystérieuses にあつたのである、とすればそれはむしろ当然であつたともいへるわけである。

Lui était presque un enfant : —

ランボオ的世界の一つの帰結点は、否定を媒介とする絶対肯定的なる Innocence にあつた(Cf. Mauvais Sang, p. 27.)。否定の否定として の Néant を行するところの展開せられた Nature (Cf. Mauvais Sang, p. 24.) とつての任運、行雲流水の嬰孩行にあつた (Cf. Bannières de Mai ; Comédie de la Soif, 5, Conclusion ; Génie ; etc., etc.,)。停滞執着するところなく、無一物を行つて (Cf. Le loup criait sous les feuilles ; Fêtes de la Faim.)、軽やかに流 れゆく流転の姿を (Cf. Mauvais Sang, p. 28, — moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte au-dessus de l'action, ce cher point du monde. — 俺の生活は十分日方が掛らない。世界の 重点、行動「この世の大切な点である、たつき」といふものの遙か上層 に飛び去り、漾ってゐるのだ。) enfant の姿でもあり、そこに人を誘 引してやめる délicatesses mystérieuses もあつたわけである。ランボ オはかかる自己の世界の具現された姿を Antiquité に、Gaulle に、sau- vagerie にみたのみならず、enfant の世界にもみたのである。

Cf. Les Effarés.

Noirs dans la neige et dans la brume,

Au grand soupirail qui s'allume,

Leurs culs en rond,

A genoux, cinq petits — misère! —

Regardent le Boulanger faire

Le lourd pain blond.

地獄の一季節註解(一)

.....

Que ce trou chaud souffle la vie,

Ils ont leur âme si ravie

Sous leurs haillons,

.....

Tout bêtes, faisant leurs prières

Et repliés vers ces lumières

Du ciel rouvert,

.....

雪の中、霧の中に黒々と、

風抜窓のはてりの前に、

お尻を輪にして

跪き、五人の子供が、——いぢらしや——

パン屋が重い亜麻色のパンを

焼くのを眺めてる。

.....

熱い穴がいまぞ生命を吹込むとき、

襤褸着の下で彼らの心は

とろけんばかりうっとりする。

.....

莫迦な奴らだ、お祈りしながら、

再び開く天国の光の方へと

身体をかがめる、

.....

Cf. Bateau ivre.

Si je désire une eau d'Europe, c'est la flache

Noire et froide où vers le crépuscule embaumé

Un enfant accroupi plein de tristesses, lâche

Un bateau frêle comme un papillon de mai.

若しわれにして欧羅巴の、今なほ、水を望むとせば、

そは、冷かなる靄き隠沼、風薫る夕暮どきに、

悲しみの溢るる童子、蹲踞りて、五月の蝶を

さながらの木葉の小舟を放ちやる、森の水沼。

自然法爾として、まるで子供のごとき姿から出る délicatesses は、けして単なる délicatesses ではなかった。それは単なる coeurs sensibles

(Cf. Mauvais Sang, p. 27.) から出るものではなかったからである。

かかみ délicatesses は “Chanson de la plus haute Tour” じ

Par délicatesse

J'ai perdu ma vie.

繊細者のために

私は生涯をそこにしたのだ。

と云ってあるやうに、根源的なる生命を壊すものであり、否定せられるべきものであった。だから délicatesses mystérieuses と云うべきのである。この mystérieux, merveilleux, mystique, magique などの言葉は常に、非ヨーロッパ的な、非キリスト教的なランボオ的世界を形容するに用ひられてゐるのだから (Cf. Mystique; Mauvais Sang,

p. 21; Nuit de l'Enfer, p. 36; O Saisons, ô Châteaux; etc., etc.,

.....) の délicatesses は根源的なる生命 “Néant, Nature への出づるもの” の “Le monde de la Vierge folle” を誘引しつゝ、また delicate であるべきものである。かへして Je suis née soumise à Lui (p. 42.) と云ふこと、Je suis esclave de l'Époux infernal (p. 42.) と云ふことである。また終りのこと (p. 48.)

Puis, il reprenait ses manières de jeune mère, de soeur aimée.

S'il était moins sauvage, nous serions sauvés! Mais sa douceur aussi est mortelle. Je lui suis soumise. — Ah! je suis folle!

それから、再び若い母親のやうな、可愛がられた姉のやうないつも物ごしに返るのでした。あれの粗暴な性質がとれてくれれば、私達は救はれるでせうに。と申してもあれの優しさもやっぱり妾には死ぬ思ひです。妾はあれの思ひのままです。——あゝ、妾は狂気です。

と云うべきのである。その délicatesses mystérieuses はランボオ自身の言葉で云くば douceur であり、それが時ど jeune mère のこと、soeur aimée のこと、態度をもとりしめる底のものであったのである。

Cf. Barbare.

Oh! Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des fleurs arctiques; (elles n'existent pas.)

Douceurs!

あゝ。血を滴らす生肉の旗、海の絹と北極の花々の上。 (いづれもこの世に存在せぬが。)

優美なものよ。

このやうに douceur, délicatesse は矛盾の相即に現成する Nature に出るものであったのである。かくてこの Vierge folle が惹かれて、理解し得ないままにいつて行ったのも当然とくくるわけである。

J'ai oublié tout mon devoir humain pour le suivre : —

かかる délicatesses mystérieuses に惹かれるところについては必然的に Le monde の否定逸脱を意味する故に devoir humain を忘却せしめるわけである。しかし、もちろん神の世界における Le Devoir がないうけではない。

Cf. L'Eternité.

Puisque de vous seules,

Braises de satin,

Le Devoir s'exhale

Sans qu'on dise : enfin.

繻子の肌した深紅の燠よ、

それそのおまへと燃えてくれあ、

義務はすむといふものだ

やれやれ〔遂に〕といふ暇〔ごと〕もなぐ。

また有化還相行における Le Devoir がないうけでもなぐ。

Cf. Vies, III.

J'ai brassé mon sang. Mon devoir m'est remis. Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.

俺は、俺の血液を攪拌した。再び、務めはこの手に戻った。これに

地獄の 一季節註解(中)

就いては、夢みる〔想憶する〕事すら許されぬ。本当に墓場の向ふから来たこの俺だ、何の用事があるものか。

Cf. Adieu, p. 84.

Moi! moi qui me suis dit mage ou ange, dispensé de toute morale, je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre! Paysans!

この俺、嘗ては自ら全道徳を免除された道士とも天使とも思つてゐた俺が、今、務めを捜ちうと、このまどろんだ現実を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。

※*Delires*, I, p. 46 以下

Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis il faut que j'en aide d'autres : c'est mon devoir. Quoique ce ne soit guère ragotant , chère âme

何故って、俺はいつかは、遠い処に行ちまふんだからな。それに他の奴等だって助けてやらなくてはならない、それが俺の義務なんだ。たとひ、あんまりぞっとしない仕事かも知れないが、……解ったな……

といつてゐる。これらが語つてゐるやうに、その Le Devoir は対立相対を超えた、一時一時に Néant を行ずる Le Devoir であつたのである。Néant 即愛として慈悲救済を行する Le Devoir であつたのである。分別の立場に立つた devoir humain ではなかつたのである。

Quelle vie! La vraie vie est absente. Nous ne sommes pas au monde : —

このやうに le monde の外に出た vie は、本質的に、le monde の女としての Vierge folle ではない。La vraie vie ではどうはずはない。それは、délirés であり、désordre であり、folie の世界であるからである。L'Epoux infernal の vie, la vraie vie は Néant を行ずるところに展開せられる les richesses inouïes の世界 (Cf. Vies, I.) であり、amour の世界であり、また très méchant fou の世界 (Cf. Vies, II.) であり、それはまた全東洋に開かれた壮麗な住居における illustre retraite としての vie であり、その vie における devoir は一時一時の一事一事に Néant を行ずるにであったのである (前述参照) 。

しかし Vierge folle としては、依然として le monde の立場から、かかる vie は理解し得ないからには Quelle vie! La vraie vie est absente と、なごむを得ないわけである。

Je vais où il va, il le faut. Et souvent il s'emporte contre moi, moi, la pauvre âme. Le Démon! — C'est un Démon, vous savez, *ce n'est pas un homme* : —

L'Epoux infernal の、delicatesses mystérieuses が根源的世界に出るものであり、かかる délicatesses mystérieuses に誘引せられたものとするれば、それはむしろ当然である。Quel vie! La vraie vie est absente と、いふやうな状態においてすら、なほ彼の行くところについて行かざるを得ないわけである。しかし本質的には le monde に属する女としての Vierge folle に対しては、le monde に対する怒りと同じ怒りが向けられることもやむを得ない次第であらう。

L'Epoux infernal は le monde 否定の、christianisme 否定の Démon であるわけである。ce n'est pas un homme と、いふわけである。

◀ Il dit : ◀ Je n'aime pas les femmes. L'amour est à réinventer, on le sait. Elles ne peuvent plus que vouloir une position assurée. La position gagnée, coeur et beauté sont mis de côté : il ne reste que froid dédain, l'aliment du mariage, aujourd'hui. Ou bien je vois des femmes avec les signes du bonheur, dont, moi, j'aurai pu faire de bonnes camarades, dévorées tout d'abord par des brutes sensibles comme des bûchers ………▶

あれは申します、*「俺は女なんか愛してはゐない。恋愛といふものは、承知だらうが、でっち上げるものなんだ。」「わかってゐるだらうが、愛は再発明せられるべきものだ。」「女どもは身のきまりがつかないと」「安定した位置を得たいと」*思ふだけで精々だ。身のきまりがつかば「位置が安定すれば、」美も心もそっちのけだ。唯一つ残るものは冷い侮蔑で、それが、今日、結婚の糧だといふわけだ。さもなければ俺は、この俺ならば、いゝお友達にしてやる事が出来たかも知れない、幸福さうな様子をした女共が、薪小屋みたいに燃え付き易い獣物たちに、頭からほりほり喰はれる処を拝見するだけだ……「さもなければ、この俺がいいお友達にしてやる事ができたかもしれないと思はれる、幸福の徴候のある女共は、火葬台のやうに燃えつきやすい獣

物たまたま、まじりけりに焼きつくされてゐるのだ……』

Je n'aime pas les femmes : —

ランボオにおいては femmes は世俗の象徴として使はれてゐることが多い。Le monde の否定を媒介とするランボオ的世界の象徴としての L'Epoux infernal になつて、かかる意味での femmes が否定せられるのは当然である。Mauvais Sang, p. 23 以下

Mais l'orgie et la camaraderie des femmes m'étaient interdites. Pas même un compagnon.

だが、酒宴も女たまたまの交友も、俺には禁じられてゐた。一人の仲間をへなかつた。
とらつてゐる。

Cf. Les Soeurs de Charité.

Mais, ô Femme, monceau d'entraîles, pitié douce,
Tu n'es jamais la Soeur de charité, jamais,
Ni regard noir, ni ventre où dort une ombre rousse,
Ni doigts légers, ni seins splendidement formés.

Aveugle irréveillée aux immenses prunelles,
Tout notre embrassement n'est qu'une question :
.....

しかし、世の女人よ、臓腑の塊り、優しげな靨れた者よ、
お前は断じて、断じて看護修道尼ではない、
お前は黒い眼差も、栗色の影のまどろむお腹も、

地獄の 一季節註解 (H)

軽やかな指も、ふくらとした乳房も持ってはゐない。

大きな眸子はありながら目覚ます術なき盲目の女人よ、
我らのいかなる抱擁も結局疑問に過ぎないのだ。
.....

その他 Conte において

Toutes les femmes qui l'avaient connu furent assassinées.
彼を知った女達は、すべて殺された。

とらつてゐるのも同様の意味においてであり、Il voulait voir la vérité, l'heure du désir et de la satisfaction essentiels. ——彼は真実が見たかった、本質的な欲望と満足との時が得たかった。——といつてゐるやうに、真理即ち本質的な希望と満足との時間に対する媒介としての femmes の否定を意味するのである。

L'amour est à réinventer, on le sait : ——

これは男女間の愛としての amour だつて言つてゐるのではない。
今、Je n'aime pas les femmes とらつてゐるのである。即ち単なる男女間の愛としての amour を否定してゐるのである。その意味で L'amour est à réinventer とらつてゐるのである。そこに新しい愛、絶対的な amour divin が再発明せられるべきだとの意味でいつてゐるのである。前掲 Conte において

Il prévoyait détonnantes révolutions de l'amour, et soupçonnait ses femmes de pouvoir mieux que cette complaisance agréementée de ciel et de luxe.

彼は恋愛〔愛〕の驚く可き革命を予見してゐた、そして妻妾達〔女

たち」にはお天気と装飾〔贅沢〕とに甘やかされた喜び以上のものは、一体が無理ではないのかと考へてゐた。
とらつてゐるのである。

Cf. A une Raison.

Ta tête se détourne : le nouvel amour ! Ta tête se retourne,
—— le nouvel amour !

お前が頭を廻らせば、新しい愛だ。頭を復せば、——新しい愛だ。かかゝる意味で、絶対的愛 amour divin の発明のための révolution de l'amour の意味で、l'amour est à réinventer とらつてゐるのである。尤も femmes もかかゝる le nouvel amour の世界になつては reine として生かされるのである (Cf. Royauté.)。——たゞの femmes を対象とする amour にしつて語つてゐるのではない。たゞの Je n'aime pas les femmes とらつてゐるのである。

Cf. Génie.

Il est l'affection et l'avenir, la force et l'amour que nous,
debout dans les rages et les ennuis, nous voyons passer dans
le ciel de tempête et les drapeaux d'extase.

Il est l'amour, mesure parfaite et réinventée, raison merveilleuse et imprévue, et l'éternité : machine aimée des qualités fatales.

彼は愛情であり未来である、力であり愛である。俺達は、憤怒と倦怠との裡に佇んで嵐の空と恍惚のはためく旗の間に、さういふ彼の姿が通つて行くのを眺めるのだ。

彼こそは、再創始された完全な尺度たる、予見を許さぬ驚くべき理智たる愛であり、また、永遠である。即ち、どうしやうもない資質に愛された機械である。

このやうに、le monde に対する rages とその否定の彼方に見出された ennuis' ciel de tempête と drapeaux d'extase との二つを両極に相矛盾するものの相即（この点については *Barbare* 等々参照）および Délires, I 註解の冒頭（参照）に出づべし amour であり、それは mesure parfaite et réinventée である、raison merveilleuse et imprévue であり、l'éternité である amour である。

それはまた、善悪道徳を超えた純粹なる amour であつた。

Cf. *Matinée d'Ivresse*.

On nous a promis d'enterrer dans l'ombre l'arbre du bien et du mal, de déporter les honnêtetés tyranniques, afin que nous amenions notre très pur amour.

俺達の最も純粹な愛を醸し出す為に、善悪の樹を暗闇の中に埋葬し、暴君的な誠実を流刑に処する事を、俺達は約束されたのだ。

かかる愛は、また、le monde の一切の否定、自己否定 Abnégation を媒介とする愛、charité である。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 21.

O mon abnégation, ô ma charité merveilleuse ! ici-bas, pour-tant !

おゝ俺の自己抛棄、おゝ俺の不可思議な慈愛、だがそれも、この世でのこと。

Angoisse にせういふ

O palmest! diamant! — Amour! force! — plus haut que toutes joies et gloires! — de toutes façons, partout, — démon, dieu — Jeunesse de cet être-ci; moi!

あゝ、棕櫚よ、金剛石よ。——愛よ、力よ。——あらゆる歡喜と光榮とより遙かに高いもの、——到る所、どんな意味に於てもだ、——悪魔よ、神よ、——この俺といふ存在の青春よ。

とらへておるやうに、最後の勝利 palmes とらへての、diamant (Cf. Solde.) とらへての amour である。即ち Néant を行ずることにせういふ現成する愛であったのである。

Cf. Vies, II.

Je suis un inventeur bien autrement méritant que tous ceux qui m'ont précédé; un musicien même, qui ai trouvé quelque chose comme la clef de l'amour.

俺は、すべての先人達に比しては、全く違った貢献をした一発明者だ。恋愛〔愛〕の鍵とでもいふやうな或るものを発見した音楽家だと言つても可い。

このやうに新しい愛、絶対の愛の世界を開く鍵を発明した musicien だと自ら稱しておるのである。L'amour est à réinventer とらへて所以である。

Elles ne peuvent plus que vouloir une position assurée: —

らじの une position assurée とらへて Angoisse にせういふ

Se peut-il..... qu'une fin aisée répare les âges d'indigence,

地獄の 一季節註解(十)

—— qu'un jour de succès nous endorme sur la honte de notre inhabileté fatale.

安楽な終りが、窮迫の歳月を贖ひ、——成功の日が、俺達の宿命的な拙劣無能の恥辱の上に、俺達を眠らせるところなどあり得ようか。

とらへておる une fin aisée, un jour de succès のうらみは le monde の幸福、le bonheur établi, domestique ou non (Cf. Mauvais Sang, p. 28.) を指すものであらう。Conte にせういふ

Il prévoyait d'étonnantes révolutions de l'amour, et soupçonnait ses femmes de pouvoir mieux que cette complaisance agrémentée de ciel et de luxe.

彼は恋愛〔愛〕の驚く可き革命を予見してゐた、そして妻妾達〔女ども〕にはお天気と装飾〔贅沢〕とに甘やかされた喜び以上のものは、一体が無理ではないのかと考へてゐた。

とらへておる。このやうな complaisance agrémentée de ciel et de luxe を獲得せしむべき position assurée をとらへておる。Le monde の象徴としての femmes, monceaux d'entrailles, aveugle irréveillé とらへての femmes とらへては、望むものはかかる position assurée のみであらう。Le monde の否定を契機とする L'Epoux infernal の世界においては、かかる意味での femmes は愛の対称になるわけはなく、正に amour は réinventer せねばならぬのであったわけである。

La position gagnée, coeur et beauté sont mis de côté: —

らじの coeur と beauté とはランボオの世界に関連するかぎりでの coeur とらへて beauty である。Le monde にせういふものではない。絶

対、真理、永遠の聖なる神の世界に関連するかきつひの *coeur* である
beauté である。 *femmas* は *position assurée* だけが関心事であ
 り、かかる *coeur* と *beauté* は *question* である。

Cf. *Being Beautuous*.

Devant une neige un Être de Beauté de haute taille. Des
 sifflements de mort et des cercles de musique sourde font
 monter, s'élargir et trembler comme un spectre ce corps adoré;
 …… Et les frissons s'élèvent et grondent et la saveur forcenée
 de ces effets se chargeant avec les sifflements mortels et les
 raques musicales que le monde, loin derrière nous, lance sur
 notre mère de beauté, — elle recule, elle se dresse. Oh! nos os
 sont revêtus d'un nouveau corps amoureux.

雪を前にして、丈の高い『美』の『存在』。死人の喘ぎと鈍い音
 楽の音の輪につれて、この尊い肉体は、亡霊のやうに、拡がり、慄へ
 て、昇って行く。……戦慄は立ち昇り、唸りを上げる。そしてこれら
 の効果に気の狂った味ひは、俺達の遙か背後から、俺達の美の母親め
 がけてこの世が投げる、死人の喘ぎと唸れた音楽の音に充填される
 が、——彼女は、あとに退って、きりりと立ってゐる。あと、俺達の
 骨は、恋しい新しい肉体の衣を着せられる。

Cf. *Matinée d'Ivresse*.

O *mon* Bien! O *mon* Beau! Fanfare atroce où je ne trébuche
 point! Chevalet féerique! Hourra pour l'oeuvre inouïe et pour
 le corps merveilleux, pour la première fois! Cela commença

sous les rires des enfants, cela finira par eux. Ce poison va
 rester dans toutes nos veines même quand, la fanfare tourn-
 ant, nous serons rendus à l'ancienne inharmonie. O maintenant
 nous si digne de ces tortures! rassemblons ferveusement cette
 promesse surhumaine faite à notre corps et à notre âme créés :
 cette promesse, cette démençance!

あと、俺の『善』、俺の『美』。兇暴な軍楽の裡に、俺は断じてよ
 りめきはしない。幻の画架だ。前代未聞の作品と素晴らしい肉体とを、
 ちも歓呼して初めて迎へよう。これは子供達の笑ひで始つたが、又彼
 等の笑ひで終るだらう。軍楽が旋回して、俺達が昔の不調和に再び送
 られるであらう時にちくも、この毒は、俺達の血管の隅々にまで残
 るだらう。あと、今こそ、かういふ苛責が如何にもふさはしい俺達
 は、熱狂して集めよう、創造された俺達の肉体と魂とに為されたこの
 超人的な約束を、この約束と錯乱とを。

il [ne reste que froid dédain, l'ailment du mariage, aujourd'hui : —

Cf. *L'Impossible*, p. 67.

—— J'ai eu raison de mépriser ces bonshommes qui ne
 perdraient pas l'occasion d'une caresse, parasites de la propriété
 et de la santé de nos femmes, aujourd'hui qu'elles sont si peu
 d'accord avec nous.

J'ai eu raison dans tous mes dédains : puisque je m'évade.

—— 今日では、女の人達は男のお齒には合はないが、[今日では、女

達は俺達とはほとんど別世界の人間だが、凡そ世の女達の清潔と健康との寄生虫となり、愛撫の機会は恐ろしく一つとしてのがさなかった、あのいゝ気な男達を、俺が軽蔑したのは正しかった。

俺も逃亡するからには、俺のあらゆる侮蔑には尤もな理由があったのだ。

どうしてか、かかる bonshommes, femmes は、ランボオの世界からは軽蔑せられるべきであつたと同様に、ランボオ的世界に対しては、逆は froid dédain の眼を向けざるわけだ。それこそ le monde にあつては l'aliment du mariage となるわけだ。

Cf. Vies, I.

Exilé ici j'ai eu une scène où jouer les chefs-d'oeuvre dramatiques de toutes les littératures. Je vous indiquerais les richesses inouïes. Ma sagesse est aussi dédaignée que le chaos. Qu'est mon néant, auprès de la stupeur qui vous attend?

ランに、流竄の身となつて、俺はあらゆる文学の演劇的傑作が演ずる一幕をわがものとした。君達に未聞の富をみせようか。……混沌をぢびすぢやうに、俺の叡智をぢびすぢのだ。君達を待つ昏睡に比べては、俺の虚無〔無〕とはそもそも何か。

Ou bien je vois des femmes avec les signes du bonheur, dont, moi, j'aurai pu faire de bonnes camarades, dévorées tout d'abord par des brutes sensibles comme des bûchers :——
やぢび Je n'aime pas les femmes どうした femmes は le

地獄の 一季節註解 (1)

monde の象徴としての femmes であり、したがって望むところは、ただ position assurée のみで coeur を beauté は問はずにうづはなかつた。L'Epoux infernal の世界に対しては、ただ froid dédain の眼が向けられるだけ、むしろそれを l'aliment du mariage としての femmes に絞つて、その femmes は femmes avec les signes du bonheur である。あつて、その bonheur は le monde にあつては幸福としての fin aisée を un jour de succès を、または complaisance agréementée de ciel et de luxe などを内容とする bonheur établi, domestique ou non としては bonheur (前述参照) ではない。

O Saisons, ô Châteaux じ

J'ai fait la magique étude

Du Bonheur, que nul n'élude.

私の手がけた幸福の

秘法を誰が脱れ得よう。

どうして、あつて Delires, II, p. 60, 61 じ fatalité du bonheur ; Le Bonheur était ma fatalité, remords, mon ver —— 幸福の宿命、『幸福』は俺の宿命であつた、悔恨であつた、身虫の虫であつた。——とつてゐる意味での bonheur である。それは一切の存在の根拠としての Néant を行ふことの幸福であり、有即無、無即有、汚濁即清浄、清浄即汚濁としての神の世界に安住することの幸福であり、それは不幸の中にあるなご幸福、じは le chant clair des malheurs nouveaux とつてあるやうに、不幸の中からあげられる清澄な歌声ともいふべき世界であり、抽象的観念的ではない、此岸の有に足を下した絶対の幸福

であった。かかる意味での幸福の signes をもった femmes の意である。

dont, moi, j'aurai pu faire de bonnes camarades : —
 やあ、 Je n'aime pas les femmes といふ Mauvais Sang, p. 23
 やあ Mais l'orgie et la camaraderie des femmes n'étaient interdites — だが酒宴も女たちとの交友も、俺には禁じられてゐた——といつてゐるのだが、上記のやうな意味での femmes avec les signes du bonheur が存するとすれば、それこそ bonnes camarades とするものができたであらう。

des brutes sensibles comme des bûchers : —
 brutes sensibles とは le monde 逸脱の人間に対して、情容赦もなく責め立て、報復を加へようとする le monde をやつてゐるものと考へられる。sensibles は直接には bûchers との関係で言つてゐる言葉で、めづめらと燃えつきやすいことをいふのであるが、brutes sensibles としては、le monde に対処する上での sens にいつて言つてゐるわけである。したがって le monde の掟にそむき le monde から逸脱しようとする人間に対しては情容赦もなく責め立て報復を加へようとする点をやつて brutes sensibles とするであらう。

ところが L'Epoux infernal が bonnes camarades とすることができやうな人間は、いづれも le monde 否定を契機とするものであるから、かかる brutes sensibles によつて、まっやみに dévorer されてしまふわけである。したがって結局現実には bonnes camarades とすることのできるやうな女は、この世に存せず、世俗の象徴としての

femmes だけだといふことになるわけだ。

◁ Je l'écoute faisant de l'infamie une gloire, de la cruauté un charme. ▷ Je suis de race lointaine: mes pères étaient Scandinaves : ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang.
 — Je me ferai des entailles partout le corps, je me tatonnerai, je veux devenir hideux comme un Mongol : tu verras, je hurlerai dans les rues. Je veux devenir bien fou de rage. Ne me montre jamais de bijoux, je ramperais et me tordrais sur le tapis. Ma richesse, je la voudrais tachée de sang partout. Jamais je ne travaillerai ▷
 Plusieurs nuits, son démon me saisissant, nous nous roulions, je luttais avec lui! — Les nuits, souvent, ivre, il se poste dans des rues ou dans des maisons, pour m'épouvanter mortellement. — ▷ On me coupera vraiment le cou ; ce sera dégoûtant. ▷ oh! ces jours où il veut marcher avec l'air du crime!

妾は、汚辱をも誇りと化し、冷酷をも魅力と化してしまふあれの言ふ事に、聞き惚れるのです、『俺は遠い国の種族の生れた。俺の先祖はスカンデナヴィヤの人々だ。奴等はお互の腸腹を刺違へては、血を吸り合つたものだ。——俺は身体到る所、切傷だらけにしてやらう、鯨をしてやらう、俺はモンゴルみたいに醜い姿になりたいんだ。見てゐろ、今に往來を喚き歩いてやるから。怒りで狂気になりたいのだ。俺に宝石などを見せてはならぬ、見せると〔四字省〕俺はマツトの上

に腹這ってのたうち廻るだらう。俺の財貨〔富〕は血だらけに染つてゐてほしいのだ。俺はどうあつても働くまい……』幾夜となくあれの悪魔は妾を捉へて、私たちはころげ廻り、妾はあれと掴み合つたのでした。——夜は屢々泥酔して、方々の往来だの家の中だのに妾を張り込んでゐて、死ぬ程こはい目にあはせるのです。——『ほんとにこの首が、すっぱりやられちまふだらう。こいつは味気なからうぜ。』あゝ、この頃と来たら、あれは罪をひけらかして歩かうとしてゐるのです。

Je n'aime pas les femmes …… と語つてゐる言葉や、その他本篇に語られる L'Époux infernal の言葉や、Vierge folle にまつて語られる L'Époux infernal の言動は多く、Le monde の女の立場からすれば infamie である、cruauté であるが、それは根源的な幸福の世界、douceur の世界に根柢があるだけだ。 Ses délicatesses mystérieuses n'avaient séduite, (p. 42.) というところをいひ Vierge folle をあつてゐるものがあつてゐる。 faisant de l'infamie une gloire, de la cruauté un charme という所だ。

Je suis de race lointaine : mes pères étaient Scandinaves : ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang : ——

この Je suis de race lointaine : mes pères étaient Scandinaves という言葉は、ランゴオの世界の具現せられた世界としての Gaule の世界、Barbare の世界、Antique への憧憬から出る言葉である (Cf. Antique, Barbare, Michel et Christine, etc., etc., ……)。今、

の一二例を引用しておかう。

Cf. Soleil et Chair.

—— O Vénus, ô Déesse!

Je regrette les temps de l'antique jeunesse,

Des satyres lascifs, des faunes animaux,

……………

Je regrette les temps où la sève du monde,

L'eau du fleuve, le sang rose des arbres verts

Dans les veines de Pan mettaient un univers!

……………

——おお、ヴィーナスよ、おお、女神よ！

僕はなつかしく想ふ、かの太古の、青春の時代、

色好みの半獣神や獣じみた牧神の時代を。

……………

僕はなつかしく想ふ、地球の生氣と大河の水と

緑の樹々のばら色の血が、牧羊神の血管の中に

別の宇宙を流してゐる時代を！

Cf. Mauvais Sang, p. 13.

J'ai de mes ancêtres gaulois l'oeil bleu blanc, la cervelle étroite,

et la maladresse dans la lutte. Je trouve mon habillement

aussi barbare que le leur. Mais je ne beurre pas ma chevelure.

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs

d'herbes les plus ineptes de leur temps.

白碧の眼と、小さな脳味噌と、喧嘩の拙さとを、俺は祖先のゴオル人たちから承け継いだ。この服装にしたって、彼等なみの野蛮さだ。まさか髪の毛にバターをなすりはしないが。

ゴオル人とはその当時最も不器用な野獣の皮の剥ぎ手であり、草を燎くのも下手な人種だった。

即ち、この *L'Époux infernal* の世界が *Le double sexe* (*Antique*) なる言葉で表現せられてゐるやうな主客未分融合の *Nature* の世界であることを語ってゐるわけである（前述参照）。

Ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang : —

これはその世界が渾沌未分の世界であることを象徴する言葉であらう。*sang* は *Mauvais Sang* がすでにさうであったやうに、各々の人をして、各々の人たらしめる生得のものとして言ふわけだが、その血をすすり合ふとは、自他それぞれに生得の *sang* をうけながら、自他が融合未分の一体であることを意味する言葉であらう。*Scandinaves* がその具現した世界とみてみたわけである。*Une Saison en Enfer*, p. 7 以下

Jadis, si je me souviens bien, ma vie était un festin où s'ouvraient tous les coeurs, où tous les vins coulaient.

昔ては、若しはっきりと思ひ出すなら、俺の生活は饗宴であった、全ての人の心は開き、あらゆる葡萄酒は流れ出した饗宴であった。

とらうてゐる。*Scandinaves* の世界はかかる *festin* の世界であったのである。そこには、すべての心が通じ合ひ、開かれてをり、すべての酒の流れ合ふ *festin* があつたのである。*Dormeur du Val* 以下

*Il dort dans le soleil, la main sur sa poitrine
Tranquille. Il a deux trous rouges au côté droit.*

太陽を浴びて彼は眠る、動かぬ胸に腕をのせ、右の脇腹に赤い穴を二つもあけて。

といつてゐる。これはイメージとしても、このところに通ずるものがある。

*Je me ferai des entailles partout le corps, je me tatouerais,
je veux devenir hideux comme un Mongol : —*

ランボオの世界は、前述のやうな、あばらに穴をあけて血をすすり合つてゐた *Scandinaves* といふやうな言葉で象徴せられたやうに、主客の未分融合、自他の融合一体をなす *Nature* の世界であり、かかる世界の具現を *Antique* に、また *Barbare* に認めたのである。その意味における一種の *barbarisme* であつたといつてもよいわけである。ここに出てくる *entailles*, *tatouer*, *hideux* も、かかる *barbarisme* の一つの具体的姿として、かかる *entailles*, *tatouer*, *hideux* が出てくることからは、現世 *le monde* の醜悪なる、*vicieux* なる一面を象徴するものがあり、これは即ち、ランボオの世界における否定を媒介とする、現世の絶対肯定の意を象徴するものと考へられる。

Cf. *Adieu*, p. 86.

Il faut être absolument moderne.

Point de cantiques : tenir le pas gagné. Dure nuit! le sang séché fume sur ma face, et je n'ai rien derrière moi que cet

horrible arbrisseau! Le combat spirituel est aussi brutal que la bataille d'hommes ;

Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons aux splendides villes.

..... et il me sera loisible de posséder la vérité dans une âme et un corps.

断じて近代人でなければならぬ。

讚美歌はない。ただ手に入れた地歩を守る事だ。辛い夜だ、乾いた血は、俺の面上に烟る、そしてこの恐ろしい小さな木の外、俺の背後には何物もない……精神の戦も人間の戦と同様にむごたらしい。……

暁が来たら俺達は、燃え上る忍辱の鎧を着て、光り輝く街々に這入らう。……

……そして、俺には、一つの魂と肉体との裡に、真実を所有する事が許されるだらう。

その他 Les Illuminatons の意味は Barbaric もかかる意味での barbarism を象徴するものである。"Le pavillon en viande saignante sur la soie des mers et des fleurs arctiques" —— 血を滴らす生肉の旗は、海の網と北極の花々の上に。—— という表現も、否定を媒介とする絶対肯定の意を現はすものであり、その viande saignante は、この場合 entailles, tatouer, hideux に対応する言葉であり、現世の悪、醜悪の一面を象徴する言葉である。しかもかかる現世の汚濁醜悪の象徴たる viande saignante が、清浄なる汚れを知らぬ soie des mers et des fleurs arctiques と相即するところに、神の世界としての

地獄の一季節註解(十)

douceur が田舎じいさんの意味 (Cf. Barbare.)。Mauvais Sang, p. 20 以下

On ne part pas. —— Reprenons les chemins d'ici, chargé de mon vice, le vice qui a poussé ses racines de souffrance à mon côté, dès l'âge de raison —— qui monte au ciel, me bat, me renverse, me traîne.

出発は見合せだ。——この身の悪徳を背負って、また足元の道を辿り直すでしょう。分別がつく年頃になってこの方、俺の脇腹に苦悩の根を下した悪徳を、——空にも翔り、俺を叩きのめしては曳摺り廻す悪徳を背負って。

……といっているのも、この意味におつてである。Les Mains de Jeanne-Marie におつて

Une tache de populace

Les brunit comme un sein d'hier ;

Le dos de ces Mains est la place

Qu'en baisa tout Révolté fier!

この手は、しなびた乳房のやうに、
賤民の汚点で茶色に染まったのだ。

この手の甲こそ、昂然たる

反逆の徒が接吻した場所!

……といつてゐる。かかる汚れた手、hideux の世界にこそ、キリスト教的ならぬランボオの世界があったのだ。それは単なる抽象的觀念的な彼岸の清浄界ではなかったからである。具体的な此岸における天国、神の世

界として、汚濁即清浄、清浄即汚濁として現世の絶対肯定的な意味をもつてゐたからである。Le chant clair des malheurs nouveaux (Génie)——新しい不幸の清澄な歌声——といふ言葉が語つてゐるやうに、悪にゐてゐないと、いふ性格が見られるのである。したがってそこには現実の vice を背負ひこんだ hideux な一面をもつてゐたのである。単なる抽象的観念的な彼岸の世界ではなく、具体的な réalité——それは必然的且 épineuse であり、rugueuse であるわけだが——に足を据ゑた世界であれば、——その故に—— toutes les richesses flamboyant (Mauvais Sang, p. 23.) とつひ、aquarium ardent (Bottom) とつひのやうな、生々潑潑とした生命の展開が可能になつたのであり、ennui を超克することもできたのである。——しかもそれが清浄なる神の世界に転換せられるとすれば、それは hideux であつて、hideux ではなくつゝやうじになるわけである。この Je me ferai des entailles partout le corps, je me tatouerais, je veux devenir hideux comme un Mongol とつひ言葉は、かかるランボオ的世界の一面を語る言葉として考へられるべきものであらう。Mongol はもちろん、上記の意味での barbarisme の象徴である。

tu verras, je hurlerai dans les rues. Je veux devenir bien fou de rage : ——

hurler とは le monde に対する否定的態度を示すものである。
rage も同様にして le monde に対する否定的態度としての rage であり、その結果としての fou である。即ち先述のやうに fou は délire, désordre, dérèglement 又一種の言葉であり、le monde の否定と出

てきたものであった。ランボオ的世界の本質的モメントをなすものとしての fou であつたのである(先述参照)。

Ne me montre jamais de bijoux, je ramperais et me tordrais sur le tapis : ——

bijoux は普通いづれも、ランボオ的世界の往相面、寂靜面を象徴する語として使はれてゐる。

Cf. Mouvement.

Car de la causerie parmi les appareils, le sang, les fleurs, le feu, les bijoux,

Des comptes agités à ce bord fuyard,

—— On voit, roulant comme une digue au-delà de la route hydraulique motrice,

Monstrueux, s'éclairant sans fin, —— leur sock d'études ;

何故ならば、種々な装置や、血や、花や、火や、宝石の間の談笑から、この敗走する船の上の興奮した計算から、

—— 恰も、水力発電の水路の彼方の堤防のやうに轟きながら、怪物のやうに、限りなく輝きながら、—— 彼等の研究の蓄積を眺めて

みるのだ。

Cf. Enfance.

Dames qui tournoient sur les terrasses voisines de la mer ;
enfants et géantes, superbes noires dans la mousse vert-de-gris, bijoux debout sur le sol gras des bosquets et des jardins dégelés ………

海のほとりのテラスに渦巻く貴婦人の群。少女たちや巨大な女たち、緑青の苔の中には見事な黒人の女、木立と雪解けの小庭の肥沃な土の上に、直立する宝石の装身具、……

Cf. Bottom.

Je fus, au pied du baldaquin supportant ses bijoux adorés et ses chefs-d'oeuvre physiques, un gros ours aux gencives violettes et au poil chenu de chagrin, les yeux aux cristaux et aux argents des consoles.

俺は、数々の宝石と肉体の傑作とを支へた天蓋の足許で、華卓子の玻璃と白銀の器物に眼を据ゑて、身は苦悩の白髪に覆はれ、紫の歯齧を出した一匹の巨きな熊であった。

かかる bijoux を見せるなどは、単なる往相面には止り得ぬ有化還相面の立場を語るものでもある。そなた je hurlerai dans les rues. Je veux devenir bien fou de rage とつひ、その否定行を語つてゐるのだが、やはりとて、けつして単なる否定的な死の寂靜面には止り得ぬ有化還相面の立場を語るものでもある。だからこれにじつじつ je ramperais et me tordrais sur le tapis とつひのでも。

この je ramperais et me tordrais sur le tapis とつひのは、Nuit de l'Enfer の冒頭における

La violence du venin tord mes membres, me rend difforme, me terrasse.

劇毒に四肢は振れ、形相は変り、俺は地上をのた打った。
を思はせるものがある。この Nuit de l'Enfer が先述のやうに有化還

相行における苦悩行を語つてゐたやうに、ここも単に往相的寂靜には止り得ぬ有化還相行における苦悩の姿を語らうとする言葉であると考へてよいであらう。だから、また、これにじつじつ Ma richesse, je la voudrais tachée de sang partout じつじつと。

Ma richesse, je la voudrais tachée de sang partout : —

richesse けれどもオオオオ的世界を象徴する言葉である、de l'or, trésor など (Cf. Mauvrais Sang, p. 19, etc., etc., ………) と同様一連の言葉であり、かつ生々潑潑たる流転展開の豊かさの意をふくむ言葉である。

Cf. Mauvrais Sang, p. 23.

Dans les villes la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire, comme une glace quand la lampe circule dans la chambre voisine, comme un trésor dans la forêt! Bonne chance, criais-je, et je voyais une mer de flammes et de fumée au ciel ; et, à gauche, à droite, toutes les richesses flamant comme un milliard de tonnerres.

突然、俺の眼に、街々の泥土は赤く黒く見えた、隣室の燈火が動く時の鏡のやうに、森に秘められた宝のやうに。運が好いぞ、と俺は叫んだ。そして俺は天上に焰と煙との海を見たし、左に右に、数限りもなる霹靂のやうに、燃え上るあらゆる豊麗を見た。

Cf. Mauvrais Sang, p. 26.

Le sommeil dans la richesse est impossible. La richesse a toujours été bien public. L'amour divin seul octroie les clefs

de la science.

豊かさの中で居眠ってゐるのは不可能だ。豊かさとは常に公衆の利益「もの」だったのだ。神の愛だけが智識の鍵を与へてくれる。

Cf. Vies, II.

Exilé ici j'ai eu une scène où jouer les chefs-d'oeuvre dramatiques de toutes les littératures. Je vous indiquerais les richesses inouïes. J'observe l'histoire des trésors que vous trouvez. Je vois la suite! Ma sagesse est aussi dédaignée que le chaos. Qu'est mon néant, auprès de la stupeur qui vous attend?

ここに、流嵐の身となって、俺はあらゆる文学の演劇的傑作が演ずる一幕をわがものとした。君達に未聞の富をみせようか。俺は、君達の見付け出した宝物の歴史を観察する。すると次に来るものが見える。混沌をさげすむやうに、俺の叡智をさげすむのだ。君達を待つ昏睡に比べては、俺の虚無「無」とはそもそも何か。

これらの参照箇所に出てくる言葉からも考へられるやうに、ランボオの世界としての *richesse* は、赤く黒い泥（悪、相対的な *le monde*）が *glace*（清浄、寂靜）であるといふやうに、互に矛盾するものの転換相即に現成する *Néant* におつて、はじめて *nihil, ennui* の超克が可能となり、そこに生々潑潑たる生命の展開が可能となる、その豊かさの面から *Néant* をむしろ言葉なのである。同時にこれが *chefs-d'oeuvre dramatiques de toutes les littératures* であると共に、それは *public* なものであり、また *amour divin* の行ぜられる世界であ

ったのである。

かくて、この *richesse* は、単なる彼岸の清浄なる世界ではなく、具體的な此岸における *réalité rugueuse* に、*réalité épineuse* に足を据多たところに展開せられる絶対的世界であり、したがって汚濁即清浄、清浄即汚濁として、そこに汚濁の一面を契機としてふくんであるわけである。かくて *je la voudrais tachée de sang partout* といふのである。前掲 *Adieu* p. 86 以下

Point de cantiques : tenir le pas gagné. Dure nuit! le sang séché fume sur ma face, et je n'ai rien derrière moi que cet horrible arbrisseau! …… Le combat spirituel est aussi brutal que la bataille d'homme.

讚美歌はない。ただ手に入れた地歩を守る事だ。辛い夜だ、乾いた血は、俺の面上に烟る、そしてこの恐ろしい小さな木の外、俺の背後には何物もない……精神の戦も人間の戦と同様にむごたらしい。

といふ所以であり、同様前掲 *Les Mains de Jeanne-Marie* 以下

Une tache de populace

Les brunit comme un sein d'hier ;

Le dos de ces Mains est la place

Qu'en baisa tout Révolté fier!

といふ所以である。また *Une Saison en Enfer*, p. 8 以下

J'ai appelé les fléaux, pour m'étouffer avec le sable, le sang.

Le malheur a été mon dieu. Je me suis allongé dans la boue.

連枷責めの折檻を招いたが、それも血と砂とに塗れて自ら窒息する

ためだ。不幸は俺の神であった。俺はながと泥の中に寝そべった。といふ所以である。

Jamais je ne travaillerai : —

この有化還相行としてのランボオ的世界においても、それが *le monde* の否定を媒介とするものである以上、功利的実利的労働は否定せられるわけである。『*Jamais je ne travaillerai*』といっているのは、かかる功利的実利的労働の否定の意味でいっているのである。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 28.

La vie fleurit par le travail, vieille vérité : moi, ma vie n'est pas assez pesante, elle s'envole et flotte loin au-dessus de l'action, ce cher point du monde.

労働によって生活が花咲くとは、今も変らぬ真実だ。「古めかしい真理だ。」処が俺の生活は十分目方が掛からない。世界の重点、行動とくちもの「この世の大切な点である、たつきとくちもの」遙か上層に飛び去り、濛っているのだ。

Délires, I, p. 46 『*il ne travaillera jamais*』と云う『*il ne*』か『*Mauvais Sang*, p. 25』

Les blancs débarquent. Le canon : Il faut se soumettre au baptême, s'habiller, travailler.

J'ai reçu au coeur le coup de la grâce.

白人どもが上陸する。宗法儀典。洗礼を受け、着物を着て、働かねばならない。

俺は聖寵の一撃を心臓に受けてみた。「受けた。」

といっているやうに労働そのものを否定してゐるわけではない。

Délires, II, p. 60』

L'action n'est pa la vie, mais une façon de gâcher quelque force, un énervement. La morale est la faiblesse de la cervelle.

行動「たつき」は生活ではなくて、或る種の力、或る神経の苛立ちを廉売する方法なのだ。「或種の力の浪費だ。消耗だ。」道徳とは脳髓の弱さだ。

『*il n'est pas la vie, mais une façon de gâcher quelque force*』が否定せられたる『*il n'est pas la vie*』である。

Plusieurs nuits, son démon me saisissant, nous nous roulions, je luttais avec lui : —

『*il n'est pas la vie, mais une façon de gâcher quelque force*』

Pitoyable frère! ……

Et, presque chaque nuit, aussitôt endormi, le pauvre frère se levait, la bouche pourrie, les yeux arrachés, — tel qu'il se rêvait! — et me tirait dans la salle en hurlant son songe de chagrin idiot.

『*il n'est pas la vie, mais une façon de gâcher quelque force*』……*et nous errions, nourris du vin des cavernes et du biscuit de la route, moi pressé de trouver le lieu et la formule.*

憫れな兄貴だ。……

殆ど毎夜、眠ったかと思ふと、憫れな兄貴は起き上り、口は汚れ、眼玉は飛び出し、——夢でも見てゐたのか、——俺を部屋の中に引摺り出して、白痴のやうな悲哀の夢を喚き立てるのだ。

……そして二人は、洞窟の酒をのみ街道のビスケットを嚙って、放浪した、俺はと言へば、空間と公式とを見出さうとあせりながら。とらつてあるところと対応するものがある。もちろん、これがランボオの立場で書かれてゐるのに対して、*Délires, I* の *Je* は *Vierge folle (le monde)* の立場から書かれてゐて、立場の相違はあるが、融和な対立葛藤の点で全く対応するものがある。

この *L'Époux infernal* の *Vierge folle* の間には絶対の断絶がありながら、しかも一方にまつ *Ses délicatesses mystérieuses m'avaient séduite* (p. 42.) とつていふべきところ、この *démon* が *Vierge folle* をとりこめてはなちなつのである。根源からゆり動かす魅力に、*douceur (Barbare)* に惹かれてゐるわけである。このやうに惹かれながら、所詮は融和し得ぬ対立葛藤があるのだ、*nous nous roulions, je luttais avec lui* とつて現象が生ずるのである。

Les nuits, souvent, ivre, il se poste dans des rues ou dans des maisons, pour m'épouvanter mortellement. — *On me coupera vraiment le cou ; ce sera dégoûtant. > Oh! ces jours où il vent marcher avec l'air du crime : —*

この *On me coupera vraiment le cou* とつては、*le monde* の否定、*le monde* における分別の立場の、はからひの否定を意味する言葉であらう。丁度、*Honte* において知性、はからひの否定を語つてゐるのと同様である。かかる知性、分別、はからひの否定を媒介とするところにおいて、それらを超えた一元絶対の神の世界が現成し得るからである。

Cf. *Honte*.

Tant que la lame n'aura
Pas coupé cette cervelle,
Ce paquet blanc, vert et gras,
A vapeur jamais nouvelle,

(Ah! Lui, devrait couper son
Nez, sa lèvre, ses oreilles,
Son ventre! et faire abandon
De ses jambes! ô merveille!)

Mais, non ; vrai, je crois que tant
Que pour sa tête la lame,
Que les cailloux pour son flanc,
Que pour ses boyaux la flamme,

N'auront pas agi, l'enfant
Gèneur, la si sottie bête,
Ne doit cesser un instant
De ruser et d'être traître.
変りばえせぬ湯気たてて、
白くて生で脂ぎったこの荷物、
この脳味噌奴をば 刀もて

えぐりとらないかぎりには、

(ああ、奴め、切らさばなるまい、
その鼻を、唇をも、耳も、その腹も！
棄てずばなるまい、その足も！

おお、すばらしやー)

それでも駄目だ、本当に、俺は思ふ、
奴のあたまをたたき切り、
奴の腹には石を詰め、

五臓六腑を 火炙りに、

しないかぎりには、小うるさい

金でこ頭の小僧っ子が

たくらみしたり裏切ったり

寸時もやめる筈がない、

O Saisons, ô Châteaux にやぶつめ

Ce Charme! il prit âme et corps.

Et dispersa tous efforts.

身も魂も恍惚けては

努力もへちまもあるものか。

「この魅力、身も魂も魅せられて

自力のはからひは跡方もない。」

といつてあるが、この *dispersa tous efforts* とは、一切のはからひなき、分別を超えた立場を語つてゐるのであらう。それは *le monde* に対処するすべての否定であるからには、一面において *dégoûtant* でもあるわけだ。ことに *Vierge folle* の身になってみれば *dégoûtant* であるわけだ。

かかる否定的立場における *L'Epoux infernal* は、丁度 *Bateau ivre* における前半の *Bateau* が *ivre* であつたやうに、*ivre* であつたわけである。この *ivre* は象徴的意味における *ivre* であらう。否定行における、また否定の彼方の寂靜の世界における陶酔を語つてゐるわけである。

そしてかかる *L'Epoux infernal* の言葉や *ivre* な状態は、本質的に *le monde* に属し、惹かれたながらも所詮はその世界を理解し得ぬ *Vierge folle* をはなはだしく驚かすわけである。

il veut marcher avec l'air du crime : ——

これは既述のやうに、*le monde* の立場からの言葉である。 *le monde* 否定の立場を示すものである。 *L'Epoux infernal* の激しい否定行の日々を語る言葉である。

Cf. *Une Saison en Enfer*, p. 8.

Je me suis séché à l'air du crime. Et j'ai joué de bons
tours à la folie.

罪業の風に身は干涸らびた。而も俺が演じたものは底抜けの戲謔だった。

▼ *Parfois il parle, en une façon de patois attendri, de*

la mort qui fait repentir, des malheureux qui existent certainement, des travaux pénibles, des départs qui déchirent les coeurs. Dans les bouges où nous enivrons, il pleurait en considérant ceux qui nous entouraient, bétail de la misère. Il relevait les ivrognes dans les rues noires. Il avait la pitié d'une mère méchante pour les petits enfants. — Il s'en allait avec des gentilleses de petite fille au catéchisme.

—— Il feignait d'être éclairé sur tout, commerce, art, médecine. — Je le suivais, il le faut!

時々あれは、やさし味の籠った田舎言葉で、人々の悔悟をそよる死の事や、何処かに屹度居るに違ひない不幸な人々の事や、つらい稼ぎや、身を切られるやうな門出の話をします。私達が酔ひ痴れて過した陋屋で、私達を取巻いてゐた人々の悲惨の家畜の群のやうな身も思つて、あれは泣きました。暗い往来に仆れた酔ひどれ共を起してやつた事もありました。あれは幼い子供達を迎へる根性曲りの母親の情を持つてゐたのです。——あれは教理問答を習ひに通ふ小娘のやうな優しい心を持ってゐました。——あれは何事にも明るく振りをして居ました。商売にも、芸術にも、医学にも。——妾はついて行きました。外に仕方がないのです。

Parfois il parle, en une façon de patois attendri, de la mort qui fait repentir, des malheureux qui existent certainement, des travaux pénibles, des départs qui déchirent les coeurs:—

en une façon de patois とらつてゐるのせ、この L'Epoux infernal の語る言葉が le monde に通じ難い、十分に理解され難い点をやつて patois とらつてゐるのとあり、Democratie にあつてか、

le drapeau va au paysage immonde, et notre patois étouffe le tambour.

旗は、穢しい風景を口指して行き、俺達の方言は、太鼓の息の根を止める。

と語つてゐる。——この tambour を le monde の tambour やつてゐる。——また、Nuit de l'Enfer, p. 35 や

Là-bas, ne sont-ce pas des âmes honnêtes, qui me veulent du bien ……… Venez ……… J'ai un oreiller sur la bouche, elles ne m'entendent pas, ce sont des fantômes.

見下せば、この俺の身を思ふ律義な靈魂の群ではないのか……来るがよい……枕を口に当てがった俺の言葉は、彼奴等には聞きとりにくい。靈魂は幽霊どもだ。「それは幻だ。」

といつてゐる。

patois attendri とは、この後、Il avait la pitié d'une mère méchante pour les petits enfants —— Il s'en allait avec des gentilleses de petite fille au catéchisme とらつて、また p. 46 じゃ愛、救済について語つてゐるやうに、その le monde, Vierge folle に対する救済の慈悲に出る言葉どもをこのに基く表現である。

かかる慈悲救済の思ひをめぐつて、une façon de patois attendri をめぐつて語るのせ、mort, malheureux, travaux pénibles, départ と

らである。即ち *le monde* において人の悔恨をそそる *mort* *le monde* において苦悩に悩む *malheureux* *le monde* における苦悩の *travaux pénibles* 人の心をひきさく人の世の別れについて語るのである。人間の苦悩を共に苦しみ、この苦悩からの解脱解放を思ふ愛と救済について語ってゐるわけである。その解脱解放を、一切の存在の根柢としての真理の認識、即ち叡智に求めたのであり、それは *Néant* を行ずるほどの自覚であり、*Néant* を行ずることは同時に絶対の愛を行ずるほどであったのである。

Dans les bouges où nous nous enivrions, il pleurait en considérant ceux qui nous entouraient, détail de la misère : —

ルルル Dans les bouges ヲウヘイシネシセ、キヤウリ p. 43 ヲ

Je suis de race lointaine : mes pères étaient Scandinaves : ils se perçaient les côtes, buvaient leur sang. — Je me ferai des entailles partout le corps, je me tatouerai, je veux devenir hideux comme un Mongol.

とじつてゐる言葉に照応する言葉であり、*le monde* の否定、*race inférieure*, *race lointaine* の一面を語る言葉である。かかる世界を *bouges* において具象化して語ってゐるわけである。

かかる *le monde* 否定の彼方としての *race lointaine* の世界は、寂靜の世界として陶酔の世界であった（先述、*Les nuits, souvent, ivre des* 参照）。*les bouges où nous nous enivrions* とじつてゐるわけである。

Cf. *Mauvais Sang*, p. 19.

地獄の一季節註解(十)

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. *Le melleur*, c'est un sommeil bien ivre, sur la grève.

差当っては呪はれの身だ、俺は祖国を怖れてゐる。砂浜にころりと臥して、眠りこけるのが何よりだ。

われわれをとりまく人々とは、*もちろん*、前述のやうに、*mort* に、*travaux pénibles* に、*départs* に、あるひは歎き悲しみ、あるひは苦しむ不幸なる人々であり、これら *le monde* の只中において苦悩にうごめく人間の苦悩を、共に苦しみ嘆き、涙するわけである。

これらの人々をわけて *bétail de la misère* ヲウダシセ、*Adieu*, p. 83 ヲ

Notre barque élevée dans les brumes immobiles tourne vers le port de la misère, la cité énorme au ciel taché de feu et de boue.

俺達の小舟は、動かぬ霧の中に高く騰って、悲惨の港を目指し、焔と泥の染みのついた空を負ふ巨大な都会を目指して、舳先をまはす。とじてゐるのと同じ意味で、即ち *feu* と *boue* とにまみれた、即ち苦悩にみち、悪にみち、汚濁にまみれた *le monde* の状態をわけて *misère* とじつてゐるのであり、その只中において、それからの解脱、脱却をはかることもできず、あるひはからはふともしない不幸な人達をわけて *bétail de la misère* とじつてゐるわけである。

Il relevait les ivrognes dans les rues noires : —

ルルル *rues noires* ㄱ *Enfance*, V ヲ

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain,

les maisons s'implantent, les brumes s'assemblent. La boue est rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔って、人々の家が並び立ち、霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。

この『Mauvais Sang』の Ville monstrueuse を意味する。その他 Mauvais Sang, p. 23, — Dans les villes la boue n'apparaissait soudainement rouge et noire, ……等々参照のこと。したがって、この ivrognes はかかへる le monde の泥沼にあぐらをかき、意味するものではない。むしろ不幸な人々、bétail de la misère に対する慈悲救済を行ずるものではない。

Cf. L'Impossible, p. 69.

N'est-ce pas que nous cultivons la brume! Nous mangeons la fièvre avec nos légumes aqueux. Et l'ivrogneriel et le tabac! et l'ignorance! et les dévouements! — Tout cela est-il assez loin de la pensée de la sagesse de l'Orient, la patrie primitive? Pourquoi un monde moderne, si de pareils poisons s'inventent!

それといふのも俺達が、霧でも耕してゐるからではないのか。俺達は俺達の水気の多い野菜と一緒に、熱を啜ってゐる有様だ。そして、酒びたりだ、煙草だ、無智だ、献身だ。——何も彼もが、原始の国、東洋の思想と叡智とからは結構遠くにあるのではないか。こんなに毒物ばかりが製造されて、何が近代だ。

このやうに sagesse de l'Orient から遠く距つた poison としての ivrognes をつってゐるわけである。泥沼の中にあつて、これからの解脱

を知らなければかりでなく、むしろ泥沼に酔ひしれてゐる不幸な人達をよつていふわけである。

かかる慈悲救済行は、小児に対する une mère méchante の情をよつものである。慈母の情をよつものである。—— Il avait la pitié d'une mère méchante pour les petits enfants.

また、かかる慈悲救済は amour divin (Cf. Mauvais Sang, p. 26.) として catéchisme の金持の父のひびき、純一無雜の純い catechisme に通ふ petite fille の純い清純を、疑ふことを知らぬ親切りに満ち満ちてゐるわけである。—— Il s'en allait avec des gentilles de petite fille au catéchisme.

Il feignait d'être éclairé sur tout, commerce, art, médecine.
—— Je le suivait, il le faut : ——

Il feignait d'être éclairé sur tout, commerce, art, médecine といふわけである。この Délires, I とは直接表面では L'Epoux infernal が、これらの commerce を art を médecine にして語つてゐるものが出づつながら、これらすべてのものが所詮は、相対的虚偽の世界に過ぎないものであることを語つたのであらう。そのことに対して Vierge folle の立場から見て Il feignait d'être éclairé sur tout といふわけである。

事実ランボオは、これらの commerce を art を médecine が Voyant たる自己の立場から、いづれも相対的虚偽の世界に過ぎないことを、あつては身を託するに足りないものであることを随所に語つてゐるのである。

Cf. Mauvais Sang, p. 14.

J'ai horreur de tous les métiers. Maîtres et ouvriers, tous paysans, ignobles. La main à plume vaut la main à charru.

— Quel siècle à mains! — Je n'aurai jamais ma main.

ありとあらゆる職業がやり切れない。親方「教師」と職工、全ての百姓、「みんな百姓だ」、「穢はしい」。ペンを持つ手も鋤をとる手も同じ事だ。——なんと、手許り幅を利かせる世紀だろう。——俺は自分の手など決して使わぬ。

Cf. Ouvriers.

La ville, avec sa fumée et ses bruits de métiers, nous suivait très loin dans les chemins. O l'autre monde, l'habitation bénie par le ciel et les ombrages!

町は生業の煙と音を伴って、道々、遠くから俺達をつけて来た。お、別の世界だ、空と樹蔭に恵まれた住居だ。

Cf. Ville.

Ces millions de gens qui n'ont pas besoin de se connaître amènent si pareillement l'éducation, le métier et la vieillesse, que ce cours de vie doit être plusieurs fois moins long que ce qu'une statistique folle trouve pour les peuples du continent.

自分を識らうとする要求を持たぬこの幾百万の人々は、すべて一列一体、教育を、職業を、老齢を曳摺って行く。これでは人の生涯は、ある気違ひ染みた統計が、『大陸』の人々に就いてしらべた処より、幾層倍も短いものに違ひない。

地獄の一季節註解(十)

Cf. Délires, II, p. 51.

Depuis longtemps je me vantaïs de posséder tous les paysages possibles, et trouvais dérisoires les célébrités de la peinture et de la poésie moderne.

俺は久しい以前から、可能なかぎりの風景を掴んでゐるのが自慢だった、近代の詩や絵画の大家共は、俺の眼には馬鹿々々しかった。

Cf. L'Impossible, p. 69.

J'envoyais au diable les palmes des martyrs, les rayons de l'art, l'orgueil des inventeurs, l'ardeur des pillards; je retour-nais à la sagesse première et éternelle.

俺は殉教者の栄光を、芸術の光輝を、発明家の驕慢を、掠奪者の情熱を、かなぐり捨てた。俺は再び東洋に帰った。永遠の、当初の叡智に帰った。

Cf. Mauvais Sang, p. 16.

Oh! la science! On a tout repris. Pour le corps et pour l'âme, — le viatique, — on a la médecine et la philosophie, — les remèdes de bonnes femmes et les chansons populaires arrangés.

その、科学だ。人は全て飛び付いたのだ。肉体のためと靈魂のため。——臨終の聖餐の秘蹟、——医学もあれば哲学もある、——万病に効く売薬とうまく並べた流行歌だ。

かく le monde の一切が相対的虚偽であり、身心を託するに足りないことを説かれて、Vierge folle はついて行くわけである、行かざるを得なかったのである。〔未完〕